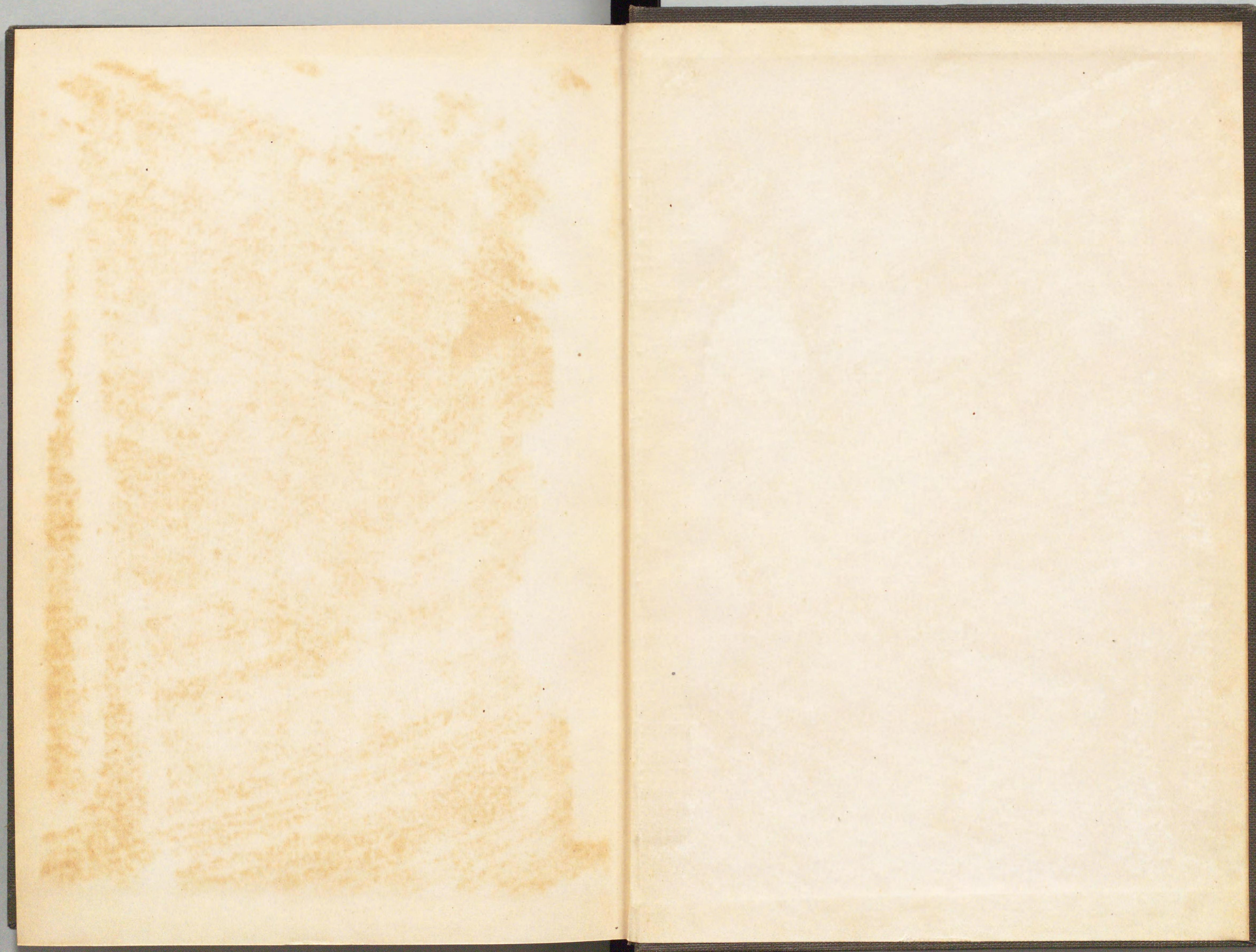




210.58
Ka9562k
0



00212627



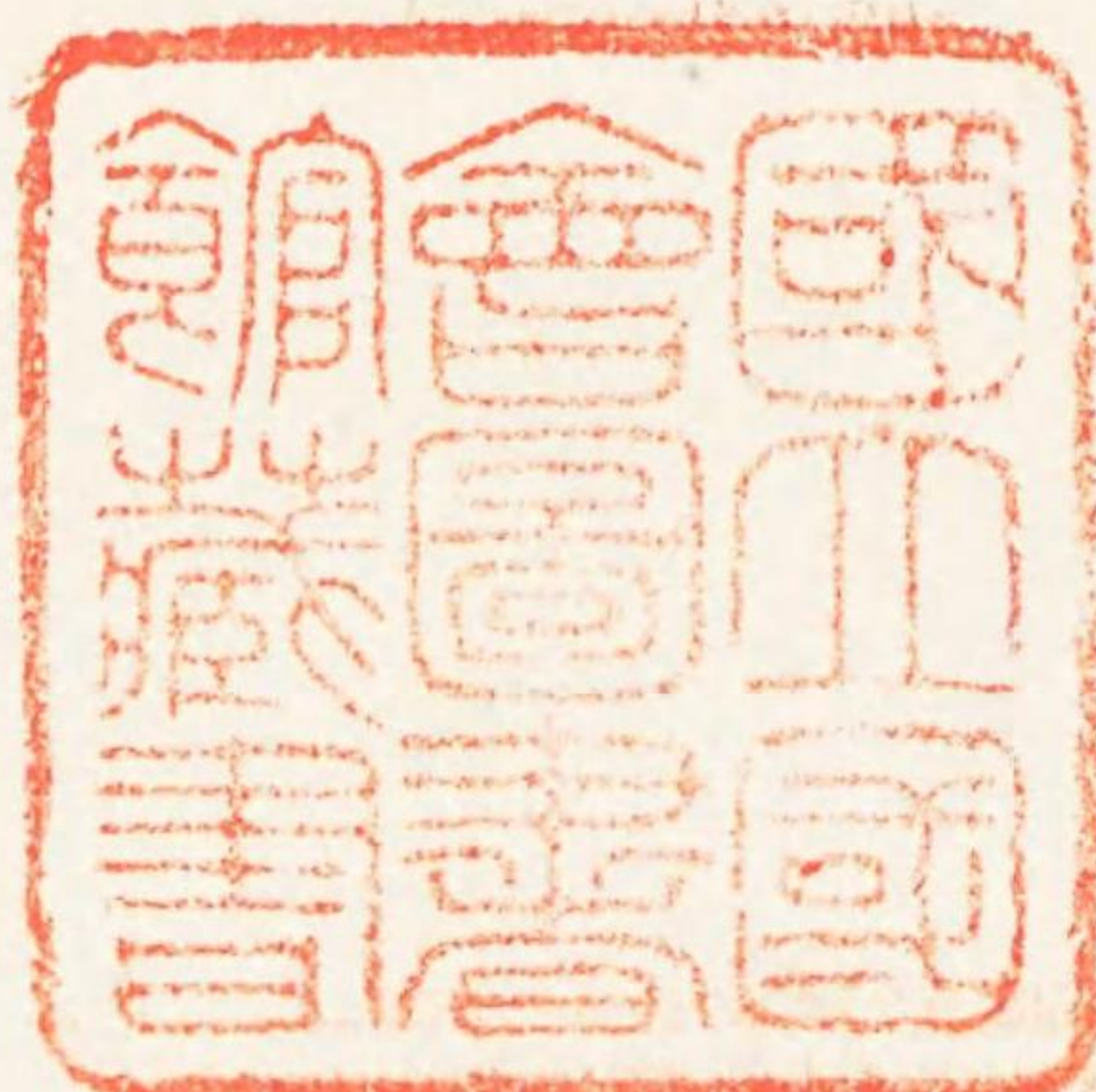
川路聖謨文書



第四

川路聖謨文書
第四





212627

川路聖謨文書 第四

目次

一 寧府紀事 第三
自嘉永元年正月廿九日
至同年十二月廿九日

目次



府紀事 三

弘化五年正月

○元日 晴 大書院におゐて與力同心郷同心等之禮をうけ表居間にゐ家
來共之禮を受ること例の如し

春到不春寧樂府門前拂地馬還車可憐今日千余里阿母思予爲咄嗟

大江戸のはるやいかにとさしのほる朝日のかけにまつ忍ふかな

かすか山松の梢の霞よりにはひ初たる朝霞かな

はるのいろをいさく川のいさみよとみきはにとくる氷なるらむ

あら玉のとしのはしめの初子の日かすかの野への小松ひかなむ

下車如夢又三元可愕揮鞭歲月奔窓外黃鸝肆新曲池頭綠柳舞輕喧閑身欲

午徐呼櫛小吏賀年纔集門嘆憶今朝東都在盃衣寵賜浴君恩

寧府紀事 (嘉永元年正月)

○二日 晴 けふは東大寺 御宮中院屋の 御靈屋春日八幡二月堂兩乘之
御門主へ參る一乘院は親王御門跡故御盃被下はなし御手毘布はかり也大
乘院は御盃被下あり大乘院は帶劔御側へ參る時脱劍一乘院は御次より脱
劍にて出る○去年いたつらなる悴あるもの勘當のことを申聞るなれ共不
聞よつて御仕置歎勘當のことに印形のこと爲致度と云義親より願出しよ
つて白洲へ出しみれば惡黨なから直なる風あるもの也白洲へ出ると手を
つき居れりわれ尋ぬるは何故にわか前へ出平伏するや聞へぬこと也わけ
をいへといひしに只如蜘蛛平伏するはかり也汝奉行は可恐もの故にかくす
るかと聞は然りといへり又問は奉行はいくらもあり父は天下に一人也奉
行は三寸頭をさくるころならば親には五六寸も下けて可然事也奉行と
百姓の辨別ある上はこの子わか療治の仕かたあり親父よわか詫る也勘當
はゆるさせわか療治はかく也とて同心に嚴敷縛らせて牢へ遣し極惡のもの
牢問のあとに骨をいたためぬ様に嚴敷牢問して汝親に勘當せらるゝ上は

公へ對したる惡事もあるへし白狀せよもしや惡事なくは以後孝行にする
かとて與力に申含めて朝夕親を拜することなどいひ聞せし故にいたく恐
入たるよし也其次親と一同に白洲へ出し親へ拜をいたさせしにをとなし
く拜する也われ親にいふは嚴父孝子を出すと云ふことあり子はいかにも
嚴敷すれば父を恐るゝより惡事をせぬこと近くいふに入牢してかれか恐
れて今わか前にて汝を拜するかこときの理也汝子を不便におもはゝ以後
嚴敷せよかゝるやつ故に教訓の上折檻し万々一過にて打殺とも大事なし
いかにや嚴敷するやといひ又子にもこのこと汝もよく聞おれといひしに
親子共に頻にぬかつく也以前はよからぬ子なりとも今の白洲の躰はしは
しなからも孝子といふとも同じきかことしさらは勘當をこの度はゆるせ
再ひ不孝になりたらは縛來れといひて引渡やりしに父の喜ひ大かたならず
頻になみたを流して子を一人ひろいたりとして深く謝して歸りたり乍去其
もの又この正月に惡事されてはならぬ故に大晦日に捕方の同心の廻り序

にかのものゝ宅へ遣せしに兩親も子も菜のことくに成て震ひ居たりよつて奉行の汝か子の正月に成酒をのみあしき遊ひなとしては不濟故に廻り序に見てこよと仰られたれは來れりいかに其後慎めりやいかにといひしに親共いたく忝おもひてわか子以前は既に勘當を願ふによつて其行跡のことは御察し玉はるへししかるに近頃は朝とく起て夜ふくるまで家業に精出し酒のむことの止しはさらにも言はずよからぬ友をも謝絶してめつらしく親にやさしくものいふ也この兩親の歡ひ全くに死せしものゝ再ひ生しに同じ難有御こと也やや忤め御奉行さまはかくまてになさるゝ也若又昔のことくならむには上は對し不相濟いかにといひしに子も頻に平伏せしかはもしわるくなりたらは忽に來りて召とり行かむ相構て今のこゝろ忘るなといひしに兩親はあな難有とて且なきかつ拜していくたひも禮を申せしと也同心共なほ近邊の風聞を聞しに生れかはりたることくに成しといふよしの書付を出せりこの子わか奉行中よくもたせたきもの也もち

たらはなみの人と成るへし賤女かみることく破れし衣をうたかるたならべし如くつきてさゝなみのことく成木綿を新なる衣より大事にするかことくこのものゝことわか奉行中惡事なき様に嚴敷すへしとおもふも可笑こと也このこゝろを予もおしひろめて大和一國へ及たけれども仁慈のこゝろたらすして手とゝくましとおもふ也乍去是非につとめて御觸の趣を戴て人別の減せぬ様勘當ものゝなき様にすへくとはおもふなり書經にも鞭官刑をなし朴教刑をなすといふことあり堯舜のみちにても嚴ならずして教行れぬことあり子産をは惠人と孔夫子の御賞しありしか其政はいかにも嚴敷もの也寛を以人を救ふべきために嚴をする也嚴刑と寛とは下劑と補劑とのことし疾ひをこらす藥なくては人を活すことはならぬ也嚴にみえてよくふわけをして元來の心底へ行てみれば仁心故に人助る也仁慈のやうにて姑息の政をなし末終に刑人の多出來は甘きもの食せて子を煩するに同じ一点の私なくともかくの如しまして評判のため人氣をとる

夜に入詔初
之式あり
金春清之丞
出高砂之東
北人給罷之
用人給罷之
出ル五獻日
清之丞行遣
御流奉之
御器開之
土器宅之
共酒之
みと酒之
ふたす
也

ために仁慈めきたることするは不仁の甚しきものなるへし

○三日 くもり暖氣也 兩三日氷なしけふは大書院は奈良市中之もの共表居間は出入之醫師并古梅園井戸屋治左衛門菊屋次郎左衛門の類獨禮也其外之出入町人は惣一同之禮を受る表居間二之間用人給人罷出る小書院は宮方御貸附懸り之町人等出るなら東坂西坂之穢多は土間に出る

○四日 微雨 佐久間修理方申遣たりし内孟子疑問之内旱乾水溢則變置社稷といふこと疑ふべきにあらず土龍を鞭なといふ類ふるき禮をあげられしなるへしといふ再問にこのケ條一篇の主意民爲貴社稷次之君爲輕といふにありて戰國の人民を殘害すること草艾のことくなれば國のもとたる民を重すへし君にもかへかたしといふことを示して時の君をおとろかさむのために辯舌を激烈に振はれしものなるへし其譯は水の出旱のする度に社稷を變置するならば堯に九年の水湯の七年の旱ありし時は堯湯の社稷を變置し給ひしや無覺束こと也早と水とに聖人の逢玉ひなは必み

つからとかめていましめ給ふへしその時に罪を社稷に歸せは聖人にあらす聖人の事ふる所を以社稷に事されはつくせりとはせすされは社稷を變置することはあるまじきことにてしかるにかゝることを辨して後世の法とせは北周の天元のとき暴厲なる主は却而神社をみたりに可打毀こともあるへしやいかにされ共孟子は漢の孝文孝經と孟子に博士を置せられ唐興りて十三經之内に被加朱文公も四書のうちへ舉られたる賢人の書なから聖典と肩を並らるゝ書なるを其美事はとらすして可疑ことの穿鑿するはわかあしきなるへしといひ遣したり○けふはなら町寺社之禮受る

○五日 晴 大和國寺社之禮を受る

○六日 雪 今夜七種をたゞく順作也わかかなの恐悅申上るよしにてのしめ麻にて出わかなにたにさくを添てありとりみれば

こゝろさし松のはいろのはつわかな千と世さかふるきみにさゝけむとあり此男俳偕うたをよむ故にかく興せしとみえし也むかしわか七くさ

をたゞくに鈍にして拍子をなしかたよくつてすりこ木に二ツ三ツ敲き
いまた俗をまぬかるゝことあたはずなとへらす口をきゝしを思ひ出て
上之御恩を難有思ふ也

○七日 晴 大書院に春陽之禮を受ること昨年のことしけふは儒者へ
屠蘇を給さするよつて予も酒を用ひたりともに詩を賦しあるはうたよみ
てたのしみ近頃酒一合以上に及へはかならず筆をとりていろゝのくた
らぬ物をかくことたのしみ也遊野郎か新内ふし藩士かうたひの如し夫故
に家來に墨をすらせ置て舊作の詩歌などを記して居たりしに江戸より御
用狀來り十二月廿六日に新右衛門御勘定組頭次席被仰付同日に鍊作留役
當分助被仰付たるよしの書狀に一際にきはひし也即坐右之趣兩御隠
居様申上新右衛門より書狀之趣等具に入御聽候處新家之轉役内外之世
話新右衛門洪大の世話なりとて御歡ひ大かたならず候われ昔十三歳の時
なるへし石川左近將監か小普請支配たりし時初逢對に出るとつぎか

み下を 行道院様のつくり被下たりいさいなりへ詣よとて其新調肩衣を
着せしに足袋なし紺足袋などをはきていなり詣せし也このいなりは北御かち町也いなり
より歸りしに 行道院様は御巨燧にいらせられなから汝は少しく書をよ
みぬ評定所留役たらむもするへからすわか昔世話になりし御代官の菅谷
彌五郎なども留役より出し人なりしか少々書物をよみしなと仰られき然
ルにおもひもかけず支配勘定出役せし時今の土屋紀伊守世話のよし此人其頃
まてはしらす吟味役に成小普請奉行になりて評定所書物方當分助といふものに
りし時紀伊守の共ことなわれに語り也なり追々御取立にて諸大夫以上之御役とはなれり其縁を引しか新右衛門
も書物方鍊作も書物方に成てかくの次第實家の幸三郎迄評定所留役の見
込といふことに先ツ評定所番は被仰付たりき是は矢部駿河守の了簡也これにて内藤家御譜代とは成れり
いかなれば兄弟四人みな評定所に身を起しけむ不思議なること也難有
御恩也評定所もし神社ならば月々詣て御恩を謝すへき位のこと也しかる
にこの度新右衛門に被仰渡は別段出精と之御事に十ヶ年にも格式を被

下たり組頭格はわれも勤たり寺社奉行所之握機職實に大役也難有のかきり恐入たるのかきり也これみな公儀の御恩内藤家御先祖の徳澤の積累によるものなるへし評定所の恩を思は、公事吟味物等少も我と名聞利欲をわすれ仁慈を以第一として御奉公すへき也三世爲將は道家のいむところといふことを司馬迂もいひたり刑名の事によりて昇るもの鬼神のいましめあるへき可恐可慎事也乍去新右衛門か書狀之内にことごとく戒慎恐懼のことをいひ越たりこれ少々わかこゝろやすきのうち也わか組頭格に成しとき申せしはわれは勤向組頭格にて一段下りたり久須美轉役に又一段下りたり以前よりはおもひ切しこと出來さるよしをいひしに脇坂中書の夫にてわれも安心すると仰られき新右衛門といひ予といひ兄弟同し場所に出格の御沙汰を受 御洪恩を蒙ること莫太のこと筆になかく可盡にあらす此上は新右衛門義先便にもいひし宋の張觀參政かいひし勤謹和緩の四字彌御こゝろあるへし其内此上は和緩の二字第一なるへし勤謹

(原朱書異筆)

ヨキナチナ
スマツキト
ノ御論庸行
ノ御説子孫
ノ以テ服膺
スベキ金言
ナリ是レ眞
正基督教ノ
訓ニシテ而
モテノノ孔
教徒ノ誤ル
所ナリ立テ
ソ身ヲ立テ
道ヲ行フベ
シト訓ユル
ハ至當ナレ
モ名ヲ後世
ニ擧グ云々
ト訓ユルハ

一字も難捨大切の字なれ共和なくしては御奉公のなりかねて勤向の出來ぬことあり緩ならずしては勤の字に疵なく出來る也緩の字は躰なくしてよく勤と謹をして無疵ならしぬるの大切のこと也新右衛門など此上別に賞せらるゝ御奉公あるへしとは少も不思只 御目鏡不違奉行之賞し損しなき様に穩の御奉公のみをいのる也昔人娘を嫁せし時相搆て人の家に嫁してよきことをするなといひしに娘の不審かりてしからはあしきことはいひしによきことさへにせずあしきことをなすへからさる事勿論也といひしと也おもしろきこと也これ藥をのます藥食をせず朝夕のことに不養生を少もせぬといふわけ故に至る六ヶ敷こと也易に庸言庸行をいひ書にも庸行のことを專にいへり平日のなにもなき小事をつゝしむのかきりならては身をもちかぬる也何卒新家にもよく出精して人のみぬところをよく出精せよと御通し可被下候われ人を選びあけしこともあれとも留役は今の豊藤一人也人にたつねられしこともあれ共留役は予につとまら

ハ人ナシトテ
功名ノ奴ト
ナサシムル
テ大ナルニ
至ルベシハ
名ノ成否ハ
只帝ノ命ス
上ノ所ノモ
ナルヲ了ス
トスベキモ
ノスルニ依
テ感ル所ア
茲ニ之ヲ拜
書ス
明治廿五年
九月
孫
温
安
批

すと日々おもひくらしたれば無難につとめしか漸也中々人を選へきことはならずとて斷りし也しかるに弟の二人まで留役になり殊に新右衛門は格式をも被仰付たるとは可悦もこれにかきり心配もまたこれにかきる也調役には大熊佐々木など選ひし也母上の御悦御尤に奉存也われならへ^て來其上いろゝのことにて御配慮をかけ恐入居たるに新右衛門か此度の結構にてさそ御悦とおもひ此一事に付^ては別^て肩かるく成たるかことくおもふ也これに附申上るは元來母上の御こと行道院様と御一同に格別の御苦勞被遊てわれら兄弟三人を夫々公儀の御人にはなされし也乍去幸三郎か評定所番たるも大成ことまして新右衛門か結構十二分といふへしわれらの考には高橋の御祖父の武士に孝行ものにて御褒美ことは至^る少きことなるに至孝の御聞^へありて御褒美の上格式をも被下たるに其御子はみななり出しものなし且五十以上の人なししかるに母上は七十に近く被爲成候^てかゝる結構を御覽なさるゝは高橋の積善ならずやなとゝも

おもふ也しかるに今又われらか江戸へ結構に轉役して歸りたらは母上の御こと十二分とも十三分とも可申様なきまゝに却^りいかゝなるへしやと母上の御ことを又案事奉る也よつてわれは此上決^り江戸へ早く歸るへしとの念慮をたちて母上の只御無事のみを夫婦共に可奉祈とおもふは母上におゐても左衛門尉早く歸り候へ逢たしなどの御念慮あるへからずもし其御念慮起^らはこれは勿躰なきこと也恐入たること也と急度おなほしめしかえられて其時々高橋家の御兩親はいかに行道院様はいかにと思召出し給ふ様にと此節此難有ついてに思召を定らるへし御代官など遠國に參りしものみな十年以上なれとも遠國の奉行に十年以上と申はまれ也其内はや三年はたちぬ今年三年と思召なは過しとし月におおまち被遊なはさして長きことにはあらしとおもひ奉り候このこと母上の御壽命のくすりさては天道への御事へかたの第一かところにするす○脇坂淡州の申年月の大小の七絶被遣之かたしけなく候先代中書には我別段ひき立になり

しことにて實に恩父子に近き位のこともありしに今の淡州の御用立れしを聞はよろこひ也中書の天下に響たるはいふまでもなし乍去文藻は今の淡州まさりたりとみゆる也わか御勘定吟味役の御列座の不慮にありし日はわれも御城に居て中書に逢ひしに其こと密にいはれて近々おもはぬ轉役なるへしとて頻に落涙して支配を放るゝなこりををしみ給ひわれもおもはず格別の轉役よりさしあたり支配を離るゝのなこりをしみて頻に落涙せし也ことの序によりて大久保忠真朝臣などいかなることや龍野のそこもとをは別段にする也恩義を忘るゝなと仰られきこともありし也これはよほと驚かるゝまでの事ありし時忠真朝臣の歎して物語れし也この度新右衛門など結構にもおのつからに中書朝臣の御光りこもり居るわけ也そのころにて新右衛門こと淡州につかへ給ふへし

○八日 くもりさむし 市三郎けふは侍壹人口取壹人にも唐招提寺より垂仁天皇の御陵今は蓬萊山といふ小山也其あたりを歩行て歸り來れり勿論わか馬にの

り行たり五半時より九時頃までのうちに乗切て歸り來れり

○九日 晴 俊藏か方の少女來り遊ひ居る汝は春氣にあそめか俊藏にたかりて寝るをしるやと問へは笑ひながら夫はマア宜しふ御座りますか御前の御つむりにけしからぬ御フケかみえますとまきらす也其才氣に一同おとろく

○十日 晴 五時之供揃にて中院屋の御位牌所の參拜

○十一日 くもり けふは具足の祝ひにて與力には手のし盃遣す右之あとの與力には目の下一尺の鯛のやきもの用人引之同心は鱒の切身といふ如き段々ありて四ヶ所門番山番まで都合七十人前程の料理出る出入之町人共みな來とりもち給士いたす酒の爛番は井戸やといふ酒やより來りてするといふ類にて仕來夫々あること也實に去年の條にしるせる通也けふは惣門内に犬悅のあと多くあるも仕來也といふ位也われいふ鹿悅といふかもしらぬとてわらひし也○藏書之内に畜德錄といふ官板に水戸殿の御

此ヶ條御頼
申候

自筆仰不忤天云々といふかけ物當年よき序之節御廻し可被下候右は學問所の奉納せむとおもふ也天と人とはちすといふはこゝろに後闇ことなきよりはしまる也されとも至極の所は聖人ならては出来ぬ也よく知ることとをいたさぬと耻へきことをはちぬ也むかしある女緋ちりめむの湯具をつくりて明日はしめて歩行せむとて芝居へ行仕たくをして枕もとへ出し置朝けに出行ときいそかれて忘れて無禪にてやはり緋禪をしめしこゝろにて人みせにもゝのあらはるゝまてにまくりあるきたりわかき女の下帯もなくまくり歩行故に人々狂人なりとて笑ひてみるを女は緋禪を人のみるなりとますゝ誇貞にて高く前をまくり歩行しといふことありわか行跡をよき人にとひ聖賢の書に引あてゝみぬと恥さることに恥へきこと多き也恥をしる一段也恥さること少きにいたりて一段也天にはちぬにいたりて至極なるへし恥をかくすは僞也人にはちぬつもりにてこゝろを欺くはかたり也天にはちぬといふはこゝろに一点のはちなきのかきりなるへし人

たのみせすして出来ることの事々物々こゝろに少も恥なきは至極は天にはちぬにいたりしかと學問のみち上帝汝に臨かことくするもこゝろにはちす天にはちぬことゝ學問所の奉納して永學問所之手本とせむとおもふ也畜德録は小學の嘉言を實にせしものにてこれを講釋にせは益あるへしとおもひつきし也

○十三日 雨 けふは兩御隠居様の年始之御膳差上る父上例之通御機嫌にてわか表之居間に例の唐番へむた書をして居るうち頻に踏舞の御様子なりしか果ては酔とくたひれにて這ひて今様など御うたひ候計に四ツ頃まで御酒あかり候間如何可有之哉と御案事申上候處翌朝に相成わかつた槍刀之伎終りしころはや起出給ひて昨夜飯をたへしやけしからす腹へりたり早く雑煮にせよとの御事也酒後煮はなにて三椀被召上たること申上しに驚て御笑有し也今朝は露の酒氣なしといひての御はなし也廉頗か老て一斗の酒五斤の肉を食せしといふにも過給ふかとみなゝ驚し也

○十四日 晴、けふは家來之妻女共へおさとの屠蘇を振舞ふわか頃日申遣しは女の妬心は七去の内に被載重きこと也と申せしにおさと答に聖人といふもの女ならばよし男故に經書もこれはかりは當にならず周禮に二十七世婦八十一御女などを定給ひしもいと多かることにあ父母ならばかくは定めじ周公の心之内可疑なといふ故にけふ妻共に其こときけといひしにみな奥さまは御學者也われらか禮とやらむいふことを定たらむには女房を太切にせよといふことを第一にして妾などは一人もならぬといひたしなと答へしと也いにしへも周公か女ならばよからむなれとも男の定めしことはと妬婦のいひしことあり陸象山か東西南北を隔數千年を去とも聖人はみな一了簡也といひしかどれ、女の聖人なるへしよく符合せり

○十五日 晴 月次之禮受ること例の如し初瀬の僧正のもとより紀貫之か手向のうたよめといひおこしたり其うたをたにさくに記すにいかなる

ことや手習の小供師匠めきて出來雅致なしおさといふこれは多くの人々のうた集むると聞しめされし故に氣のあらたまりし故なるへしと之事故に常に酒一合を喫して唐昏半切に二行一行のものを書みるに行草まじりの書常よりはよきかことしよつて夫をおり、たのしむ故に其傳はいかゝといふ故に只全くに藥の格にて急に一合を如傾にのみしに短尺は細字なれば磊落に過て何分又甚し其勢に乗して又唐昏へ書みればよろし酒一合のむたのみをして短尺十枚はかり損をせりとて笑ひし也一合の酒かく可酔わけなし一箸のものも喫せず酔を招かむとして俄にのみし故なるへし

○十六日 晴 けふ短尺を書直したり至而小成猪口に而藤堂もらひたる養老酒のこときものを五ツのみしに大によろし被頼もの十枚はかり書たり人にもかゝることありや新右衛門などはいかゝ○御役所之庭其外へ栗梅さくらの苗木を仕立てさくらを五十本はかり苗木の仕立をせり與方

共中位のさくら五六本植たりわれいふ二十四五年の後はこゝにて興多かるへしと之考也柿はみなよき實を撰ひてつきたりこれは五六年には實なるへしといふ故にこれも食ては難澁也只のちくくの人の爲とて歎息せし也

○十七日 くもり けふ夕かたより 一乘院宮へ被召候俊藏を召連罷出候へとの御事也俊藏兼あふかくかしこみてゐたりしか難有事の可奉辭にあらずとて召連たり去々年來被召しこともあれ共諒闇中或は大宮御所の御所勞中等にありと竹のことは御憚なりし也けふは御樂ありて三曲はかりありし也宮ははしめは太鼓を遊はし樂人窪左近將監箏東大福寺八幡神主上司出羽守笛同人悴しちりき其外坊官二條宰相みうち人等笙しちりき或は曲をうたひなとしたり其内予は平伏して聞こと也けふは別のことなれば宮は御上段をおりさせられて御下段にて御遊ひあり某は御同間其余之人々は御次俊藏はわか後ロノ入側に蜘蛛のことくにへたはり居たりし

かし初ゝなと、御意を被下たり樂の間にく御酒被下る宮は例之御才氣にて予より御家來末々に至るまで手もち不沙汰に成給ふこと曾々なき御ことなればみな樂の怠屈を御察しありけむ唐昏を出して宮御みつかから御筆をとらせられていろく御認みうち人等も畫かくもあり古文字などかくもありいろく也われにも達る御意故恐入たれとも御前出筆とりてけふ召されしことをといふはし書にて

雲の上へつゝ御法の庭に來て千とせをあふく松の下かけと唐昏半切へ書たりしに其内宮の御なくさみに昏をおさへなとして居給ひたりけしからず御感にて今一首とありければそれより又二首はかりいろく松の下かけといふことを加へて人もよみわれもよみけり上司出羽守は猿樂をよくするとて舞をまひ或は宮の御笛をしはく遊すうちに舞をもまひし也御うち人共みな朗詠なと歌ふけにも源氏などのさま也けふは御醫師のことをもかねさる故にわか寺に來る衆徒勝南院宮内をも召さ

れたりこの男二十四貫とやらむある大坊主に私酒は猪口にては腹へ
しみす御所様御酌賜れとて薄茶々椀もち出て御酌を願ふ宮けしからぬ興
にいらせ給ひて御前なる瓶子をとらせられてつかられしに頻にうちのみ
しにわれはきのふ夕方に中辻町のかたへ行をみしかいつくへ行しそと御
尋也病家へまかてと御答申せはわれは醫を業とする故に病家といひて
行故にカ、めかいらぬなるへしなと御意ありき中辻町といふ近邊也此勝南
院醫の上手のみならず豪まいなる男故獨にて酒のみ又よく御席をとり廻
し儒者か詩を吟するを聞て大に笑ひ右や左の御旦那さまと跡にていはす
はなるましとて大に笑ていさわか腹鼓を御聞に入へしとて腹を出せしに
幕の内の相撲のとき腹にて其はらをうちながら謠ふみな絶倒せり關東
ならば卑下なる歌ひものなとなるへき興なれとも詠曲の節にゐことのふ
きみやうをうたふ位のこと也夫にても興は同じこと也これは實に關東の
諸侯などの深くはつることなるへし宮は夜あくることも更に御いとひな

き御本上なれはいろく辭し奉りしに勝南院駈廻りて御厨の人々を叱り
なとして御膳出て逃るかことくして歸りしかや八ツ時はかり也 一乗院
宮は大乗院宮は大成御普請なれと震殿より鴈之間といふ所に行あたり
は金はり附も剝落所々雨もりにて御疊やふれ恐入たるさま也御坐之間
金はり附を鹿ののほりはみて仙人の半失しとて頻に御笑にてこの頃はわ
か居る所こゝかしこ雨もる様に成たり今少し多くもらはたらぬをつりて
名護屋山サとかいふものゝ宅の様になるへきもいと興あることなるへし
なと御意ありていかにも恐入御氣之毒にていかにもなることなるはな
し奉りたき事とおもふはかり也御才氣ありて温順なる御本上なり御はな
しの内に今は 禁裏も近衛鷹司もみな實家のつゝきと成れり誰はすへり
て攝家へ参れりなと御意あるにておもへはすへるとこかころひころかり
て宮の鴈之間帝鑑之間の大名にならせられて寺社奉行たらは調役の喜ふ
ことなるへしとておさとに歸りていひしこと也歸るさに宮の下されしは

薩州の海苔に九十才とかに成候人の奉りけるといふ壽の字を紅に記せし
たゞのもちツ御手つから給ひし也關東のさまとはいとくことそきて
ものあはれける御こと也都而宮にては宮は勿論予ら迄も出るものみな白
木にて茶碗也しかるに白木や、黄はみてよくみればしらきかといふはか
り成にて宮もものめす也被召上るゝ酒なとよからぬ也まして御家來等
被下酒はかすくさき也夫にこまるとみえて勝南院は酒はわかものむのはと
りにやるへしとて手つくりの酒をとせ寄たりわれも夫をのみしに奈良中
にもいつくにもあるましとおもふ美酒也米の入用を少も不厭十二分の精
品の極也といふ酒一向にいろなく至るかるくして湯のことなりされ共い
つまでも酔といふ也中々賣物にしては引合はぬことなるへし

○十八日 雨 御用日也御用日はしめなといふことなければ例の通也○
けふ御禮に俊藏を差出す一宮よりも參殿之御挨拶之御使被下たりこれ先格
也けふ儒者來りし故にいかなれば御坐所之御疊上など鹿のわるさをする

といふは不審とて聞しに實は御雨戸などいふものあるかなきか御人少な
れはたつることもなく障子はかり故に障子を破りて所々あさり歩行なれ
共勤番の青士なども居らぬ所多ければ金はり附を鹿の食ふにいたるとい
ふ也御無人のさまおもふへきこと也

○十九日 晴 大に暖氣也○學問所之よみ初にならの子供召連て手習師
の出たきよしをいへ共この學問所のよみ初は仕來に而菊屋又は古梅園
の類小玉銀なともち聖像を拜し夫を以少々の酒差出事之由也其例によれ
は手習師も少々はもち來るへしもち來れば弟子共に割かくへしとおもへ
は差留置たりしかるに何分にも罷出度旨をいふによつて左らは師たるも
の弟子一貳人召連能出候様申遣子供の親共いつれもみな子供を差出し
たかりてならず畢竟は人みせもあり其上昨年書取に子に學問所の講釋
聞するは親の世話かゝる事なるに一向に孝行せぬ様にては學問は大害た
ることをいひし書取を與力にわたせしを段々に寫つたえて親共も孝行の

ことにもならむかと頻に出したかりてきかす惣年寄共方の手習師の其旨
段々申出るにいたる故にさらは銘々氣々次第にいたし入用かゝらぬ様に
と之事に十五才以下は強飯師匠年長者たるものに計少々の酒差出こと
に成れり夥出へしとて與力共いろく工夫をしてさて入用のかゝらぬ様
にと心を勞する也

○廿日 晴 中院屋の拜禮夫を高福院に 大猷院様 御靈屋に參るもと
こゝは大和大納言秀長卿の娘あるかなきかの躰にて尼にておはせしを
御覽被遊不便に被 思召 御朱印二百石を賜ひしより今のことく成し
也住尼は六十はかり也 勸修寺宮の御猶子也附弟も同斷に芝山大納言持
豊卿の孫にて祖父の余風あるにやうたをよくし書又みこと也と聞也香典
二百疋奉るこれ例也予は雜煮菓子を出す末々に至る迄餅を出す也こゝ
よりさほ山の眉間寺に參るこゝは 聖武帝御陵のある寺也奉行所之祈願
所にも具足開には銀二枚遣祈禱ありけふも香典百疋也菓子を出すこの寺

至るよき眺望に居住持純道は東大寺之學頭にならにてのうたよみ故に
はなしもあり所々の山々にかすみうちわたしたるか遠近によりて厚薄あ
り雪もまたらなると更にきえしもありて春望いふへからすよつて暫の間
いろくはなしなとして歸れり

○廿一日 くもり 白洲に出る舊臘已來召捕もの吟味七口あり内一口に
押込に五人申合候物不得取ものあり二人に所々押込粥をもらひ並
尼寺に錢百文とりしものあり去年廿八日悪事を多見切候入墨重敲に
成大晦日より大賊をなせしものあり前の押込など風俗取締に拘る故嚴敷
申付る積なれ共さてく不便なるもの也かゝるものゆるしてかならむや
ゆるさすしてかならぬやさてく了簡に不及もの也首に成ものをゆるし
遣し二日目に盜するは生質なりや可歎こと也ゆるして良民の大害をする
上はゆるすかた不隱徳にもなるか也いかゝあるへきかゝるところ教を受
て正理にいたし度もの也され共押込は押込之御法あり再犯は再犯の御法

あれは犯科の事實に吟味して御仕置にすへきものかゆるすといふは私か
いかゝあるへき

○廿二日 晴 明教館にて學問はしめあり名代として民藏參拜いたす金
百疋獻備也○よみ初とこゝにては學問はしめをいふもちといかゝ也さ
れ共今日は百人余發會に付罷出たりとて儒者育助大悅也けふ着用せよ
とて上下一具遣したり○俊藏方の少女來るわか灸をすへ居るをみて手傳
ふへしといふそれはまた汝には出來ぬ也といひしに私は子供のときより
とゝへ灸居遣したりといふ汝の子供の時はいつ也やと一同笑ふされ共頻
に手傳たかる故に戯に灸をあげさせしによく紙をひろけて振ひたまさか
器の外へこぼれしはひろひとりてつゝまやか成事也器の内より羽掃ひを
取出して灸のからを掃はむといふちといやきみなりしかさせみしに一ツ
もいかゝなることなしかゝ下女か不器用なるなどには遙にまさりつ
へし五歳の小兒驚たること也俊藏か三里なと去年居遣せしことあるへし

とおもひぬ

○廿三日 あられ並雪 さむさいふへからす惣年寄今日到着也とり落し
ものゝ十日限之便も今日にて十日めにてとゝく

○廿四日 はれさむし けふは惣年寄の便のもの來るとておさとなど朝
よりまちて四ツ頃より遅しゝといふうちに八時頃に用人共所々之書狀
其外を山のことくに持出せりこはけしからす汝らは鳥やの伴頭のことし
といへはみな笑ふ也これ近頃のことある故なるへし鳥や京やは飛脚や也
少も可怪事にはあらぬ也さていつれより可見やと如し山書狀をうちみやり
て夫婦喜ひのうちに又あきれ居たり先母上の御狀よりといたゝきて奉拜
見に御健との御事新右衛門よりの書狀に暮のゆたか成新家之世話いたし
て尙あまりあるに及ふこと可歡のかきりにて新右衛門昨年はこの外に
よきこれ同人は勿論の事といふものゝ母上の御血筋のものは一躰のこと
故にみな母上の御福德なるへし其内新右衛門か書狀之内に頻に愼恐る

ゝのことをいひこしたりこれはわか何よりの喜び也かく結構のこと打つ
とひし時は格外につゝしみ格外に手ひくゝせねはならぬ也われにこの上
の望なし御互に慎のみの事也このまゝにて慎みて歸るをまつとは新右衛
門か格言なるへし幸三郎よりも書狀其外來る深切の至りよめ再縁のこと
其外敬次郎を可引取なといひ越したり新右衛門幸三郎いづれも深切の
きりにてわれは仕合の弟をもちけるよといひて歡ひぬ忠四郎方も委細
の書狀來るおさとの兄弟共々書狀之内に忠四郎も昨年は至るよろしく幾
之進は隱居して樂に忠四郎方の日々に來り巨燧などにあたりて忠四郎家
の盛に成行を喜び忠四郎又大に幾之進を潤ほし遣すよし等聞へてこれも
兄弟のうちやはらき老母の歡ひなるへきをわか身に引くらへておもふ也
けふのたよりとりゝ可喜ことのみ也され共母上の御狀をみれば夫婦例
の通袂をぬらすこと也夫より芙蓉之間御役人懇意の人々の書狀等一覽い
たす七ツ頃にあらくゝすみたり新右衛門よりよき八丈縞をわれに贈り其

外市三郎等迄も筆等を賜ひ母上より思食よせられし鮭魚等其外所々より
海苔菓子等來る記すにいとまあらすこゝには難有の二字にこめて余はしる
さす所々より來るものゝうちにおさとか方の例の同人の好める畫草しあ
りうちに京山馬琴らか作あり二人共わか六七才の頃より昏上の友なれば竹
馬の友の年賀に成りしこゝろに成て無用の書は不讀など常におもふも忘れ
てよむ也馬琴か九十に近き人なるへきに盲とはなりながら老實なる精しき
著述京山か近頃は小兒に誠のこゝろを加へて新奇なることをいふとりゝ
はなし家といふものを呼しこゝろにて六半頃までよみたりしに忽に八冊は
かりよみ畢れり夫々新右衛門より貰ひし筆こゝろみむとて市三郎に墨を
すらせてけふ先生方より來りし友野霞舟先生の詩の刪正ありて惡詩の御
かけにて少々白粉を施し夏蔭先生の直しにてこし折の少々步行出來るこ
とく成しうたなと取出せしに唐帯三枚ならてはなしといふ夫には多く
いたつらかきも出來すとおもひて七言律二枚絶句壹枚をしるせり成ほと

よき筆なり静晨堂の手際唐筆にまされり近頃文筆のみちひらけ少も唐土に可減とはみえぬ也墨は唐土の膠を用ひて古梅園にて作れ共中々唐には不及なれ共筆はかゝる筆工はあれは唐よりも丁寧にする故一段よきかことしこの人に唐毛の精品を遣はせたらは長たもちするなるへし可惜友野先生の御刪正をみるに理屈をいひし詩に御褒詞なし郊行又は探花などいひし類の詩には点せらせしものあれ共其内よりやはり理屈の事はかりを書しもおかしき也別昏懸御目候御取捨可被下候人々われに印章をせよといへ共朱にくの類あき常のありし昔かれへ遣し江戸に置來れば印章なし従五位下左衛門尉源聖謨といふことを二ツに刻し肩の所へ押印も何とか主忠臣とか或は士は剛毅ならずはあるへからすといふことを刻すへくかともおもふ也江戸にて佐久間修理にたのまれ書しものに同人印章のこととをいひしかとも日本人は名も印章も古くはあらぬかことくなれば印章はせさりしか修理かみつから刻して聖謨の印其外何とかいひしを二顆

くれしか小サ過にて一枚唐番へ押れすよつて別昏にも印なき也

○廿五日 晴 けふは市三郎劍術の弟子入也松平甲斐か家來也與力共一同の師也われ心ありてなら中は市三郎を與力らか遣ふ流義にせりきのふは市三郎寶藏院へ槍の弟子入に遣したり今の院主は胤懷といふ也伊能先生の祖父の師胤風より四代目也といふ也當時の院主は興福寺の衆徒一臈代なりしか去年よりすゝみて何とかいひし役になりし也市三郎きのふ稽古はしめに行一より十までおさとの世話すること也江戸ならば厄介人同前の妾腹の末子いかにも手輕にて濟へけれ共こゝにては左様にもならずよつて四ツ供にて給人壹人差添遣したり與力共之内稽古するもの貳人同心共之内貳人同様之もの内玄關に待合つれ行歸りにも内玄關まで送り來るなとけしからぬこと也弟子入に二百疋これはちと過たれとも仕かたなし郡山の先生には酒肴焼物附に飯を出しこれも二百疋也寶藏院は昨日稽古はしめなるに古格にて狸汁を食するよし也いにしへは眞の狸にて稽

古場に精進はなかりしか今はこんにやく汗を狸汗とてくはするよし也胤
懐白き衣にて紫のさし貫を着てたすきにて鎗を遣ひめつらしきこと也と
いひききのふ市三郎歸りていろ／＼のこと物語る故にやあ汝か饒舌き
たくもなし元來汝末子にてわれ九十俵三人扶持ならば必人の方へ行て内
々侍奉公するなるへししかるにわれ錯寵にてわれ今かゝる身と成し故に
けふの躰也しかるに其公義の御恩親の恩をは心つかす世間はなしき
たくもなしわか父行道院様はわれ新右衛門等を養子に遣し度との御辛
苦にて元來御酒被召上事のよしなれ共終にみつから酒めされしことなけ
れは御下戸なりとおもひ居し也わか支配勘定になり妻など迎てのち御酒
被召上るゝをみてはしめて御下戸ならぬことを知れりその一ツを以も
平日の御慎御辛苦おもふへきこと也新右衛門五六才計なりし時なるへし
あるときいさゝか御酒被召ことありそれも銅のあやしきちろりといふも
のへ入て猪口なども無覺束ことにてめつらしくうち和らきて御はなしあ

りしことのいはゝ御樂こゝろなるへしと覺居也その時新右衛門か其ちろ
りを倒して酒ことゝくに流失たりされ共別に求給ふ躰もなく酒は夫限
に成たり妻子うちより酒被召は只其一度に限れり其余絶てみしこともな
しよつて今御養父母様に日々夜々被召上酒いかほとゝいふこともしらせ
不奉われも折々のむことありて祝ひのことある時は女に迄も酒など遣
すときは前の酒器の倒れて酒の流失せしいとゝ寂寞たりしことを思ひ
出ては密になくこと也われらか身はかゝることをみつから經しこと故遠
國などに居ても只難有おもふに汝らにかゝる躰にて幼年のものを暮さす
るといふは残念至極也幼年の時より苦勞せねはとし立役にたゝぬとてい
たくこらしめたりおさと例の氣質故市三郎を取扱ふコト所生に過たりた
とへは市三郎か好めるものをおさとの好みなどゝいひてわさとつくり市
三郎に食せさするにいたるはしめは予も氣かつかさりしかおさとの食こ
のみ絶てなき女なるにめつらしきことゝおもひて近頃氣の附きて一昨夜

も大に市三郎を叱りし也こゝに來りて市三郎の若殿さま風の取扱めくにはさてく後のことをおもひて當惑する也無余義勢ひといひなからこまるの極也市三郎たるものおさとのこゝろを深くくみはからねは大成罰あるへしこの頃市三郎とならにて暮すうちはわれ三度々々めしはかりを食し余のものを食すましといひしにさらはおさとも同様にすへしといふ故に困りて其ことも不被行止しみにいたりし也もおさとは染か咄にて聞にかくやの香の物を好みながら不器用なる下女を遣ひし時に其手をきらんかと患ひてかくやを余事によせて食せさりしといふ流義故市三郎をよく教さるにはあらねともこゝろ届き過て市三郎子供故にしらす増長する也このことにて夫婦毎度爭論あり既に江戸母上に可伺といふにいたりしこともある故にこゝに記すこのことは母上よりおさと御文通ありたきこともおさと病氣故歎心配すること氣を附くこと以前にまされり畢竟起ては居るなれとも多く巨燧にのみ居るといふわけ故に躰はつかれ氣は

ますく壯に成ことみゆ此こといかに及異見とも聞かす往々のところいかゝあるへき

○廿六日 晴さむし

○廿七日 くもり 御用日也

○廿八日 晴さむし 此次槍劔被行候を稽古毎朝ありて與力同心共出精する様子也市三郎も隔日に出るきのふ與力の筆頭の鎌左衛門と仕合をしてひときめに逢歸りて大に憤れり

○廿九日 晴 中院屋に參拜いたす市三郎郡山の家來の彼流義には相應なるものと五分勝負せしとて歡ふ也このほと組もの日々の槍劔にて所謂文武々々てよるもねられすといふかことくいか成事にや役所内は與力同心を學問所を取建度由内々目ろみていへ共いらぬこと故にきかぬふりして置たり終に儒者を以咄のことくに其ことをいふ故に其ことのあしきといふにはあらずみなくの出精可歡ことなれ共こゝに一ツのはなし

あり明教館の日々讀書のもの數人に不過其上小書院に定例の講釋すら聞に出るもの數人に不過しかるに明教館の外に又一ツの學問所いかゝあるへしや予兼あもいふ通學問といふものはいれ智惠にては不參みつからすへきもの也夫故にわれ文武共に世話をせぬ也しかるにかくもみなく出精すること故に申迄も無之わかむきにするにはあらず御役所永續の文武なるへければ可喜の至りなれ共二ヶ所之學問所はいかゝあるへしとて不承知のよしひ且わかいふはわかこゝを去りてのち奉行はいひて又一ヶ所之學問所を取立るならば一ツの廢絶を防ぐこともあるへしとかくはいふといひし也今のことく文武出精のこと三年つゝかは大出來也いかゝあるへきされ共下々よりのおもひ附故に少しは可保やいかに

二月朔日 はれ ことの外春めきたりけふはいなり祭禮日也こゝはいつの石 燈籠一基を奉る並紅梅一本納るこれは元來いなり祭に人のみむ爲に百年

の末をおもひて追々にこゝへ梅をうゝる積りなれば也衆とゝもに樂の意にて金に少々の余あらは猿澤の池の邊へ千本の苗を植附へくとおもへともいまた夫にいたらぬ也いなりまつりは庭の物見前にはなを活町人らか奉納する也こゝにて菓もの並赤飯を人々になけ與ふる也この入用よほとのこと也これらに附てもこの前に記せし 行道院様のことをおもひ奉りて予壹人密に泣こと也このことをしるもの母上新右衛門幸三郎まで也追々知ル人の少なくなりしか可哀こと也川路の家にも井上の家にも人しらぬ大功大御苦勞ありて少も目出度ことはしらす失給ひしは可歎のかきり也かくおもひしかは惛然として樂からず獨表の居間に書をよみて居たり程もなくおさと庭より歸り來りていふ凡の數百人つとひていかに馬場の邊にきはひたり娘の十三四なるにはした女つきたるか木綿或はふとりの裾もやう振袖なる十四五なる若衆かのしめ染の小袖に袴はきたるなども二三人みえ關東にまれの姿也といひきいにしへさまなること上かたに

は尙存せる也○武王の殷の紂王の惡をあげ給ふをみるに沈湎とて第一に酒好むことをいひ孟子か禹の大善をあげしも酒のきらひなることをいひたり酒を好めは殷紂の一惡ある也酒を惡めは大禹の一善ある也世に酒ほと可恐ものはなき也予以前は大酒のこともありしか今はのむとも小猪口五ツにかきる又無余義こと又はけふらのことにても一合程より先つは過さすけふ書秦誓をよみ驚ひてこれを記す○父上ひるいなり御參詣侍二人御草り取御附添の用人壹人也日くれて又女共を御つれ被成候而御參詣被成度よし被仰出之用人さふらひ共急に呼あくる俄のこと故御草り取間に不合大にさわくわれは御酒半に御免を願ひて例の通大字をかく其内に酒もさめてますく寂寞也故郷の情並行道院様の御不運をかなしむことますます甚し其ことをなら中に知ルもの壹人もなしこれ落涙の一ツ也この日記をしるすころは卓の前にて市三郎は世間はなしおさとは無言同然臺所にては洗ひもの音はるかにきこえ御隠居様の御いひき雷のことし

折ふし人定鐘コラン

○二日 晴 よほと暖氣也○中野より御構場所之事内々問合來る是も異國同前之ことに此節驚歎最中なるへし○元家來内藏之介來る境の與力のはなしに日々八過には引しか調物にて毎日夜分に成凌かぬるといひしよし也定而予ことをははしめ夫よりも甚敷いひしなるへしとて笑ひし也奈良も境も留役より出し類の人曾あらさりし御場所故みな驚へし奉行も異風なることを是と心得居には驚也

○三日 晴 所司代より内々伴金左衛門を以東大寺神人七門源三郎義肩衛と申茶入所持いたし居哉との事聞合する故穿鑿せしに右は足利將軍家義政公より南都稱名寺の僧珠光といふもの拜領し夫を和州古市の城主播州法印といふものへ傳へ夫を源三郎先祖源三次郎名行といふ相傳して近頃まで御老中方等南都御巡見之節は入御覽來し候處當源三郎貧窮に賣拂度由奉行所に届出南都之名物に付東大寺に世話いたし取留置候様奉

行所に於聲懸遣しけれ共中々大金に於及手不申候由斷に付左候は、存寄次第と奉行所を申達候品に有之候處此節は大坂の町人淡路屋龜五郎といふものを相頼同所瓦屋町炭屋孫七に八百兩を質に入有之候處此節過分の價に買受候もの有之源三郎懸合候得共不差戻と取沙汰相分ル右の様子にてはいつれ千兩以上を相場とみえたり刀劔にも甲冑にも一品にて千兩に望人あることも八百兩の質にいる、こともきかす可歎事也

○四日 晴折々くもり雪 さむさいふへからす薄らひにはるとは知れと冬よりも身にしむさむさ堪うかりけり○けふ正月廿五日附六日切之書狀相届く當春御老若之書狀わすれしわけは申迄もなく御老若御側は別段なれば舊臘より讀合をなし用人共三人にて突合をして別箱を入置五日に差立るとき其別箱を忘れたるを十二日にいたり何か重き箱ありとて開きみて用人共如菜なりて來れりいかむともすへき様なし以後を慎しめ御用向ながら年始は私用も同前なり畢竟別箱といふことあらし以後は江戸狀は一箱

たるへしと申付たり右に付母上の御案事委細に被仰下恐入其旨用人共の申聞る一同といふ内にも民藏殊に恐入たりこの男かゝることよくあやまちありてみつからとかめ後悔甚敷もの再ひあやまちすること遠きかたなるへし○母上御機嫌克其外一同之御無異恐悦之至殊に母上の御腫氣御全然と之御事恐悦之御事也一寸たりとも手をしかとにきりて常ならず指先を覺へおよひ小便の通し澁るかことき氣味あり及ひはらより胸の邊常とかはりしシワのよりて少し光あるかこときみな水氣也其後足のすねにみゆる也以上のことあらは即ち赤小豆麥めし御用ひ可然か病ひ小なるに養ふ甚効あり近頃西洋學者の銃炮を製作するを聞にいか様に銃を製すれば百篇にて損し五十篇にて損するとの論ある也さもあるへし縮木綿など丈夫不丈夫は數をかけてしる、也藥も毒も數をつみてのち其効ある也これ養生の可貴こと且一度二度にて身にあたらずとて少も油斷すへからさること也人に突合其外みなしかり其内に即効なき藥のつみてしるしある即

坐に害なき毒のつみて害をなすこと至る大也辯俊の人の天下を害する類也管仲か桓公を諫めしに酒宴遊興は酖毒よりも人を害するといひしこのところ也水の火よりも人を多く害する其近効也儉約は百文前後の錢にありといひ傳ふるみな同じ○茂兵衛奇貨を得て子孫に災を生するの論新右衛門の論深切の論也小學外篇敬身篇に柳玘か説を記して七十萬錢の玉のかむさしを買ひしものゝ身の亡せしことをいひて末に上よりあつき御恩を受たるもの威權の盛なるもの奇貨よりも甚しき身の害あることを示されたりわれらみな御役に付御恩の奇貨を得しもの也奇福あるもの也奇福あれは奇禍ありともいへは兄弟ともにみな只々あつくつゝしみて此上の昇進少も願ふへからす母上など左衛門尉に早くかへれとのことなとゆめ〳〵思召あるへからすわか兄弟あまりによき故に恐るゝこと甚しくこれにて折々江戸へ歸りたき類のことの療治をして慎む也新右衛門の高論感心して悦に堪えず同意のよしを記す其余新右衛門を御申越之御心附之次

第等夫々御尤に承伏○松平金次郎をたのみ小學外篇を月々に御聞なさるへく候よき書也近頃小學纂註和板出來たり二十夕ばかり也御求なさるへしよみよき也佐藤捨藏なども小學外篇をは賞する也許魯齋薛文正等の純正の大儒小學を尊ふこと神のことくとも父母のことくもいひ行跡のこと小學に盡せり聖人といへ共小學より外ならずといひし也ましてわか輩は日々をかみてもなほあまりあるへし

○五日 くもり又晴微雪 市三郎劔術を遣ひ郡山の先生と遣ひ八二位の勝負出來たるかに悦ふことかきりなく息長くいつ迄も遣はるゝといふ也われ行みしに綿入にて肩衣をとりしまゝ直に面小手に成て仕合をする也この流義にてはヒ打といふ也全の仕合にあらす劔術のおとなしきこと直心影などゝは大名と小役人ほと遣ふ也市三郎いまた一向に出來すいまた靈劔は無覺束われ時々遣ひ遣すなれ共息も短く自由になり人あらは十人位はつゝけに遣はるゝ也これにても平日苦勞をすること智のすゝむ稽

古としるへし郡山の流義心の治りなどにはよき様にて其上參る人に壯年
屈強の人立派成遣ひ人あり同流同士にては其躰みゆれ共必ずあらしき遣ひ
人に逢なは六ヶ敷かるへし諸藝共によき師のかきりを撰ひ多くくるしむ
へきこと也

○六日 晴折々雪ふる さむさ前之通也けふ女共木綿の反物を買ふ其内
にめくらしまあり只のしまありそれをみてうら表の論をする也これ常の
こと也なるほとわれにも聞はわかる也よつて發明するはある人の申せし
は名倉彌次兵衛へ水野出築山をつきみるに自然にうら表ありて多くは南向
羽守はなしとが聞也のかた表になるかことし不思議なるもの也よつて庭の北まとの外へ築山
をつくりみるによし多く築山といふものはうらをみる様になる也こゝろ
すへしといひき今木綿の縞といふものは一筋の糸をいろ／＼にあつめて
文をなせしもの故うら表あるへき様なししかるに梭か加減か手の加減に
て自然にうら表ある也され共自然に出しうら表なれば少のきすにはなら

ぬ也これを譬ふるに燕居と朝廷に闇々侃々天々申々の別あるかことし聖
人といへ共止ことを得ざるの論也これうら表あらし／＼のうち無のか
きりの内に自然の節文也しかればうら表は人におのつからある道理也さ
れ共自然の文はいふへきにも不及きすといふにはあらぬ也されはとて行
跡は糸を染るかことく日々にかたく染て少も村なき様にすへきこと也そ
れに間違あれは所謂無恒巫醫ともならぬ人か小人か也少も言行に表理の
なき様にすへきこと勿論也それにもめくら縞のうら表あるかことくう
ら表出來勝也可恐ことならずやしかるを己かことの表裏はめくらしまに
てゆるし偽をなし人をのみ自然の文あることをいはすして裏のことにも
くしらを立なは世涯に人はなき様になるへし可恐のかきり也これは縞を
みて行跡の六ヶ敷表裏勝に成行をかなしみ謝良佐か七年の稽古にて言行
一致せしを感じて記すわが同役にあは村田阿波守など先づ表裏あらぬ様
にみえし也あまり玄關前よき人は臺所よりあかりみておもひの外のこと

ある也人は臺所之掃除大切也

○七日 晴又くもり 今日より薪能也七日之間能見物之難行苦行大變也
出座中は静坐之稽古也筆頭與力中條良藏といふもの禪學をする人なるか
着坐せしまゝ刀の柄のあたりをみしまゝにて膝かはりまてつかれし躰な
し尋みしに人は能をみる故に神氣耗る也われはよつて少も能をみずよつ
て勞せずといふ禪氣なるへし當年の能は江戸より大夫下りし故別而賑ふ
よし也其大夫等か舞ふ前に長權守といふものか舞ふ翁三番叟にこまる也
これ能の元祖にて四座の猿樂大夫といへ共ならぬ來りて薪能をする故に
三番翁を舞ふことをゆるさるゝといふ位のものなれ共權守かするは株の
賣買にて全の百姓のすること故にみるへからさるの限也これをみる御仕
置の一ツ位也あまりの事故に戯に題せりちと狂詩めきたり即吟故御笑あ
るへし

音枯敗鼓鳴簷滴拙舞全仿奴紙鳶何事漫名長權守今朝負耜到山田

又

春風二月草如氈優戯開場蘭若前野客樵夫相集舞薪名可寄此人全

詩歌といふものは世につとふるもの故わる口いたつらなといふへからさ
るといふにかゝることをいふは一ツの慎の破なるへし蘇東坡のこととき人
にもこの癖ありしと聞ぬ夫故に身を破られしと也可戒事也これらのこと
日記限と御聞被下へし

○八日 晴 風邪に付能は不出此節下女共までもみな風邪也わか風邪
は能に當りし風邪也七日の能夜四ツ時迄故風もひかねはならぬ也當年の
能は金春大夫金春八左衛門江戸より參りし故笛太鼓までもよろし其躰野
鶴の鷄群孤松の獨立にて外の役者共と違ひ姿見のかゝみを持出し人に爲
持置衣裳を着し面を直し大騒にて面は亂箱に入紫のふくさにつゝみ弟子
共捧居るなとけしからぬ勢也ならの能はかく屋なしよつて矢來の入口に
る装束する故にみなみゆる也江戸の大夫はのしめ着せし兒に刀を爲求て

寶藏院な
はシコロ
き胃を
にかふり
に頭印を
ふると市
郎へかと
しへかと
也かたり
也大笑

舞ふ也其かはり静にて昨夜も四ツまでかゝれり芝地を能舞臺にせしもの
なれ共芝けしからすよき故に白足袋の新敷をはきて舞ひ足のうらくろく
ならぬ位のこと也興福寺の僧侶衆徒共は例の辨慶か晝にある頭巾をかふ
り衆徒はみな太刀を爲持南大門外の石の階段の上にて立なからみる也頭
巾はけさをとり冠り頭巾のことく成也

○九日 薪能のある南大門といふは猿澤の池にのそみて至る高き所にて
ならの市中を目の下に見おろしよし野かつらき金剛山など遠きも近きも
みえわたり至るよき眺望の所也そこに大門ありて大門の前芝地にて能あ
り夜は薪をたく故に薪能といふ也奉行之見物所は高さ六尺はかりにして
見附の大番所のことくなるもの也其前土間に高麗縁のたゝみを敷與力惣
年寄町代家來之内供侍給人ツ、並ひ奉行の前には同心共前置に並ふ也そ
の外に三尺はかりなる埒をいひわたし其外は帶刀するもの與力の家内之
男女など見物所也其外は雛段の如く後を段々高くして市中之もの也舞ふ

場所の埒の外はよき町人共也こゝの風なれば酒くみかはし或は女郎など
つれ來りてみている也上かたの風はかくの如し奉行のみわたす所なれと
綿など冠り居るものなどあり一向に構はぬ也奉行の居る大番所の如くな
る所には板羽目にゑ屋根あり其外は青天井也いにしへの奉行には奥方迄
もこゝにて見物せしよしにて與力又は醫者など奥様の御出はいかになと
聞也尤夜に入ての事なるへけれ共わか紋の高はり挑灯はかりも二三十立
居る所故見物所へ下女共も出されぬ也○當年の番組の内に鶉飼の能あり
以前人のいひしは鶉飼は將軍家にて忌ことありよつて關東にてはなし其
譯は足利將軍家を赤松の邸にて奉弒とき鶉飼の能を舞ひし故と人の語け
れとも散樂のことを予知らねは與力より金春大夫に聞せしに知らず金春
八左衛門に聞しに鶉飼の能は關東の御番組にも出るなれ共いかなること
か鶉の羽といふ能は御番組にならず其譯は鶉の羽の能あれば 營中に異
變ありとかたり傳ふところに淺野と吉良の時も鶉の羽の御能番組にあ

りしと承る夫によりて鵜祭といふ能も御番組には似たるもの故に出さすとかたりしと也

○十日 曇 春日の神前の能に付出るけふはおさとの女共を不便かるによりて今夜薪能一覽として遣す

○十一日 晴 南大門の薪能へ參る此節菓もの、木を植るこれは今いろ／＼の木なき故に後のためにうゝる也我の此節こまる故のちの人もこまるへしとかくする也○新右衛門よりおさととくれし仙人掌祥民といふ黄軸の筆至るよろし近頃唐筆にて短尺をかきみるに稜角字の屈曲の所に出て別ち拙筆わるくみゆる也淺野梅堂か遣料の和筆にては稜角少この仙人掌といふ筆至る柔にて短尺によりし可惜いまた毛の調ひかた不宜候何卒此筆工の御申付大小と柔サは仙人掌の通少も不變して毛をよく吟味し極入念にて試に二本はかり御申付此次のたよりに被遣可被下候高料にてもよろし

此廉早々御
取計可被下
候

○十二日 くもり きのふの興福寺門前の薪能は鉢木を舞ふといふこと金剛座也其上に金春大夫同八左衛門か舞ひあり夫故に見物夥し奈良にてはめつらしく人出し也旅人なともあるか也奉行の警固所は別段に高ければ四方を見わたす也行かけに例の先箱なれ共けふはヨヤマカセはあらずともよしといへ共何分手廻り等はヨヤマカセかしたきこと、みえ無言にてこと／＼に身ふり也ミブ狂言といふもの、ことく長刀持の足鷺の泥鰯をふむかことく毛やりを投ること禪僧の悟道するに似たり興福寺の山内の廣芝原まで行に輿力惣年寄町代共出迎下坐して居り奈良町人其外夥見物せし所にいたりければ鍵もちの身ふり益甚し肩輿のうちにて不覺ふき出せり警固所は行みれば南大門の芝地人を以埋たるかことし久々に江戶の躰をみるこゝろせりされ共帯刀人は少し袴羽織にて帯刀せしものは三四十人に不過其余はみな町人旅人等也中にも、引半てんにて三尺五寸はかりの刀帶せしものあり田舎廻りする刀伎者なるへし木辻町の遊女をつれて

かつきをへ
はここのも
の京の人も
も笑ふよし
かつかふに
義あはるの
則あはるの
もあはるの
もあはるの

芝地にて酒のみなからみるあり白き衣類にて夫婦の巡禮かくらかけの上へひなきとりにてのほり居るもあり輿力等々妻其外には婦人にかつきを冠り居るありこのかつきといふもの江戸にも昔はありしか増上寺にて浪人騒動といふことあり夫は御施行米とやらむを可盗取と浪人共かつきを冠り婦人の躰に出立チ御老中近寄しより御制禁になりしと人のかたりしまことにやなるほと身を忍ふにはよきものなれば江戸にては御制禁ならては叶はぬこと也奉行を見わたしの所には手拭頭巾などかふり物は都而制することなれ共かつきはもと女の人に顔みせじと作れるものなれば奉行を見わたしにてもかふり居也振袖は振袖のかつき也といふ也かつきかふりたるは奥ゆかしくとらせみまく欲するも可笑上かたの婦人は三十前後のもの紅の襟にてセンベいの如き薄きくしかむさしをあみたの來迎といふ身にさしかさり瑤瓔のときものを夥さけて辨天の頭よりはにきやかにジュン諦觀音のはれなる頭のことしされ共直段は江戸のよき筭壹

北條九代賢
人のみならぬ
のには世の治
まはさへ共様
なまをかくし
名をかくし共
陪由を以國
命をとり遠流
天子を遠流
なとみたる誅
をいれざるこ
大罪人論す
るを以論す
時を以論す
誅せらるへ共
誅せらるへ共
誅せらるへ共
誅せらるへ共

本には及はざる也われ兼るもいふ通鉢の木の謠曲をきくときに其純忠にして少もうらみなき感する余りあはいつも涙を流すなり謠曲を唄ふを聞しはかりにては佐野のふなはしの雪のあと無覺束きわかねとも能にてはよくわかる也優人みな堪能のもの共にてことにおもしろし元來散樂は嫌ひなれ共けふはなみたを流して感心し少もつかれを不覺さりし也龍介例の流義なれば元來時頼か行脚僧になりて歩行といふはこゝろせまし樂翁其外に常世か鉢の木をきりしは事をまうけし諂諛なり常世かこゝろをためすとて諸國の軍勢を集めしは周幽王の烽火ヒに似て此次非常の害なるへしといふ故にかくのことく事をみは論語をよみて孔子の謀反人の招キに應せられむかと仰せられし評をする類にて其疵を論せむには書に善書なく世に全人なかるへし小野道風は墓の飛をみてさへに其善をとり漁翁樵夫の辭も聖人は御とり被成たりましてこの能夫の留主に妻の人をとめぬは真也かゝるこゝろなれば家よく治まる也無實のつみにて刑せら

論事はあら
れとも善曲
の内猥曲に
のりて猥曲
と誹りて猥
と誹りて猥
と誹りて猥
と誹りて猥

れ米もなく薪もなければともつゆのうらみもなきは大人君子凡士たらむもの魂なるへしまして馬あり甲冑あり長刀あり浪人の備には十二分ならずやこの一事におゐても慶安の度被仰出たる嚴敷令條程の御軍役にことかく我らはいたく恐入ること也時頼たらむものことよく下情をしり冤罪のものをして天下になからしめむとし既に其人にあひ其ことを聞てもつゝしむて其ことをためしみて彌言行一致せるの證據あつて常世を用ひたり官にある人懂恪の二字たらぬ故に公事吟味物より人の黜陟にいたり大にあやまりある也つゝしむて冤罪なからむことを朝夕に欲し謹て人をあけて偽のなき人を用ひなは世のなか昇平ならむこと疑ふへからず人臣よく常世かこゝろを以こゝろとし上たる人々時頼かこゝろを以心とせむには何か疑ふへきことあらむ書をよみ人をとるもの善をとるへく惡をとるへからずとわれは修行する也とかたりき

○十三日 雨 このほとの新能に耳に謠曲うつりたることくに成樂クガ

は樂ク也といふ注は偽にてむかし駱駝の歌にらくたところか苦の世界といひしを思ひあたり候○昨夜二月觀音堂に松火あけあり奉行も在勤中一度參ることのよしに付罷越候積之處雨天に付不參家來は參りたり此二月堂の觀音といふは讚州之金毘羅などの如くこゝにて人の恐るゝ神に京攝之もの等大に信心する也大松火といふは五間はかり成大竹の先は二抱はかりに杉枝檜などをくゝしつけ夫をもやして本堂内其外を持歩行こと以上十二本也はしらなともあつくなるにいたるといふ也火の子夥飛ちり群集の男女の衣類かしらの上はかゝるをみな難有かりて拾ひ取行といふ衣類又はわた帽子角かくしの類へ火をちかゝれとも更に焦るゝことなくやけとをせずといふ也乍去元祿の頃此堂焼失せり其時灰燼之内より觀音の像其外取出せしに別條なし觀音の像の手にありし數珠のふさまでこかれすといふ也灰燼之内に事なかりしよしは時之奉行より御老中申上候處奇異之御感ありしよしは奉行所之其ころのもの記せし大和誌といふものにもみゆ

此井戸の水を置くに、二年の月、十分の日、疑事、可く疑事、これ穿ら、勤に穿ら、如く向、年の、事、は、後、な、ら、ぬ、

る也こゝに昨夜から井戸の向ひワカサ〜と呼は地中より甘泉奔出するといふことあり若州より來る水故ワカサ〜といふと也昔若州より鶴を放しにこの井戸を内より出しよしなと例の天竺無熱地につゝ類の浮屠氏の説いろ〜夥ありて與力同心共々信仰けしからすいろ〜の奇瑞を唱ふるに可笑ことの多き也しかし可尊はこゝの堂守の妻盜賊に逢ひし時之訴之衣類之品數等夥し事にて堂守まで屋を潤ほす利益はあるとみえたり○十四日 くもり 漸に昨夜までにて薪能すめりならものは能好故に昨夜も夥人出しといふ也江戸ならば是非喧嘩のあるへき事なれ共七日之内に頭はらるゝ人もなし江戸ならばヤンヤ〜とか親玉とか彼蜀山人かしはらくといふ一聲に大地震餘坊主や驚ぬらむといひし騒のときも一二聲所々にてエラヒ〜といふ也冠りものは奉行の出し時はならず江戸ならばかふりものをとれと嚴敷いふへきを同心か行ていさゝか手真ねをしてみせる直によすなり大聲をあけて制し六尺棒

を持出すことなと絶無なしこれ自然の風土によるものなるへし能七日續けはよからぬことありといふ當年も半日は流たり○十五日 くもりさむし 風邪大に行はる夜窓の障子のあかきにおとろかさされて起出けるにまた寅過るころにてやゝかたふく月のかすみに匂ふさまいふへくもあらず老のねさめも春の曉のあはれなるをみるのみはわかきむかしにまさりけるなといひつゝ又ふし戸にいらけるに庭の外面のうま場の方にてきつ狐のしはなきけれはきぬ〜に聲うらむくたかけもなきをあなかまなといふうちに忽ちに遠く又近く來り或は梢にも聲する也地を走るもの鴛ならはかくはあらしとよく聞はきゝしらぬ鳥の聲にてはや遙なるいなりのみやしろの森へ行てかすかに啼也こゝへきしころ女共か笛の聲に似たる鳥のよるなくを聞て水くむ男にとへは夜鷹てふものなりと答へきくゝつめに似たる名よとて笑ふをきゝてめつらしくとなら人によく問はそは鷹に似て小さくこゑは猿樂のひゝきといふ聲に似たれば笛

とりといふとかたる故に眞淵翁か僧のかたりしとて冠辭考に載られたるぬえ鳥ならしと其ことを人にもかたりしことのありきしかるに古今うち聞の呼子鳥の條にすゝみ鷹に似たるといはれけるよふこ鳥もよるなく鳥なればぬえとりに似たるものかうち聞の書入にはかほとりといふも呼子鳥のこと也とみえたれとも契沖かかほとりのこと聞かむとなら人に尋ぬれとしらさりきと代匠記にするし今もなら人にしるものなきを呼子鳥と同しもの也とはいかなることや千蔭はかほとりをつてふとかいひしと覺へしかたしか成説なりやいかに万葉にぬえとりかほとりともに片戀嬌するよしによみけるも似たる故ならむかきさらきの夜半にきけるは三ツのうちいつれにか有らむうち聞にいへるかほとり呼子鳥共に古人の説に木こり山かつらか咄をもて凡に定めしものかいかにとからすの雌雄のけちめのことくおもひ迷ひて

いにしへと名をかはるらし春日山はふりも今はしらぬかほとり差別

おほつかないかに定めむ呼子鳥かすみかくれのはるのよの月

かすか山千とせかはらぬはるのいろなとかほとりのなかくてやはある

○十六日 くもり大にさむし 忠四郎かたより貞五郎の不快のこと申來る聖堂の御試にも出すとこの人わかかたへ來るとしわかなる人のうちに才あり書物をもよくよめはいかにやと大に案事する也○けふ廐の猿廻し來るみなノノ三之間にてすきみする也猿すら人まねを教によりてする子のをしへのよからぬは嚴敷せぬ故也と其旨市三郎へ申聞かせたり此上は尙又嚴敷する積也さるの藝をするをみて人々感する泣まねなとする躰驚へし市三郎に問ふ人のあのことき藝するを人々感すへしやといふに人のならば少も感せずといふ故に夫に附わか恐入ることあり今まで出格に被仰付たるには氣のつかす十人並の人を相手にとり争ふ氣ありし也人のそしり尤至極也此上は今一段つゝしみて人物をあげ万人之内を諸大夫之内へも加られたれば万人の人にすくれし人を見てわかものさしとして出

精して 公儀の御恩を難有深くつゝしむへしと大に恐入たり友野先生より陸放翁韻を用ひし詩作を贈られたりよつてけふのこゝろにて其和韻をしたり理學を好むものゝ詩也とてかゝる詩は人の笑ふことなれともわかおもふことなれば少も不構

欲問紫陽性理微。得閑瘦馬訪朱門。初聞戒懼戰兢教。未識沂雩浴詠歸。心鏡照身悲舊醜。汗珠走背愧今非。嚴師伏乞砭矜傲。慎換韋弦日據依。

○十七日 雨 おさとけろくゝに平臥十二月廿一日に一寸起りしまゝなれは藥の効を奏せしなるへし此ほとはおさとの考に葛根黃連湯に大柴胡湯に仕度と事おもしろくおもへは夫にしたり大に効あるかことし四五日以前などはめつらしく針をもち夜歌などを出したり歌は甚腹にこりてよからすといふ也○一乗院の宮の御うたは 禁裏の 御勅点也乍去御相談は御家來の則名といふ御家來也二條家の賢き男也よつて宮の御意に叶はぬことありとて予に御相談にてはいかゝあるへしと内々儒者より噂

はなしのことくに云故に大に恐れて万一御歌の御評加墨なとせは卽坐に罰あたりて手まかり口ゆかみて後々いたくこまるへし其上官家は御歌は專ラの御事武士は全武門の余暇のなくさみにて殊にわかうたなといふことは別歌にはあらずはなに啼うくひすにはあらずドフにすむひきかへるなるへし中々以とて大笑せし也○きのふの猿舞より別市三郎を嚴敷責める也かれ元來驚才凡下のものなれとも猿に准していたくせめたらはいさゝか人まねする位にはいたるへしもとより猿の藝かこゝ水をいるゝ類故勞して功なし乍去力をつくしてするか親役也これ實に親泣子なきといふ類也

○十八日 雨さむし 市三郎と劔術を遣ふ同人一刀流に成少々あかりたるかことし遣ふうちに立腹する故に嚴敷せしに落涙する也これこの男のくせ也○古梅園より年々の例にて梅花一枝をおくるよほとよき紅梅にて匂ひ別段也古梅園の名此梅によれり初瀬にある貫之梅の一種也と云傳ふ

かゝること銘所に多し貫之梅といふは初瀬にまうてけるとき貫之のやとりしやとの主と貫之贈答之歌集にみえ貫之かうたは得意とみえてみつから古今集にも被載たりこれによりて初瀬に其名のありしなるへし西大寺に僧正遍正の柳といふもの今にありみな可疑もの也筑紫太宰府の梅なと菅家のこち吹はといふ御歌よりの考にはあらずやしかし飛梅と号すれば所謂あるへし神事は論するもかしこしけふ梅のちるをみて感有てよめる

待花を催すけふのはるさめにめてみる庭の梅はうつろふ

与風例の答恩兼元を見て

常帶腰間三尺劔換紳鐃出答恩詩答恩今日爲何事唯樂吟哦弄酒卮

なと、椽頬にて吟し居たりしかるに詩はかりに酒はなし雨天のこと故春雨なからさひしきこと也忽民藏來り八日出十日限之宅狀を出す夫婦うちよりてよむ也母上の御不快や御狀なしとおさとの驚ていふ也新右衛門

の書狀のうち詳にありて御當分のこと也と奉伺候る先以安心也茂兵衛跡之不始末歎息の極也天の亡す時なるへし可憐地下の茂兵衛か心いかにや茂兵衛か面かけ目に附て落涙する也彼良刀を得て子孫のためとおもひ夫に子孫を失ふ天地間のことみな如此可歎前のまつ花の歌其意也しかるにみなよきことはかりを思ひよきことを急はいかにわかいましめに過に同じこゝろにて

舊燕辭巢新鴈到霜楓漸絳菊初衰山童不識天然味日々揮竿敲栗枝

とももの題せしことのありし也○日記之内師父の論小學内篇通論の内に樂共子曰民生於三事之如一父生之師教之君食之故一事之唯其所在則致死人之道也書節とあるによればもとより差別なきこと勿論なり乍去禮記にも父仇のことあり師のあたのことなく其上師に三年の喪をせしは孔門の弟子の外にしへにも三年の喪を必とすることを不聞其上に右之樂共子申せし内に唯其所在則致死とありこれ父の手元にあるときは父君につかふ

る時は君師に隨ふ時は師にて其時其時による事とみえたりしかるに師と父と場所一度に來るときは重きに從ふこと勿論也是服忌の令によりてもしるべきこと也其上前にいふはいにしへの事に而今の師といふものは全之内弟子の類等は格別其外は出家に限ることなるへし然ルときは何の事かあらむ既に文化の頃手習の師の恩歎によつて人を殺せしものありて何歎之時石川長次郎の世話にてくり出し其例を用ひしことあり差別はなかりしかと覺へし也内寄合歎評議之内なるへし殊に獄は人情に隨ふと申すを出家などの例によりて今の普通の師を論せむにはいかゝあるべき人の服さぬ也乍去名と器とは人はかすへからす名を正しくせぬは事の不行ことにて師といふ名何分にも筋立てはなるへからす既に民間の匹夫匹婦にも主従あり一石二石之 御朱印地至るへ小給所も諸侯も地頭と百姓は同じ意なるへしよつて師匠といふものは必出家にかきるとせぬとて又味あるべき也われいかなることか其詳はしらす師と父と鬭諍に及ひしとの

一語はかりにて只なくさみに御笑ひのため贅言を出せりかゝるもの武士ならばものいはす切腹勿論不幸にして死すること不能さるにおゐては死一等を可宥ものかいかに兄弟にて殺し弟のかた弟子にあらざるならば吟味なとするものにこゝろあるべきこと也○山下邊の親の敵討の後篇ははいかゝ相成候や封廻狀にも不出や○序にいふ大津音次郎并砂壽つゝかなしやいかに○手を下すとき義のたゆるること手を下すもの目上のもゝ對するときは辭ならば格別かゝる所にはいかゝあるべき折たく柴の縮ありの疑獄とはことなるかことし弟たらぬものわか切りしといはねはならぬわけ也かゝること義にくらきことあるといらぬことを仕出かす也前の師の字を出家のことによせてすると即坐の便利あれ共こゝに大害あるは君父師のみちを聖人の定置玉ひしはもとより天地とゝもにすべきことにてしかれば樂共子の説の外別に論あるへからす禮記にありしと覺たり孔夫子の没し給ひし時門人服する所を疑ひしに顔淵の喪に夫子其を喪

するかことくにして服なかりしかは孔夫子をも父を喪するかことくにして服なかるへしと事以上空覺也に成しと也書一覽有へし今人の師弟のみちをいかにと問は孔子の如くすへしといふ譯のこと也しかるに師弟のみち大にやふれ手蹟の師は五節句二百文の日傭のことく先生の号灰ふきをかへさせるときも呼にいたる大破の弊風によりて刑獄のことを定めむには公儀にても其弊風を御取用のわけになるいかにも可歎の至ならずやこゝの場を以いふときは師道をたしかにせねは尊くなき也しかるに其道出家のことに限るやうに成たらは天下に儒を行とするものには出家の類にはあらずよからぬ奴なれ共かの大鹽平八郎か弟子のうちには賢者ありて諫て死せしもあるなれはまして純正の儒者之門弟子などの樂共子の説を鏡のことくに思ひ居るものなとはいかゝおもふへき所に寄刑獄のことによりて其弊風を長し志あるものゝ志を失ふにいたるは不容易事也孔門の喪服のことによりても師父の差別よくわかる也かやう成事に當坐の論

はよき様なれ共大本達道にかけて味うすくしては天下の御政事に不成故に戸田侍従の執政たりし御時などは大學頭御下問ありしことなるへし畢竟か弟に其始末のことを再び訊問したきもの也これ前にいふ名義に暗き人いらぬことを仕出すといふ譯也

○十九日 雨 きのふ内藏之介きのふ江戸に立せりかゝるに雨ふるこまるなるへしくらの介至る眞實之男也

○廿日 雨 奉行所より北手二十町はかりさほ山眉間寺の西北に土俗大國の原といふ所ありそこにいなりの社ありこれは添上郡法蓮村の持いなりの社地なりそこに狐の顔にて人の如く杖を持立居るものを彫し七尺ばかりの碑のこときもの三ッあり大國のはらのいなりの石といふ也これは隼人之圖也よつて好事のもの所々よりすりもて行也ならにては摺しは貳朱はかりにてうる也このこと五畿内志大和添上郡山陵の部に佐保山西陵巨石七狐を彫刻す天平勝寶六年八月火葬の地にて 聖武帝の御母よしあ

り好古小録には 元明天皇御陵碑の次に此隼人の圖三ツを出して年曆等なし右之圖を爲摺て蜷川能登守と鷹見十郎左衛門に遣すとてしらへみるに右之通也けふすり來るをみるに謠曲のつり狐のときもの杖をもち立居る也上に北といふ字を彫あり五畿内志に七狐とあり好古小録に隼人三ツとあれ共右は五畿内誌誤なるへし狐といふは隼人の姿は犬なるを狐と誤りしにて今三ツあると北とあるとをもて考みれば東西南北と四ツありしの一ツ失しなるへし其外の二磨滅してみるへからされ共數と北といふ字によりておもふ也今大黒の原といふは大皇后の原唱ちかひしに無紛これは五畿内志のことくなるへし七狐ありといひしは人傳に四ツ狐の居るといひしを四と七を聞誤しものなるへし元來五畿内志此外誤多ければ旁五畿内志よるへからさる也又隼人トハの圖也といふは元來隼人といふは兵部省に屬するものに大隅薩摩の人々にていにしへ唐にていふ猯猶なといふ類かもしるへからす神代火酢芹命の裔にて薩隅に居りし也よつて

万葉に隼人の薩摩の迫門とよみしよし冠辭考にみえたり扱又狐と隼人と、間違は神代卷に火酢芹命苗裔代々天皇の宮牆の傍をはなれす犬にかはり吠て事へ奉るへき諾請あるといひ延喜式隼人式に凡踐祚大嘗日に應天門内の左右にわかちならひ發吠其外所々に隼人吠を發することありみな守衛のことをするとみえたり犬門もりするとの義にてかくあることなるへし隼人といふは隼を高塘の上に射るといふ周易解上書の注に隼は小人也といふによりて隼人と附しと壺井雀翁はいひ置たり右之通に凡隼人のことわかる也これによつて考ふるに今存する所の隼人の圖御陵の四方にたてしものなるへしいつ頃の物といふことたしかならずといへ共地名と五畿内志の説に先よるときは天平勝寶のころのものなるへきかさすれば壺石碑より古きもの也與力共はなしに元來は四ツありしをいつか一ツは關東へ行て當時上州の邊にあるかといふ也いかゝあるへき勢ひある人の下屋敷などに古來移されしなるへし今いなりの社地にありて奇といふへきは

以前外の地往來近き所はうつせしに狐よるく來りて啼こまりし故に又もとの地に移せしとなら人は申也可怪こと也犬を人か狐とあやまり傳ふれば狐もわか類也とおもふ奇なること也いなるといふもの吉田家の説によりてみれば狐の縁なきものなれ共ミケツ何と歎いふ万葉かなに用ひしより誤たるよし吉田家にてはいふなれ共狐も今にてはいなりの遣ふものことくこゝろへて其上氣の高過たる狐はいなりの積なるもあるへしこれ必^上おれ共にかみは五人とめかけいといふ類の僭上狐なるへし予小普請奉行たりし時小普請方の稻荷社の大破せしを同所の小遣へきつね取つきていろく口はしり初午前に普請してくる様にくるひ走りてのしり其頃も小普請方は坂入太三郎御取締懸りに同人大にこまり予に伺ひ出たり右のことに不拘一覽せしに殊々外大破せし故に御修理せしことありし也其小遣ひ初午の日には宅にゐる至る穩なりしと聞し也小普請方のいなりは諸職人の手間其外奉納故けしからす立派に出來し也神も人人もかみ一狹

なること也されは人々神社等少にゐる不敬なることはならぬ也後世隼人といふ名のあるはたかのはやきといふのみによりし也實はいやなる名也○廿一日 霰又晴さむし けふ小鴨を人のくれたれと今頃の鴨味なかるへしとおもひしに冬よりも膏十倍して味ことによし江戸の鳥とは風土の相違あるとみえたり貝鍋忽に油鍋のことくに成れり驚はかり也新右衛門か鳥好のことなといひ出し也冬々春のかた食物ある故なるへし四ツをうちて書物を仕舞とり鍋をかけ扱ちやも喫れぬ故に酒を少々給たり少とくりの酒おさと予にて壹合に不足のみて余あり酒料を減せしをみるへし○廿二日 晴さむし霜影氷あり 頃日別當中宅の不束ありて手鎖をいひ附たり其こと俊藏宅に夜食の時同人申して夜行は上みにて御嫌などいろく話をせしにそは例の小女か誠さむよく聞て御いてよこはきこと也といひ扱又御とつさむか外のものならばかゝるはなしもあらし畢竟他人と思はぬ故なるへしといひしと也けしからぬ小女也誠一いまた夜行

の沙汰なし定而俊藏か序に一躰の心得を示せしを小女を^て知てかくいひしなるへしみなく大にこしやく也とて笑ひしと也けふ汝きのふおもしろきこといひしと也話せといへとも笑ていはす此小女の躰常にかくの如し○きのふの鴨の肉のうちより貝ならば眞珠といふへきをくひ出せり人間ならばシヤリなるへしひろくいへは病の類なるへきを坊主共奇瑞のことくいふ也匏は貝のうちにては佛縁ありやいかに可笑こと也人匏の眞珠をいはすしてシヤリを尊ふはいかによく調へみたらは火あふりなどに逢罪人かシヤリあるもしるへからす也

○廿三日 晴 わかくさ山かすか山の霞けしき至而よろし歌によむことく成こと關東にはなし大和京都ならては霞時雨のうたの實物わからぬ也○けふ周禮をみるに占筮のうちに占墨のことあり左傳に人相のこと初るみえ墨色などいふことは後のものとおもひしに至而古きもの也新右衛門など吟味等にいることもあるかとしるす也

○廿四日 晴 前の隼人のことを記すに付おもひめぐらすにやりのこと至而古きとみゆ壺井鶴翁か延喜隼人式の注を引て帶横刀執槍歩行といふことみゆ槍鎗共に一物にて武備志其外にみゆる所今のやりに無紛もの也元本誤字多ければたしかによりかたし○こゝにては鮭を一切位人に遣す也當年冬蝦夷鮭の初船にて船廻しに六七本いたし度其節幸三郎手製のこのわたも廻しもらひたく候しくれ濱くり同斷也○奈良奉行之巡見は奉行之給物代は拂ひなし其外は木錢米代也けしからす馳走をすといふこと故にけふ村々のもの呼出獻立書爲出みに中間迄焼物附にて酒を出す也よつてわか巡見に付第一に村役人共みたりに會合相談と号し酒食すへからす且一汁一菜にて酒は出すへからすといふ書付を取置たり必可被行ともおもはねとも民を傷むることのいやなれはかくする也

○廿五日 くもり暖氣也 朱子文集四十一に楚令尹子南之子棄疾、雍糾之妻の事を連嵩卿の問に答られしことあり其意は兩人とも如何様ともいた

し穩に治めは上也其次は死而以身悟之次也舍是亦無策とありこのわけは
令尹子南といふ人を楚王の殺さむとするよしを子南の悴たる棄疾に咄さ
れしに主命を親へもらされす親の殺さるゝを知らず告さるは父にたゝ
すとのわけにて自殺せし也雍糾の妻は父祭仲とかいひし人を主よりの申
付にて雍糾か殺さむとすることをしり母に父と夫といつれか親敷と問ひ
しに四海みな夫也父は一のみと母はいひし故に夫の謀を告ければ夫を親
の殺せる也みな左傳にみゆもし入用ならば友野へ御聞可被成候空覺にて
したゝめ候夫を朱子か死ぬ外に策なしといはれたらば先達而之親のため
に師を殺せしものも切腹せねはならずといひしに符合する様なればけふ
文公の全集を讀序に見出せし故に御見合にしろす也○藤堂家より例にて
糖漬の魚を贈其糖味ことによし市三郎湯にいれてのむ也与風彰常かかく
せしことをおもひ出てもおもはず落涙する也われ斷然として不人情のもの
とならぬとおもへとも彼老牛犢をねふるの情おりゝ起る也これ父子の

情無余義に出るものなるへし昔子夏子を失ひて眼を泣潰したることを曾
子の叱りしこと禮記にみゆる也孔門の上足弟子たらむものゝかゝること
あるへしとはおもはず禮記は漢儒の手に出て可疑ものなりとおもひしか
今更にいかにかとおもふ也

○廿六日 雨 此ほど大乘院の中間村方にあはれ候而五人被捕差出に
相成其外盜賊の申口にて博奕打共數人遠島に成なら市中之惡黨大に恐れ
木辻町其外に行てあはるゝものなし風聞を爲糺みるに一乘院宮にあらはけ
しからぬ御取締に而中間共悉御築地外に出候義を御差止に相成みなおと
なしくなりなら市中之よからぬもの共追々四國巡拜なとゝ名を附候而一
人貳人と段々出てよほと恐れたるよしに而出入之町人其外より禮をいふ
也此事もおもひ附も新規をもせず引合之申口より御法通にせしはかり也
これ三年かゝるわけ也

○廿七日 雨又晴 並便之書狀到來する石河より歳玉佐々木よりちゝふ

緝來る○けふ庭の築山の上を狐遊歩行をみて女共大に驚く泉水のかも追々に五羽被喫たり

○廿八日 雨 家來共と劔術を遣ひ大にかたを打市三郎と鎧を遣ひ又かたをつかれたりよつてけふ按摩をよひてもませかたにはけさ鎧にてつかれたるところありこゝろしてもめといひしに盲人大に驚て穴にても明たるところ得たる躰なればをかきことゝおもひて青くあさになれるはかり也強くもめといひしに漸承知せしも可笑

○廿九日 強雨也 けふはいまた痛所よからねは未明より讀書はかり也白洲其外に出ること等例のことし

○晦日 雨大にさむし いまた稽古はせず其外は平日のことしはる三月になれば三ヶ年已前出立の時のことをいろゝおもひ出て去年もことしもよからぬ也甚敷にいたりては品川に至り人々來りたらむに彌吉たけたらすは其時いかにすへきことかきたるもの也なとゝまておもひ出す也三

月頃出立せしことなれば其ふしゝにいたりて夫婦共春雨のさひさいとゝうらかなしくおもふ也晴たるときはさもなけれとも在勤のなか雨いらぬもの也この味在勤せしものならては知らす都筑よりも雨ふりよからぬといひ越せし也けにもとおもふ也○けふは牢番の子分壹人を召捕たり大博奕打にゑ其上非人の追放もの也品々悪事あり外に同し類のもの又壹人召捕この牢番といふものはみな髮結にゑ奉行所に詰居囚人ゑ世話いたし其外風聞内さくりなどいたすものにゑ江戸の岡引にゑ白洲番をかねけしからぬ勢あるもの也さてよからぬものなれ共手を出すことならずこの頃少々工夫をして其内尤甚敷もの壹貳人手をかけたたり良民とも殊ゑ外難有かりて大なる隱徳に似たるも大笑也

○三月朔日 晴さむし霜雪のことし けふ七ツ時に飛脚やより備前のやしき并阿部勢州の御屋敷焼失之由申來るに付評定所はいかに幸三郎はい

かにとみなくとりくりに申て御用状をかね可差出哉いかになといふうちに六日限之書狀六時頃にとく用人持參る別條なしか火事の事かどけたましく聞也これ宅狀ときくとみなく胸はどきくもの故なれば也出火のことにて評定所は別條なしと聞て先以安心いたす○母上様の御不快いかにかと申居候ところ御月代は遊はれず候得共御快然と之由恐悦之御事也母上様の御狀は例なからいかなるわけかみな落涙する也御名文を振はせられたるにもあらねと御誠のとく故なるへし昔孔明か出師表に忠心地を貫くことを書しかは今以人の落涙することこそかはれ同じ御事なるへし引續き西九下并大名小路執政の御方に御類焼と之御事いかにや可恐こと也○新右衛門祝ひ遣候短刀いまた極り不申候由よろしき品に候はし新右衛門氣に入候はし御取極可被下候太郎祝ひの衣類のこと當年は追々爲替差立置候間惣年寄を御待不被遊候而新右衛門御談し金子御受取母上の御なくさみに段々と此ほとより御したてあらせられ候様奉存候

○豊太郎おとなしく候而氣分弱くは有之間敷哉と之御案事母上の思召御尤に候得共こゝに一ツ近頃ためし候事御座候十歳以下のもの懸念過或はこはかり候様成内場過たるの類みな成長いたし候而御用立候もの共に御座候畢竟子供なからよくわかり候故におのつから右之事有之候わけに御座候十七歳より廿五までのうちに武術をいたし又は學問をいたし候得は右之幼年の時よくわかり候義附てまはり候而穩厚成よき人物に而世にも被用申候扱又幼年の時くらやみを不怖土藏入平氣なと申候は十人に九人半は必捨物に御座候先ツは愚にて可恐わかちなきもの故に成生の後大愚に御座候またわかちありて不怖もの幼年には決るなき事に候得共生質疎漏なるか或はふときころあるものに付十人に九人は必身を全くすること難く高運にて心附候とも元來痲症を乘直し候内其人も世話する人も必死の修行にて出來上り穩には參り不申候身を不失を十分の出來といたし候位之ものに御座候こゝの所親の欲目に而大にあやまる所に御

座候幼年の時才氣ある人みな棄物に御座候穩に上を望み候は親の誤に御座候太郎など何卒彌吉の如く成生いたし候は、外之望み少も無之候豪傑めきたることみな可患の限に御座候○母上様御狀の内に左衛門尉之早く歸りを思召候よし御尤に御座候私も其心得に御側に孝養の出来不申候義を後悔は千萬を以數ふるにいとまあらす其度ことに恐入居候義に日々無事に御目通之義 神にいのり候も夫より外無御座候去なから母子の情はなれ一躰を以申候は、新右衛門等之結構も御座候間今二年三年に左衛門尉なとよく歸府いたし候は、一血屬之内十二分に過いか様成事可有之も難計と奉存候間天道を恐れ思召候は、左衛門尉の歸り一日も遅くあれと夫而已御祈被遊候様奉存候私何之徳あり何之功ありて諸大夫に相成候哉それは新右衛門とても同斷に御座候例にならすと迄に被仰出候組頭に相成候は新右衛門は例もなき御用立候と之事にてかゝる子供二人まで御持被遊幸三郎とても衣食住に事足候義に付當時母上ほと

人御家人に何人有之候哉と御かそへ候は左衛門尉無難につとめ候へ決り早く歸るへからすと神佛へ御いのり可被遊候夫よりは少も大丈夫の御養生第一之御事に御座候私など灸事は一ヶ月に十日酒もまれにのみのみ候も五勺はかり尤與力共酒給させ候節などは左様には無之候酒をのみ房事も夥いたし度相成候得共老母のありて五十近き身其慎かならぬかと嚴制いたし候は不養生いたし候義は無御座候四五日已前にも順右衛門龍介市三郎誠一をくりかへし二度まで劔術遣ひ遣し以前のことく歩合は参り不申候歟に候得共つかれはいたし不申候近頃力はまし候歟いつにても市三郎のまげ元結を必打きり申候是は檜棒と大刀に近頃千本合候切返しいたし候故歟と奉存候右等之事私より申上候は恐入候得共去私ならては申上兼候間御心の御保養と相記申候○けふは前にも記候通けしからぬさむさに候得共去泉水の鯉はね其外馬場の參候得は一重さくら開申候いつしかと暖氣に相成居候と相見申候

朝さむく霜はおけともはるなれや馬はのさくら咲初にけり

ふるさとの比えにもかくやさくらめとみつゝそ忍ふ春日根のはな
なとよみ申候當年は當月十五六日頃出立にてよし野はつ瀬多武のみね
へ参り候積に御座候追々寺院并百姓共々伺出申候是は旅中のたのしみと
奉存候御用向に吉野のはなを見候とは珍事のうちと奉存候○今日与風
禮と申候ことを七律に賦し申候右は私と新右衛門とのいましめに御座候
かゝる詩は上手にても理學風の詩と申候而詩人はわろく申候間拙咏にて
は一見にてけるゝなるへけれともいましめにはいたし候積に御座候

一敬形容千趣節昔人由是致心亨曾參臨死屏華箒子路棄軀整緇冠能祛邪
魔白虹劍忽治傲疾紫霞丹與君以禮爲舟楫共渡波濤官海難

是は聖人の天より授りし至極のみちといふは書經の洪範なるへし夫に敬
するに五事を以てすとあれはいろゝ説はあれ共敬は聖人の道上みも下
もこれ一本の道具なるへし禮といふものは其敬のすかたにあらはれ候

ものなるへし夫故に孔門の人々みな禮を以的としてみちを得たるか也顔
回の非禮みることなかれの章にてもみるへし夫故に曾子は臨終に禮にた
かふとて華やかなる大夫のゆかを退そけ子路は殺さるゝとき曲りし冠を
直して殺されたりかゝるものなれば敬は百邪にかつともみえていか様な
る邪心をも敬の心起れば即坐に切拂ひ禮といふ藥あれは高慢心などは直
によくなるへしよつて新右衛門われと禮を以船ともかちともしてとかく
にこの御役の海のあらなみのかたきをも無事にわたるへしといふこゝろ
也今日与風こゝろに浮みしまてを並へみし故にいまた物にはならねとも
はなしのうち記す也追而霞舟先生の刪正濟しあとにてよくしるしてま
いらすへしこれはわかいましめをおもひ附たればわするへからぬやうに
詩に作り夫をまた新右衛門にも贈つもりなり亭主の好める赤き帽なるへ
し御笑あるへく候○手のいたみかすにてたて二度にて全快也赤紫のあざ
少もなく消たり酒かすの上品神のことし

○二日 晴さむし され共よほとはるのいろと成れりけふはひるな祭の
したくとておさとはしめみな重詰の世話する也ひるなは三寸はかりの内
裏さま一對あり夫をとこの間にかさる也御なりよりは白酒は多く召あか
ります也江戸と同じく三升也この白酒は二百八文也江戸の初霜といふ
白酒位より少々よろし豊嶋やには不及也ひるなの御膳といふものは御椀
はなし小はま栗の貝にていにしへ濟しを寶曆の頃より下々にてもいろい
ろの器出來しよし也俳諧に
はまくりてあけるか娘氣にいらす

とあるは寶曆の頃のことを申せしよし也おさとかかみを結ふに白毛を毛
ぬきにてぬく也其ことを

怪問鏡臺藏 鑷子言尋華髮理 飛蓬可憐老婦猶春意 竊覆衰容媚此翁

この戯に題せしを講してきかせはこゝとなるへし歌にてはかゝることい
はれぬ詩之一徳なるへし絶倒○死罪のもの三人あり内貳人は十六と十七

になるもの也よほとよくみゆるやつ也非人手下より段々仕あけに三度
め四度め也助けたくても仕かたなし可憐もの共也

○三日 くもり 上巳之禮に付表之居間は儒者醫者并古梅園等之町人い
つる醫者之内にも花井隆助は奥へ參る白さけなと給さする也與力同心は
大書院に禮受ることなり○よし野々巡見近きにあれはいつくの山はか
く也いつくはいかにと日ことのはなの様子はつかに一枝つゝ折來て注進
する也一目千本といふ所ははや咲初たり谷々の名ある花ともはいまたひら
かすよし野のはなみに行といふも御用に花信のたよりを聞て行なと無勿
躰こと也○ひる飯に魚類ありさくらさくころより魚はあされて味なし中野
のかたは海邊にてけふの潮干はことに賑ふよし也いはゆる住よしのはま
也ひる後に成人給人の妻共來る其のちにおさと屋敷内のいなり詣いた
す供は民藏也女共歡ひてわれもくゝと行也われは表之居間に書をよみ
て居たりしかるにたのみますくゝの聲することしはくゝ也不思議におも

ひて所々廻りみるに宅に一人も人なし只われ壹人也市三郎は俊藏方け
ふは別段なればとて遊ひに行父上母上はおさと、御同道也よつて残れる
ものわれ壹人也乍去御奉行さまか臺所の取次もならず庭内所々尋まはれ
共兩所をいなりにては往返四五町以上のみちといふ屋敷なればなか
しれす畢竟ならに客といふことなく犬なく盜賊といふこと奉行所にお
ては往古よりなきことなれば土藏にてもいつくにもべりなしといふ仕
來にてもとより火事もなき國故かゝることのときこと出來し也
○四日 くもり又雨 庭によほと築山ありきのふはそこに夕かた遊
ふ其築山の下はよき芝原也父上など其芝原にて女共御相手にて御けんき
よろし日くれかゝりければ松葉を焚て燭臺のかはりとす至る明也燭臺な
らねは蠟そくの儉約也燭臺十本よりもあかるかるへし馬場のさくら開け
るもあり開かぬもありこの頃は一日に一兩度つゝおさと同道にて馬場の
はなをみる也大成さくら十本はかりあり

○五日 晴 一乘院宮二品 宣下有之候間右を恐悦として參る今まで紫
衣は不被召候得共今般を 宣下に付紫衣御着用也 先帝御遺服を御直衣
御拜領に右を御ころもに御直し被召候る春日は初御拜有之候と事
也○今度は宮も正月を暫御上京也其内御親敷御參 内もありける歎なり
當 禁とは御兄弟故なるへし當 禁の御庭に垂絲櫻のありしか枯たれ共
御あと植の事六ヶ敷とを 叡慮ありければ 一乘院宮より御内々御進獻
ありしに 禁庭にても殊 叡感ありしとを風聞儒者のはなし也京都の御
様子おもひやるへし御儉約なるもの也

○六日 雨 きのふ一乘院に今度御大禮を賀として罷出たりしに鴈之間
の次篋之間といふ所に御通しありて常に御目見する震殿といふ所は御差
支有之候由に替席に成御酒御吸物被下之直に歸宅いたし候積之處參殿
を由御門主御承知被成久々御逢不被成候間平服に着替候る震殿に罷出候
へとを御意に則震殿にて御逢ある俄のことの御様子也御菓子御酒等出

候も御庭のさくら宜候間見候へと之御意に御先に御立被成候間恐入候間平伏いたし御受申上御跡を所々拜見いたす御築地傾き檜皮ふきの御屋根等もりて恐入たるさま也御庭は可成に御泉水に船二艘いれあり八九尺はかりの瀧あり的場ありて手入ある大名の庭ならばよほどの事なるへし御泉水へ廻廊かけわたして月見の四壁なき臺ありこの臺關東にはなきものなるか上方には多き也御もの見へ参り候へと之御意に御案内被遊故に御あとより参り昇りみるに興福寺の草はらを見わたす所也近頃出來ものとみゆる也こゝにて樂をすれば人恐れて近邊の酒のみ遊ひ居るものなど遠くへ参る故に興を却る失ふなど御はなしありき御庭を御歩被成るゝころ曲かとは或は殊更御意などあるうちは地上に平服すること也御門主は白綸子の御召物に紫の小柳にしろく庭たつみの織出せる御袴を被召たり御門主は平日殊々外御長髪故寒山拾得のことくなれ共御いろ白く美僧にて被爲入故にちと菊慈童めきたるかけふは二品 宣下の被爲濟たる

故歟よく御さかやきを被遊たれば並々の僧形に被爲成る却る御美僧之御姿の減したるかことし三年來正月其外共に御さかやき被遊を拜し奉るは今日初也夫より元々震殿にて御酒被下われ二品に昇進せし時の酒宴に用ゆる盃なればわれにとらするとして源氏畫のある磁盃を被下たり勿論被召上たる御盃にて御みつから御酌なし給ひし也不相替御樂ありて御門主は太鼓琴横笛など被遊し也われ御家來共に向ひ私も樂をいたし度ものにて候今より學ひてもなるへしやなといひしに御門主の被聞召てわれは官家の外の慰ならねはこそかゝることも好めり關東の人々は武門を以官家を守護すること其任也しかるに樂を成し堂上めきたらは武士弱くなるへし武士弱くなりては官家の御爲にも自らよからぬわけ也平家の士共か弱なりしさまをもみよつて予は左衛門か樂を學はむといふは却る感心せぬ事也この藝は堂上或は官方等のこゝろゆかせの慰とおもふへし武士は第一に剛毅ならてはならぬもの故にかくいふ也この頃もこのこと京都にて

鷹司關白とこの物語せし也猿樂の太鼓など北方殺伐の聲あるなどいふなれ共却而そこか武家の樂には却而雅樂よりもよかるへしとおもふといふ御意ありて与風樂のことをいひておもひもかけぬ正大成御高論を承りて不覺汗背をうるほせし也ちと法親王には御人材過る也可惜御事也此御門主御幼年とき乳を上ケ奉りし姥々今もならに居る也御門主へ御さかやき御湯のことを御家來より申上る御聞入なきときは其姥々か申上れば必御用ひあると也いたくかの婆々を恐れおはしますかと家來など密に笑ふといふか實は御性質よき故なるへし兩三度もさかやき或は御湯之事申上ればいや早く申にまかすへし又婆々方はいひやりくるゝなど御意あるよし也御おとなしき御こゝろあるとみゆる也この御才氣にて御乳人を恐れますといふ御様子よき味也

○七日 くもり 庭并馬場のさくら今さかり也庭の築山の上にさくら大小十本あり馬場には大木十本あり雪のことくちるも半にひらけるもあり

て馬場の末のいなりのみやしろある山の上よりみるけしきよし可憐けふも朝はふりてさむし晴なはこのはなをあたにはみ過さしとおさとけふもかたりし也夕かたおさとゝ兩人に庭へ出いろゝとはなをなかめて歌のこやしをせしか一首もよまさりけり○此節の魚類高直なることいふへからす小ひらめ九匁五分たこ一ツ十五匁也何分食はれす
○八日 晴 至るのとか也けふおさとゝ朝さくらをみあるくにおさといふこのはなにして酒なかるへからす昨年忠四郎か方々拜領物の初穂をもらひていつか魚をと存居候けふしかるへしといふ東坡か妻の仕舞置たる一升の酒にて赤壁の遊ひを助けて千載へ利口の女房の名をあげしにみあはすれば汝か才萬々なれ共可惜われに赤壁の賦のこと夢ならてはおもひもよらすされ共ならば酒やすければ汝か藏する所の物壹升酒と肴になるへしわれ又禁を破りて面をして赤壁たらしめむ奇也々と申たれば其こと御隠宅様に入御聞しにアツと御賞しありてそれ田樂よからめそれにて

雅樂にも猿樂にもかえむと之御意にて夕かたより庭の花下に其たのしみありき鯛一枚十匁の奢也芝地にて茶を烹田樂をおさとやく山上へ田樂をもち來るなとみなめつらか也き上巳に作りたりし詩あり

戲集松^ハ釵^ハ烹^ハ酪^ハ奴^ハ又^ハ架^ハ竹^ハ柱^ハ造^ハ奇^ハ廚^ハ假^ハ山^ハ一^ハ伊^ハ池^ハ三^ハ頃^ハ小^ハ草^ハ成^ハ甍^ハ助^ハ老^ハ軀^ハ

七十老親猶^ハ鑿^ハ鑿^ハ醉^ハ來^ハ伴^ハ婢^ハ競^ハ奔^ハ馳^ハ豚^ハ兒^ハ苦^ハ酒^ハ纒^ハ閑^ハ步^ハ花^ハ下^ハ攜^ハ筇^ハ吟^ハ小^ハ詩^ハ

親在^ハ東^ハ西^ハ遇^ハ佳^ハ節^ハ愛^ハ余^ハ共^ハ酌^ハ又^ハ懷^ハ余^ハ斑^ハ衣^ハ願^ハ速^ハ得^ハ天^ハ眷^ハ雪^ハ筍^ハ水^ハ魚^ハ供^ハ一^ハ廬^ハ

一所ニ江戸ノ母上ト孝行ヲシタイ ○と不取敢詩を賦して江戸の母上のことをおもひ奉りてお

さと、二人馬場のさくらをみしかけふ又しかりよつてそれをしるせりよし野より再注進來る花明日盛なるへしと申來るされ共十二日の觸出しあれは仕かたなしけさ市三郎に槍の突身いたし遣すかまやりの突身十二年ふり也乍去いまた市三郎には奈良奉行中は澤山なるへし同寸の仕合をしてみるに是は平日すこきをする故か昔にかはらすとおもふかことししかしいかゝあるへき

○九日 雨 きのふ日くれて例之通火をたきてはしめて花をみたりめつらし扱又龍介といふ家來奇人也きのふ七ツ頃に馬場に行みしに袴をも不着馬場のさくらのもとに二尺ばかり成筵を敷て只獨はなをみて余念なし側に摺火打一ツあるはかり也きのふは前に記す通なれば庭内には田樂などあれば夫を一さらに一徳利をもち行て遣したるに厚禮をいひき夫をひとりにも其酒を給なから日くれまでそこにはなをみて居たり定而歌よみたらむなれ共けふにいたり其ことをもいはぬ也よほと奇なる男也今般よし野の供に行てよき歌二首よめたらは一生涯の望たれりとこのほといふよし市三郎かたりき

○十日 雨 吉野巡見近しといふに日々の雨にてこゝろせかるゝこと也此ほとは江戸なとより見物のもの多來る也○夜に入候而二月廿八日附宅狀相届く母上様の御不快も御床上に相成候由恐悦之御事也其外御一同之御無事目出度候太郎丈夫之由悦敷奉存候順右衛門方之兒江戸出立之節の太郎位に相成候而且よほとよく太郎に似たるかことしよつて遊ひに參

ることにおおさと太郎のことをいひては落涙する也母上様は御快氣候は、御足をはかりに所々之御佛參第一と奉存候つとめてたんと御歩行被爲在候様奉存候江戸狀參り候度々に夢のことくに三日はかりはこゝろ必動き申候右に又此狀を母上の御覽ありて奈良のことくなるへしやと歎息仕候乍去少も心を動し不申候天道まかせと決心仕候○新右衛門之兒孫如何に候哉はや笑ひ候義と存候出生已來よきこと多候間福多き兒と奉存候丈夫何より之義に御座候○新右衛門之書狀之内茂兵衛脇差之事御尤に御座候なるほと捨候様にいたし可申候○ねりくらの義不思議也今日一くら出來候參り候間人の遣し候は惜くいかに可致と存居申候間早速に取入候進し可申候右は精牛皮を精練にいたし候ものに付先ッ江戸に類は有之間敷と存候見場よからす候得共實用に心有之候ものは至る悦ひ候品に御座候上方筋之皮多き所に良工有之候間出來候義に御座候○拙筆懸御目候處段々之御説御尤に御座候少々酒を被下候節之たのしみ書に

候得共書をかき候遊ひ可申程に氣けんに成候義無之候間壹ヶ月に一度之手習にも相成不申不精之手習子に御座候御笑可被下候今少弱候とも柔に認可申由忝候右に付工風之筆可給由忝候印之義被仰下是又忝候印章之義條印は論語の士は剛毅ならずはあるへからすと申候字に末之印章は二ツへ從五位下左衛門尉源聖謨印といたし度候近便に字しるし候可參候○日記之内北條之病氣可惜々々乍去御代官はかくこそありたく候此人立派成武士に大事之義を外に不申人と存候間別る惜候義に御座候人は百年之壽を五十年に宜候立派に御用立死申度ものに御座候夫も運なくては出來不申候丈夫ならては出來不申候間養生第一之事に御座候○書之事に付存出し候は少にても是は可認と存候はみな不出來に御座候先達も初瀬の僧正かもとより短尺を被乞候認遣したるに所々より集候紀貫之に手向るといふ事故に少々氣つまり候ひしか大不出來に有之候深山に寶あり寶に心なきもの得之と申候義能教にて聖人の無妄にも近きこと

にて無妄を史記に無望に作りあり何事も望ありては不出來なること必定也書家は書に骨を折儒者は書に構はぬ故にいにしへの人みな儒に能書あるといふも申サは先ツ無望の一端とも可申歟に候○龍野侯の勤謹和緩の額出來候由諸侯の書の位あるかことく無貪着も矢張前々意有之候故に候其本源をたし究候はみな多欲の二字なるへしと存候義に御座候○母上猪口に二ツ御酒被召上候由恐悦之至何卒御夜食に小猪口に三ツは必被召上度ものに御座候○廿二日廿三日出火之義た事ならず驚歎々々○岡崎に御頼置之中書忠勝朝臣甲冑之目かた御申越悦服いたし申候過日申進候藤堂家の士の甲冑と同目かた也忠勝朝臣にて惣目かた貳貫五百五十目也今の人の甲冑重過候義を常に申せしに暗合也

○十一日 雨 御用日也明日出立にて來る十六日までは巡見にかゝる故にこと多し○よし野へ行にみちの紀行などいふことはもとよりうるさし國の風土みむこそ專なれとおもひて其ことなしされと其ことしるさゝら

むには例のはなしにかふる日記の詮なしよつて出まかせを記す奈良奉行の預しることにてはつせよし野多武峰の寺々みめくることありむかしよりのためしにて必花の頃になむ行ことに有けりことし二月の末つかた其ことみちすからの村さとへ告しらせけり三月のはしめによし野よりは一目千本といふ所のはなをはしめこの谷かしこのみねの名ある花どものまだつほみなるを一枝つゝ手折おこしていつの頃にや行迎ふらむといひ來りぬ其ほとは予もしらねは與力らにとひはかりて十二日にならをたちて行へしといひやりたりよし野より手折こせし花のまたつほみなれといとくめつらし

みか月をめつるころにみよしの、一枝のはなのつほみをそみる
つほみよりいろもかをりもまさるかなよによしといふみよしの、はな
はるかぜの吹さそふともさくらはなわか行までは開かすもかな

三月七日によしのよりこの頃の雨にて俄さくらはひらきにけり九日の頃

やさかりならむといひ越たれとはやみちのほとけの晝餉する所とまりのと
ころ〱定めてふれしめし後なれば俄に改めむにはさと人らかうれひと
やならむとてやみにけり

大君のふかきめくみの末くみてはなにもかへす民いとふかな

これも又あまつみそらにまかせてん山さくら花ちらはちらなむ

こたひわれにつき随ひてよし野へ行ひと〱與力同心なら町の年寄町代
などいふものよりわか従者の末々までもかゝなへは百人にも過ぬへし其
人々の朝夕の餉よりよるのものまでみな里人のあつかりものすることに
ていにしへよりのためしにてはつかに薪と米の價とらするまでなればい
とこもろくるしよつてこたひはかねておきてすることく其所におらぬ魚め
つらかなる菓などはさらにもいはす餉の添物もことそきて酒出せことを
いましめさと人に其こと守らしめむとてつはらにかいつけて出さしめたり
さと人よ怪みなせそむかしよりわか行むかふかたはかく也

さと人のつかれおもへはよしの山花みかてらも行うかりけり
けふまで雨ふりつゝきければ

よしの山はなみむころののとけくはけふはゆるさむ雨降らはふれ

我めつるころしゝらは芳野山雨にぬれつゝ花もまつらむ

春雨にはなやいかにとよもすからころにかゝる軒の玉水の

かくおもふまゝを記しかゝりければおさといふ明朝の御出立は七ツ時也

はや五ツはとくにうちしと思ひ候ひぬと聞て驚て臥りぬ

○十二日 きのふよりの雨にてけふはいかに〱といひあかせしか我大
和へ來りて殊更に出るに雨ふることなければ其患あらずなと與力同心ら
か謔言いふを余所に聞てけふは雨したくして起しに幸ひにいまた雨ふら
す一天墨を流せるかとししかるにおもひの外にふらすして九ツ頃より
快晴と成れり七ツ時過に初瀬の本陣へ着しぬ〱けふは南都より村々はこ
と〱く觸置たれば村々のもの共領主地頭之家來等案内あること例のこ

とくなればしるさす○なら町より植村出羽守か御預所の添上郡なる今市村の帯解の地藏といふありその前を通れば住持門前へ出て下座することなるか早かりけむ履は門に及び袈裟は門前の町屋にて及ふといふ位の躰に欠附けるか間に合はすして其こと家來共に詫て行たり夫を柴屋村といふ所の寺にて小休をなす又在原寺の門前にて小休也この在原てらといふは石上村といふ所にていそのかみ村とよみいそのかみふるの中道とよくうたによむ所にて則ふるの神社其近きにあり夫を丹波市といふ所にいたること、は藤堂家の領分にて其大庄屋松屋孫兵衛といふものゝかたにて小休をする也丹波市といふ所はこのわたりにてはよき所に歌よむものなと五六人もあるよし也このあるしはいぬるころわかたにさくを遣したるものと龍介のいひきよつて文事あるなるへしかけものなとこゝろしてありわか休みし所には中郭子儀左右蘭亭曲水の密書にて應擧の書贖物にあらず其余右にて推へしこゝにて菓子を出す也かゝることみな奉行を巡見のこ

と記せる舊記によりてすること也こゝをたちて城上郡釜口村長岳寺にいたるこゝの寶物は誰かかた物通しの矢を能登守のり經の矢也とてみするにいたる其余みるにたらずヲコト點といふ古き法華經あり光明後の御筆といひきこゝより柳本といふ所にいたることゝは織田安藝守か陣屋にて郡奉行等罷出て給人共披露せり夫を三輪村にて晝餉たうへたり三輪村は清水の御領知にてよき村也三輪村には三輪の神社ある故にこの村名あるなるへし三輪の社は山を以神躰とすやまけしきよき山にこのわたり四五丁より十二三町はかりか内に 神武帝の御舊蹟たるうねひ耳なしの山ありみな古學者の稱する所也三輪の神は日のもとにてはしめて酒を造り給ふといふ故にけふわれとゝもに來る明教館の儒員佐々木育介に先生この山はもし劉伶などのうし神ならずやといひしに大禹の曾を車を返し給ふことはあらずやと答へし佳答世説にのするも可也なといひてわらひし也それより三輪神社へ參るみやしろは至るふるくなりたれ共境内等廣し

御朱印六拾石也といふこゝにては拜殿のことくなる所左右へ廣くして社の右に神子左に神主共列坐せり奉行は拜殿にて拜し畢るその神主らか居る所にいたりて坐すれば神主神前の幣をもち來りていたゝかする也なら社のにては拜する前に幣をいたゝかするをかく相反するはいかなることかしらすやかて神子の舞ふ也傳言つたへ 淨御原の天皇天武の御こよし野にて天女か天下りて

乙女子かをとめさひすとかから玉を袂にまきてをとめさひすもとうたひけるより五節の舞ひめのことはしまれりといふが定ぬ其余韻あるへしとおもひてよくみるに神子五六人四十はかりより十八九歳なるか遊子の青樓の一大座とかいふことのあるときみたてすることく並ひ居たりみな紋附のもやうものを着てこゝをはれとかさりけれとも白きもの塗しは萩の露にはあらねともさはらは落むはかりにてひじきか人參の白あへならずは何かしの本尊の彩色のはけたるか如き女共にてかしらにはく

し筭なとさしかさりいさゝか艶態あるますく恐るへきさま也其女共か五色の縮を三四尺はかりつけしすゝをもちて舞ふ也樂は太鼓につゝみ鏡鉢とかいふ銅壺の蓋二ツ合するかこときものをたゝき夫に合せて舞ひ歌もあれとわからすこれを笑はすにきくこと奉行代々難しとする所也なるほと尤也泥塑人のことき明道か鏡漢といはれし劉器士ならは知らす實に噴飯の極なるもの也そこに見居たる人々段々と逃けて樂陽春白雪に似たるかはては三人に過ぬかことくなりし也われもいくたひか咳はらひにてまきらして漸にすましたり其こと畢てのち神子いかなる式か鈴をもち來て露次のかかさのことくセイガンといふ身ふりにて我前へ出せり鈴ならば男子より女のかたへセイガンにつくへきはあらずとはいふへからされ共女のかゝるさま尤奇也さてこゝに大塔宮の御物といふ矢母衣といふものあり箆に母衣を附しものにて夫に母衣武者のかけもの添りこれは大塔の宮の御像にて前の矢母衣一同熊澤了海の納しといひ傳ふるといひぬまことにやもしや八幡殿の

圖にて荒井白石などの納めしを誤り傳しにはあらずや尙考へしこの別當大御輪寺の本堂は聖德太子の御建立にて其内たら寺を一間は崇神天皇の御坐所まゝ也とて板式に神の御足跡也とてべ結ひし所あり本堂は佛法わたりし後のものなれば其板式はかりはいさしらす千五六百年に及ふものいかにあるへきみわの神杉二もとの杉衣かけの杉といふものありこれも古木なれ共後の物なるへし大五輪寺にいにしへの杉のかれ木也とて板のとき古木一ツを納あり右を板まことならば今存せる杉はのちのものなるへし万葉に神杉といひしもの其後又千有余年をふることいかあるへきこの一覽物畢而平等寺にいたる御朱印八拾石也寶物しるすにたらずそれを初瀬村にいたるこの邊みな名所にて佐野のわたりなどいふ所其外上古天子の猪かりなし給ひし御かりの舊地也今は山上までも田に開られて鹿など少しは居かはしらすなかゞ猪かりすへきやうなし夫を初瀬村にいたるこの入口に初瀬の長谷寺の年預出迎して代官のときもの貳人

先立せり初瀬は五百石の御朱印なれ共初瀬町二十町余に及び家數千二百軒余といふにて其大なることをしるへし町はかりの人別關東ならは一万石余なるへし初瀬てらは清少納言か曙冊子其外古今集などにみゆるにてもこのの観音は往古より人の信仰することしるへし其頃より今にいたつて繁昌せり堂舎は大猷院様の御建立にて立派なるもの也舞臺七間に九間ありてそのけしきいふへからす元來はつせは万葉にもこもりくの初瀬とよみてこもりくとはこもり國といふことにて山を以包みたるかこときところ也其山へ観音を安置して堂塔多く建つらねたれば勝區絶景いふへくもあらずわかみしうち第一の勝地の寺也これをたとふるに細密の明畫の山水に日本のさくらを彫植たるなれば虎にて翹あり卑諺にいふ鬼にて鍔棒を持たるとはこの山のことなるへし元來花を多く植たる所にてけふは半散も盛に開けるもありていささかのちりなきやう掃除したる清淨の佛地へもさくらの散しけるは佛のみちにていふならば天よりはな

のふりしといふへく儒者風ならば仙境ともいふへしこの寺大伽藍にて坐敷なとけしからす廣く中奥といふことき所にて寶物をみする也其内東照宮の被下たるといふ御紋所のまき繪あるあしるの御團扇 聖武帝光明後の御自筆の法華經あり軸にても表具にてもけしからす美事也かな物高ほり也めつらしきもの也この經文のこと菅相公の御自筆の緣記にもみゆ疑なかるへしこの寺に寶物多し其内大切にして住持僧正必みつから携出て奉行のみするといふは菅相公の御自筆の初瀬の緣記也好古小録などにけしからす賞しありてこれを以海内一品の無疑ものとす奈良の般若寺の緣記是又菅相公の御筆なれ共申サは般若寺のかたは今世の祐筆手といふものなるへしといひきいかゝあるへき乍去二品別人のことき御筆也はつせをまされりとし般若寺をおとれりとすともいひかねしもの也般若寺之方字も大きく習ふにはよきかことき御筆也さて又宋僖宗より納られしといふもの數品唐より納めしといふもの數多あり其内奇といふは鼠燈臺

といふもの也これは燈臺の上に鼠一疋油を甜らむとする躰にてのそみ居る也燈臺の油一合減すれば鼠の口より一合の油をはくといふことき仕かけにせしもの也是も今は油にては奉行なと之一覽の間に合はぬによりて油さらへ水をつき鼠へも水をつき置て水からくりのことくなるものを油さらへ仕かけて油さらの水つきむとすれば鼠の口より水のへりしほとは吐いだす也わかみうるうちに十たひはかり鼠の吐し也寺僧いふ水野越前守京都に取寄ありて二ツまでつくられけるか出來さりしと也いかにやありけむけふのみちすからのうたよまむとおもひけるに初瀬寺より儒者育助を以たにさくを乞ければとりあへす

この山のはなをみるまそ身は更にうきよの外のものに有ける
これは初瀬にはなの頃まうてゝとはし書せりちりかたのはなもありければ

みねの雲よ半のあらしにちりはてゝけふは苔地の雪と成ぬる

としるし遣したりこのはし書は花のちりけるをみてとかきけりけふ興中
に張雪菴か漢業の詩をみて解しかね候ことにおもひければ雪庵か韻を
次て

龍祖潤如民所悦。沐猴何敵衆。良臣騷人不識多。奇計徒論黃金四万斤。

といふ詩を賦したり其外けふの詩をうたをとおもひけれ共夜ふけ家來の
歎かむとするをいとひて止めよつて一二をしるす

山さくらみよし野に行みちすからおりく迷ふみねのしら雲

麥と菜にみとりくちなし染なせる田のものははるのにしきなりけり

やははれむとしけるとき

山裾になこりのこしてをちよりそやははれわたるはるさめの雲

みちすから陵かとおもふもの所々にあれともしれる人なし

こゝかしこ田面にのこるもり村は昔の人のみはかなるらむ

見わたせは畝火耳なし三輪の山鼎のなりに立ならひけり

五畿内志ニ
古墳何ヶ所
トアルモノ
ナルヘシ

みわの神樂うたを尋ねしに旅宿へうつしてこしたり

千はやふる神のねかひの歌かつらちよやうしやうてんに不老の門其外

の門戸には霞のみまく引まはし五葉の松をうゑ給ひ其うちに三ツの鳥

居を建ならへしらごへいちやうにかさるもの三百六十余神の神にごく

燈明を備へ奉り君を守らせ給へや柳葉に注連うちかけてかさりもの長

生殿に不老の門其外の門戸には霞の御まく引廻し君を守護し奉り天照

神の申にはしきをつくせし築山の千載を祝ふねかひとて五葉の松を植

給ひ東を春とおほしくて櫻柳にいと薄く南は茂る夏こたちは山のほと

ゝきす西にきかふといふ嵐山のもみちの色のおくにまつもおのれと吹

返し三輪のさとの梅かゝや

○十三日 風もなく雲もなし 天氣いふはかりなし拂曉にはつせをたち

て武多峰にいたる其みちにて櫻井といふ所にて小休いたすこはかの楠父

子か忠義のいましめありけむさくら井のさと也や否をはしらねともよき

里也このさとはつせと多武峰の兩山の間において關東ならば至るの瘠地なるへけれども上かた故にみな屋を潤せりこゝの大庄屋か宅は小休すれは奉行は菓子并提重に酒を出し家來の末々にいたるまでみな切飯を出す例也朝四時頃なれば予は何も食せずこの邊は海ある所はいづれも十里余あるといへ共提重は鯛切み等にあ立派なること也是は與力共遣す是又例也われこのたひいろくろを勞して巡見の入用を可減といたし既に獻立までをも爲出たれとも一向にきかす更に捨置たらはよからむをといかにも殘念におもふ也奉行之巡見之小休に成或はこのさとは酒此村は切飯といふの類みなく規模と成て斷を受ればいたく恥て市にてむち打たるゝかことくおもふの類也と也上の德澤かくも末々に及ふことか難有也堯舜の治といふ共今の 大日本に過へきことはあらしとおもふ也そこより多武峰にいたるこゝは境内六十町はかりありて 御朱印三千石けしからぬよき寺也この寺をみれば日光をみるに不及と土地にては

いふよし也これ全井中の蛙也かしよき寺也境内入口に代官罷出夫々追々年預其外衆僧共出る坊舎四十二ヶ院あり拜殿には尊順親王の三十六歌仙かけありこゝにて神酒を拜戴いたし寶物をみることも也こゝにはいにしへより名刀多し神刀三千二百こし余ありて 東照宮は藤四郎吉光の短刀奉りしも其内也と寺僧はいふ也そはまことか否をしらすといへとも御代々様の名刀を奉り普請被仰付候へは其御禮として又刀奉ルみな近きためしあるよし也三千二百こしのうちより奉行は爲見ものは天國の短刀七寸はか銘在 平信長朝臣より奉獻無銘の刀一振豊臣殿下より御奉納國行銘以上白さやにあうちおろしの如し天國は少々やつれたり天國の在銘初るみる銘至るよろし東照宮は御拵附の御短刀壹尺三寸はかりひら打無銘にあうぶなりにいふにも不及相州の上作也直胤上出來のことし 東照宮御獻備のまゝ研なしと云御拵はろ色さやビジョかね附にて御つかは短き方にあ出しさめに御目貫なくさめの一二三のはしりまでを殘してぬり其余

はビシヨかねのわきの方によれるさまなとみな今の目利者のさす短刀と都
 而同じさま也此三本少も疑ひけのなきものなれば驚歎數刻に及ふ幸三郎な
 とのとき好めるものにみせたしといくたひかおもひし也あまりのことに
 て恍惚としたりこのてらよき寺に而料理向など丁寧也さて又こゝに一條
 禪閣の韓文に而辭書被成たる鎌足の朝臣の此山御取立の縁記あり畫は土
 佐の光信の極彩色なり禪閣の御書はシキンのことくにしておしたるもの
 也讚ツクの類を打つけてかゝすかくするか古く多くある也わか方に寫し置た
 る藤房の像にて知へし此繪まきものは箱ともに美をつくしたるもの也さ
 て又石燈籠に元徳の年号ありて 後醍醐帝の御進獻アありかたは春日かたと
 いふものに而梵字と日月のときかたみゆみかけ石といふ類の石にてこ
 けもなくさして古くもみえねとも六百年前のもの素より可疑ものにあら
 す并同し 帝より御進獻の銅燈籠あり損したる殘を手水鉢となしてあり
 こゝは結界場もありて女人堂建ありさくら桃少々前かたなれとさかりと

吉野川上ミ
 ハキソ川ノ
 コトシ末ハ
 シカケノコト

いふへし吉野より五日ほど遅しといふ山水は所々に瀧ありて至るよしき
 のふの初瀬よりまされりやおとれりやの論まちくも也予か考にては風韻
 はつせに不及退こと三舎なるへしこゝより吉野へ四里半あり細峠とい
 ふ山みち至る嶮岨也きそのことしよつて武多峰よりたちつけに成て歩行
 せり此山の下り口に中坊陽之丞家來罷出居れりこの邊中坊知行也夫を西
 谷村を經いも山の麓を過て吉野川を渡り上市村にいたるよし野川といふ
 は河原とも百間余もあるへし大概まづ野路の玉川に似たる位の風韻にて
 一層のけしきあり水もまた倍せり上市村は山上藤一郎御代官所也いも山
 はみる所もなき小成里山なり上市村を十丁ほど行と吉野にかゝる也山の
 かひよりさくらみゆる也肩輿の戸を開かせてみなから行に絶妙いふへ
 からすこれ上り口の一目千本といふ所のはな也はなは一重なるか半うつ
 るひけれとも夥シキ花なれば見所ありて只あきるゝはかり也こゝはよほ
 との山をみなさくらにしたるもの也何分たまりかね肩輿よりをりて歩行

關原のさく
ら豊臣殿さく
の御はなみ
ありし所か
也

せりみちよほと嶮なれ共少もこゞとをいふものなく別當草履取の中間ま
て忽に風流人になりてこのけしきいかにやいはむ晝のことしなと驚歎す
るもこの山の徳なるへしまして心に一點の風流あるものは花のため狂
せるかことしこの一目千本といふさくら林のうち坂のけしきよき所に毛
氈を敷やすらひ所あり予しはしこゝにて所々けしきをみけれども花のた
めに魂魄を奪はれて一言のことなしこの一目千本といふ所は十町はかり
の至而嶮岨なる山みちの左右山谷ともに一重さくらを巾二三百間はかり
に少しのすき間もなく植たるものにて藏王権現風流なる御神にて瘡かき
を守るいなりに土の團子を願ほときに奉るなといふ卑俗にかへて願ひこと
のかなひしものみなさくらを奉ることのよし一目千本八町七曲左右みな
はなにて清香驚へきこと也かくはな多ければ遅速おのつからありてちれ
るはみちの雪となれるもあるにいまたつほみなるもある也こゝに氈敷て
貳ヶ所ありそこにてしはし休らひ夫々段々のほり行て關原のさくらとい

よしの山
はるきた
寒くさく
はななき
とよなき
るよなき
月かなき
よしの山
よしの山
なむかみ
のわかも
めくかみ
のめくかみ
もよけし
みおけし
もよけし
くもよけ
なきもよ
なつきも
かふなつ
かふなつ

ふにいたるこゝはさかりいさゝか過てちる也そこを二丁はかり行て黒門
ありこゝに吉野山の學頭出迎たりそれより銅鳥居にいたる御名は忘たり
天子の 御震^て翰也こゝを過て藏王権現をまつり奉る堂ありこれこゝの本堂
也それより吉野山之内寶城寺に止宿寶物を見る 後醍醐天皇の御樂器あ
るのみ也こゝの庭のさくら眞さかりにていふへからす雪とも何とも辭を
絶し名花也湯なと遣ひて庭みめくるに十三夜の月さゆるはかりにはれわ
たりみよしのゝよしのゝ山にて雪のこときはなに月のくまなきをみる奇
中の奇ともいふへし谷川の音なと實によしけふは前々の例にて提重箱に
さけを添てくるゝ所貳ヶ所あり壹ツは與力同心共に遣し一ツはこゝにて
開きて月と花をみなから家來共々酒給させてわれものみきけふうたをよ
み詩をつくらむには却而興なかるへし只この月この花をみよとて五半頃
まではなと月とをみてうち臥しぬけふは所々歩行之上に一盃をくみたれ
はいたく草臥てよくいねし也三年ふりにて刀を久々さしければ腰はれて

大に弱りし也

○十四日 快晴 至るのとか也拂曉に食事して吉水院にいたるこゝは
 後醍醐帝已來の皇居に成しとて也辨慶の間義經の間などいふ所あり其
 外義經の駒つなき松辨慶の力石などいふものありみな愚を欺むものに
 て取にたらずこゝは狭き寺なるに 皇居に成しまゝにて存するといふに
 いよゝゝ恐入る也いにしへよりこのさまなるへし崖作り故に建たすへく
 もあらぬ也こゝに 後醍醐帝の御物多し北畠の職原抄あり至る古きもの
 にて實に北畠家にて書奉られしものならぬ也いかに古きもの也壺井鶴翁
 か考には元來は百官抄とかいひしよし考ありしかと覺しかこの書元本な
 らは職原抄ともよりありし也なかゝ近頃うつせし偽書などゝは決
 みえず并年中行事といふもの至る立派なる卷物にて書も見事也夫と一所
 になしてありその年中行事は露疑ふべきことなし 後醍醐帝の御文臺あ
 り至る籠末なるもの也今もよに被行竹を以作れる硯箱のとき造りかた

鶴翁か注寺
 にていふ所
 と大に異な
 り職原抄夏蔭
 ナトヨミシフ
 アレハコ、
 ノモノハ古
 ナカテアリ
 ナカラ疑不
 ノアル也

のもの也御硯箱は竹にてつくりよに被行ものは右を御かたをうつせしもの
 のとみゆる也御硯石は端溪石にてうらに昆玉といふ銘あり 震筆也とい
 ふ御茶入あり今の世にある枴の木ひきものにて全に金的^{ぎん}のものに
 て内を黒漆にて塗しもの也箱根細工にて價二十四文に過へからすかくも
 御質素にありけるかと 皇居といふ所の今存するものと此等の御道具を
 み奉りて落涙する也こゝに同じ 帝の御木像あり御眼するこゝ眉の間に御
 しわをよせかの八字といふものある也御眼は世を御憤などにはなきかと
 御在世のこと其外おもひ奉り恐入し也御在世の御すかたをみ奉るかこと
 きよき御像也こゝに楠正行のはらまき義經の刀などいふものあり行光の
 刀銘などもよくみえけれともさひて鍔きうのことくはらまきはばらゝ
 にてはつかに藍草威かとおもふはかり也夫を櫻本坊にいたるこゝに寶物
 多し刀など夥あり其内平安城長吉の壹尺五寸はかりの鐺物あるうちおろ
 しのこときものあり至るほしきもの也豊臣殿下の御直筆附し天の半鐺と

いふものあり銅の鑄物のことしカンドフ挑灯といふものに似たり高サ三尺はかりの解すへからさるものなれ共珍器也夫々如意輪寺に行へきなれ共往來二十丁余なれば遠見を願ふ前々の奉行多くは遠見也といへ共こゝに必行へしと兼おおもひ定めしことあれば行し也みち峻岨なる山をのほり谷に下り行ことなれ共さくら夥さかりにて谷と峰といろを争ふけしきなど中々筆につくすへからす其上に吉野は山々のみねいくらもありて其みね谷にさくらあれば一步ことにけしき改り今みあげしをたちまち足本にみるといふかこときわけに詳にかくもうるさしよし野はつせとは孔子に孟子老子に莊子などいふわけに並へ稱しなからさらによりつくこともならぬわけ也吉野はさくらと山水の聖人もみな天爲にて少も人作めきたる味なし余は押おしるへしみなく驚かぬものとはなく一目千本よりも又奇成かことし其けしきとても書つくすへきにはあらぬ也辛して如意輪寺にいたるこゝには 後醍醐帝の御陵あり寺より二三十歩はかり

なき數に強き
れとも強き
梓弓万世を
ちぬ名をそ
とむる
正行の歌を
みて
決死忠臣
帝陵名蹟
遺不古尋
躋向斷屏
墓至誠
引かへす君
絶てみか
傾くこと
かなし
はなの根を
洗ふの河
まよふる
白なみ
さくら花昔
の君の御は
かあたりは
九重にさけ

の山の上にあり三十間四方はかりに御するしの杉もはつかに枯のこり其外雜木立にて前に石の瑞籬ありいかにも物さひし御さま也落涙に及ひ地に伏して拜し奉りたりその所々十間はかり下り楠正行の毛墳ありこれはずち死の前に御暇乞として 御廟へ参り歸るさに毛をきりて埋たりし所也如意輪寺寶物の内兼お聞及ひし正行の辭世あり矢の根にて黒漆の戸扉に彫しさまのつたなきかいとく尊しうたに 歸らしと兼おおもへは梓弓なき數にいる名をそとむる とあり其こゝろさしの程をおもひて涙數行下りて言葉もいてす實に仁の つくる義のいたるといふはこのことなるへし元來 後醍醐帝は暴逆の臣を君として誅給へることにて中興の御業は全からねとも露も道にたかひ給ふ御いくさといひかたき御事なり夏少康などにも續かせ給ふへきを惜み奉りてもあまりある御こと也 聖慮數百年を経てとげ給ふにや今の 禁裏も攝家かたもみなこの 帝の御血脈なる伏見の宮よりみなつか

せ給ふと承るこゝより竹林院にいたるこゝはいにしへの住持弓の銘人に
 而即竹林派の元祖にてこゝに其住持か書ける傳書二冊ありふるきもの也
 法師の弓寶藏院の槍と同じきもの也いにしへのことおもふへしそこより
 世尊寺に至り寶物をみて夫々子守社にいたるこの間拾四丁あり其内八丁
 はかりの坂あり至而急也みな大に困し也坂は猿牽といふ所也そこより向
 ふの山をみればさくら峰より段々になり咲てこれを瀧さくらといふ麓の
 かたをなひきのさくらといふこれは山のこしを雲のことくにはなのめく
 りさく故に名つくるよし也子もりの社に大塔宮の紅地錦の御陣羽織あり
 又忠信の太刀あり靜の長刀といふものあり是は古き長卷をいひ傳の誤り
 し也至而古くみゆる也一躰長まきは三百年來のものとおもひしに刀匠直
 勝來國俊の作ありといひ且この長まきをみても六百年來のものともゆる
 也いかなれば太平記などにながまきの話なきや不思議也そこより穢拔塔
 にいたるこれ義經けぬけの塔といふもの也大みねの行者の初るを行する

蜻蛉の野に
 ある瀧へ
 はかぬといふ
 の瀧なるへ
 し音にへ
 の字なり蜻蛉
 誤たり蜻蛉
 の野古き名

所なれば垢離の類にて穢拔なるへし義經の蹴拔て飛しなどの俗談辨する
 に不及それ々苔清水西行室アにいたる庵室今に存せり八疊一間ほとのとこ
 ろ也さくら林の中にありさくら此邊は更にひらかすところ〱彼岸のさ
 かり成かある也この邊は至而春遅しオ四月近くならねはさかぬといふ也苔
 の清水は山の井といふもの也これを安禪寺にいたるこゝにて切飯并下ケ
 重箱に酒を添て出す也夫を開て與力其外にもわかち遣すこゝにてしはし
 休み山中を五十丁行て西河村清明瀧をみる瀧十六丈八尺といふよき瀧也
 奇觀といふへしそこより二三丁はかりに而大瀧村といふに至りて晝飯い
 たす八ツ時頃也この邊は深山幽谷皆畑の山家なるに休になりし松屋徳右
 衛門といふ宅は坐敷の額松廼屋といふ三大字を正三位有功かけりかけ物
 は本居宣長かよし野の瀧にさくらの流るゝといふことを長うたによみし
 なり都而みな山家には驚るゝことはかり也龍介いかにして聞けむうたよ
 むとて短尺をみせよといへはしはしありて

賤か家の庭に咲ける花たにもけふそ雲井の袖に匂へる
正安と書て出し又

くも井まで匂ふか庭の八重さくら花もことしそとき得顔なる
と女の手跡にて記しうらに直子とあり山家にて驚かるゝことあるもの
也かへるときに料番硯をとりて戯に

みよし野のさとに住ぬるたみなれはにほひそふかきことのはのはな
と書捨たりもとより名はしるさすこの村に大瀧といふ所あり峩々たる巖
窟をめぐりて吉野河なかるゝ故にはやせといふものに成たる也そのよど
みへ人足共飛込こと也これをみる又大筏十三より十五までつゝけたるを
其さかまくところをのりおろす也長サ六十間も其余もあるへし夫を屈曲
したる岩の間をのりおろす躰奇也こゝにて岩より水中へ没するものを岩
飛といふ也こゝより五十町行て宮瀧村にいたるこゝは都而吉野川のいは
ほ奇々妙々なる貌をあらはすこと木曾のねざめのことしこゝにても岩飛

あり前のことし百疋宛遣す也夫を又五十町を経て上市村に至り止宿追々
吉野の寺院を巡見濟之禮に來りたりたにさくを乞ものありければ花をみ
て世話にも成たれはいかほとも何にても書遣すへし乍去けふは多分に歩
行せし故につかれたれはゆるせ申譯ばかり也とてとりあへす筆とりて

よしの山はなにこゝろを奪はれてなにといひなむことの葉もなし
と記し遣したり

○十五日 午後くもり薄暮雨 壺坂山南法華寺にいたる大なる坂みち也
坊舎十二院 御朱印五拾石の寺なれ共寶物等みるに不足夫を植村出羽守
城下土佐町にて小休いたすこゝには出羽守を申付置之由にて給士として
近習貳人詰居役人詰合に晝飯出る夫を橋寺にいたる聖徳太子の御建立
也いにしへは大伽藍なるへけれとも敗壞を極たりされ共建治中の古鐘并
日本最初の石燈籠といふものあり春日かたにて佛像ある並のすかたなれ
共名所圖繪などにも年古きよしはみゆる也こゝに畝割塚といふものあり

は舊作一首はわかよし野のはなみのことを賀せし也少々は出来るかもし
らすされ共みせし詩は一向也とりあへず駕籠の中にて和韻せり

千里傳香芳楚岳今年探得十分春如何官路多塵絆休怪有听不到矧

とせしか元來の韻違ひたるかことく成は遣さりし也その序に詩と酒の間
違を

勿怪詩仙誤酒仙酒詩元是一機禪誰知濁世塵埃裏涌出清香双白蓮

この双の字は詩人は先住にて當住の次で出しこれも書畫などをみせけれ
は也これも遣さりし也薄暮に微雨今井町に着至るよき町也けふ植村出羽
守よりさげ重をくれしか多くありければ酒一同家來并同心迄にも遣した
り供に召連し儒員育介いふかぐ山の僧至るの惡僧に而學問も出來才氣もあ
り年齢七十はかり至る如法の道德ある出家のことくみゆる故に人々みな
欺かるれとも至るよからす近郷の僧みな當惑するもの也と夫故に文事を
以われにとりいらむとする也よくこそ和韻を不被遊とていたく明察に伏

する故に當住至るよきもの故に与風おもひ附しか前のわけにて被遣さり
きと答し也曾あきく役人に好める癖あれはそれをつけこまるゝとはこの
ことなるへし以後共心附ケ給はれとて厚謝せしなりかく附こまるゝを恐
るゝ故にわろし仁義忠孝をして夫を好み夫を以附こまれむこそいみしか
るへけれ書の洪範は天より傳はりし天下を治むる秘傳の書といふへし其
極意上みの人おのれか身を曲尺にして天下を治むること也予か曲尺の分
明ならむことをはかりて色々の曲尺を以量へきものに專抱らすこれみち
かいかゝあるへき〇けふの途中四條村の地内畝火山の麓に 神武懿徳の
御陵ありこれはみちの邊八町はかりを隔てはつか成もありあるはかり也奉
行遠くよりみわたし置場所のよしされ共あまりにかしこし 神武の御陵
はかりは行かむをかみ奉らむと兼あひ置しか薄暮の雨にて止にけり
富みてのち教ゆといひ倉稟足りて禮讓をしろといふけにまこと也つかれ
足にて夕くれに成且雨にてはおもふかことく歩行ことならぬ也貧乏にて

は並々の正敷人は不義理出来る也これにても常に儉約すへきことをおもふへき也○神主重立たる所に少しも錢に成へき寶物といふは曾あなしこれ親より子につとふる故に構はす密に段々と賣故なるへし寺院は他人につとふる故に却る法を守りて寶物を取り失はぬとみえし也○今夜止宿の今井町は家並至るべく屋を潤せること也予か止宿せし所土佐畫の金屏風一双順作いふ四五代はかりの前の人也といふ明畫のかけものみな高料の品にて料昏筥すゝり筥堆朱堆黒にて勿論中わたりの品也料昏にはしきたにさくと小たか昏いれてあり椽には蒲こさを敷いやすをかけわたしあるなといふ類のことみな行届たり只奇といふへきは湯とのふみ段に立派成すころく臺を用ひあり大あかりにてさいの集りしかことくなるかゝとにては上りにくしいかゝのことにやこの村家數七百五十軒あり人別奉公人を省き二千三百人あるといふ先ツ三千石より貧地ならば關東邊にては七千石の村也それにて村高は四百石也といふ也けしからぬ事也これ

齒士田間
容誇三赴々
名去家纒數
步向備二甲
箱二迎
題吉野杉
林
吉多良
木杉林直於
篋二矯採細似
レ斯臧レ養如
國藩遠蠻繞
幾疊綠峨々
麥隴陽春海
菜花明月波
川洪魚箔富
山關圃田多
村婦皆粧飾
可知風俗利

も御預り所也○けふのみちすから越部といふ所にては其村の郷民に紀伊殿より目見以上の格被下たるか村はつれに出迎ふる也鍵箱かづはさるまてはよし具足櫃までを脇に並へありいかなることや傳へきく平相國清盛の熊野詣にても甲冑をもち行かすといふほとのことなるに門前にて人にあふに具足櫃はちと過たるかことしこの人他村は行には必鍔炮きり火繩なるへし○用人共の旅宿もよき宅にゐられら小ものゝ居所まで金屏風まき繪の刀かけ料昏筥のかさり附也と可笑は棒屋か鍛へたる櫛身銅作りのみはかしをみなかの刀かけへかけつらねしとはいかめしかりける事にありけりむかし鳥居八右衛門か川々御普請に参りし時美濃の豪家にて中間までも絹布のやくをかしければ寒中に中間ねくるしかりある夜の夢に大火にゐ火にとりまかれたる夢をみて大汗にゐ目をさましわか西城御材木伐出しの時に尾州の豪農か家にて士共までに綸子さやの夜具をかしたるに侍幸太夫といふ内弟子あかりの田舎人昨夜は私らのやくにみなも

くめのあるを着せたりと申ければ材木の御用に木目のある夜具尤也といひしことありこれみな公儀御仁徳のあまりの御光也いともかしこきこと也これ故に嚴敷せねは民を困しましむるにいたる也遠國のことこゝろすへき事也

○十六日 雨 六半時に今井町をたちて巡見として糸寺に参るこゝの寶物はみるに足らざるもの共也こゝにては久米仙人のことをモヲシ仙人といふと住持の云ければ何と書と問は字は知らすといふ予云妄執仙人のことかといへは夫も不知といひきよつて戯に

落にきの其いにしへをなし初て千世につとふるくめの山人といひきこれにて巡見は果けり夫を上々庄村にいたりてひる飯也夫を三里をへて奈良へ歸りたりこのほともし雨ふらは途中困るへきに幸ひにして十二日か十四日まで雨なし幸といふへし○糸てらにてかの仙人か雲中より落しことをおもひて僧正遍正つかわれ落にきと人にかたるなのうたよ

り久米仙人のかたふるし今のよにいふおつこちといふのはしめなるへし○今井町近邊うねひ山近邊はみな古墳のみにていにしへの御陵とおもふも多けれともしる人なし 神武の御陵は木の玉垣あるのみ 懿徳帝の御陵のことにいたりては四方にこみちありて牛馬牽通るへからすといふ高札あるのみなり恐入たること也うねひ山みゝなし山あまのかぐ山鼎峙して立てり

うち向ひいく万世をかたるらむうねひ耳なし天のかく山といひき所のものもこのわたりを三ツ山といふ也うねひ山にて雲の立をみてうねひ山ときはかきはのかけふかみけふりと立るはるさめのくも御陵をみ奉りて

としをふる梢も泣かはるさめに一村さひしみさゝきの松このたびならより吉野其外をめぐりみるによき國にて扱女共みなよし佐渡にては一村のうちにかた目なるもの必二三人あり大和にては一村のう

ちに必よき女又二三人ありこれ上國の故なるへし吾妻男に京女郎といへとも京女郎はかくのこことくなれ共男子はいかゝあるへき

自古人間漫說道五畿國色八州雄初知妍變非虛語欲問今時烈士風。

神武の御陵に玉垣ありしを土地の領主よりすることかとおもひしに大坂の町人の奉納せし也といふ也その町人の名はしらねとこゝろあること也町人にさへかくもこゝろあるものゝある也この御神は千万世の御祖にましませは伊勢春日と同じかるへき御事なるに町人等々奉納せし玉垣にて濟といふこといかなることによ

○十七日 雨 きのふははつか五日の旅にて歸りたれ共なにかとはなしの多かりき江戸へ歸りたらいかにや有らむなとゝいひてかゝることにも母上の御事申上候おさと一同かなしかること也今日のことく成天氣ならはいかにせむとけふの天氣のあしきによつて却る巡見の都合よきを喜ふ也ならへ來り一度も天氣都合あしきことなし

○十八日 雨 はつか四日はかりの旅行なれ共歸りし日はおさと其外歡ひて打よりはなす也けふらもよし野のはなしにて御用旅行なから少々彌次喜多八に似寄しことなといひて笑ふ也これを以おもへは母上の御待御尤也とおさと一同に落涙して其ことなとうたによみき出立の時はいた満開ならさりし花もちり芝の俄にみとり成たるをみれば江戸のやしきなといかにかあれにきとおもひてこれも又かなしき也

○十九日 雨 俊藏かたの少女來るおさとにいふはまさなどの帯の結ひかたは母とは違ふ也夫はいかにといふ故に奉公人とかみさまとの違ひ也といへはいさゝか小首をかたけて隣のはいかに候やこゝろつかす候ひきといふ市三郎來りて放屁をすれば少しく笑ひながら今のはたしか椽の下にてかいるの鳴しなるへしといふこの少女ますく伶俐也

○廿日 夕はれ 廿二日出之並たより之狀とゝく眞綿并北條よりの書狀届平次郎おこと無事之由に而兩人を年賀之書およひ菓子なまくさ共に來

る菓子は直に一同にゐたへ申候廐中間榮次方にゐる出産あり男子出生也如鬼別當も涙を流して歡ふ也女ならば着物もきせじと思ひしなといひてほこるよし俊藏妻か別當にいふはそちの兄弟は女はかり親の手もとにて孝行して男子は勘當同前也といふ女子かよきや男子かよきやといへは別當頭をかきたるとの事也

○廿一日 晴 此ほと内藤安房よりたのみにて當麻寺にある縁起を取寄たり住吉家の弟子日々來りて寫す也書は尊純親王通村などの其頃の能書畫は山樂雅樂介主馬等のより合書也さくら甲冑の類みな寫眞せしものゝ如し其密なることいふへからすくま金粉也手をつくして美を究たるものも也みるも氣のつくるか如しいにしへの人はかくも佛のことにこゝろを勞せりやと驚く也土佐光信の圖二幅縁起三卷以上五軸あり夫をいゝ蒔繪の箱立派也古の國力の盛なるをみるへし順作云一段の畫三兩にてはなか／＼かけすと云ます／＼いにしへの國の富めるに驚く也

○廿二日 雨 よし野は行わからぬ詩歌四五十首其外長篇古詩などをつくりたり前にも記す通道之記はなししかし歌のはし書を詳になしたらはよほとこの昏數になりたり夕かた儒者來る酒を爲給たり予は此ほと不飲いろ／＼の話をなして居たり扱々下戸にゐる人々長酒は當惑のもの也○西井源次郎七十九歳の母に八ヶ年不逢今般御機嫌伺として出府之由申來る其返事のはしへかくそしるしける

この度は吾妻に行て母にあひ時にあふちのはなもみるらむとよみ遣したり予もいつしかかゝるうたの如くなるへしや母上の御健に拜顔之ため十七日の御神へ別にこの頃は潔齋する也母上は左衛門尉歸れと之御をかみは決而御無用夫にゐる却而不宜候得共左衛門尉の子の身として母上のこと願ふは佛神も御とかめあるましとて也○夜に入三月十日附之書狀届く母上様此節は御不快全に御全快と之御事恐悦之至也三月五日之雪はけしからす候此雪大和にはけもなし桑にさはり蚕に響はい

たし不申候哉節句に付幸三郎等迄うちよりて左衛門尉之御はなしありし
と之事王維か九月九日の詩に少もちかひ不申候右之節句には先便にしるし
候詩作之通に有之候ひきこれ又同じ御事也○大津妙壽の事相分申候貞五
郎健に相成と之義何よりの事也桑田之事歎息之至也○新右衛門御狀之内
三月の雪に付究理の事御尤也勸進能に付謠のはなし大笑也御問合物其外
共七通夫々相届く毎度忝候三日の日記ならと同前落涙のこと共也いつか
目出度御逢可申哉父師の御論程子の論集注になし即刻御役所之纂疏を借
よせてみるに御申越之通也明道か伊川かいつれの説かはしらねともいつ
れにも程子の説に候上は當時朱子學御用ひの上はこの外余論あるへから
す尙考へ可申候得共既に殺之可也とあれは右之外はあらし殊に疑敷は輕
きに隨ふと之本文に付旁以先ツ了簡は無之と奉存候かゝること儒者の論
承り度候新右衛門之大全までに御心つかれ候義遠く不及悦服々々○土浦
侯之御出之由尙又宜く被仰上可被下候此御人親まさりの御様子質も宜し

くと相見申候上田角右衛門は君子にてこの屋敷に先年は子供なりしか尾
木肇といふもの、悴はや寺社役などにも可成もの也いかゝ生立候哉○北
條之御外孫の御小兒可惜しかしよき御外孫は御丈夫に而よろしく候○太
郎いかにやと存候處段々と母上の御沙汰に而相分り候ならにては順右衛
門悴此ほと出立之節之太郎位に而顔色少々藏之介に似寄甚以太郎に類し
候間何そと申候得は夫に付おさと太郎之事を申出し申候敬次郎事は學者
の唐人同前名前は承候得共一向に顔は存不申候得共是も順右衛門の悴よ
りは月立しなるへしかゝること聞もいやきゝたくもありさてよくおもへ
は聞て一向に仕かたなく少もきかぬかた心の動かぬたけ徳なるへきか○
此ほと醉墨ほととの事なしけふみれば外庭の藤よほといろ附たりこれは江
戸ならばふし棚もの也よほとのももの也四五日中にはさかり成へし其節は
醉墨にてもあるへきかと考居申候○唐招提寺之戒壇やけたり屋根よりも
え出天火なるへしといふ也千有余年之ものに而桂昌院様御修復其以前は

鎌倉將軍家頼朝卿の御修復と覺たり命數といふものはかくの如し當時ならに千年余之堂舎多しといへ共少も火之事なきは法隆寺はかり也これは聖德太子の御建立也此御人のものは多くのこれり不審也

○嘉永元三月廿三日 昨日所司代より奉書來り去ル十五日江戸表にて年号喜永と御ひろめありよし申來る其こと所々に觸るゝならにてはとくに改元のこと被行二月中御門主かたにては喜永と唱らるゝよし也子供ての書たる額に其年号を用ひしもあると聞て不審におもひ居しに昨日申來れり京にてもならのことくとみえたり

○廿四日 くもり 夕かたより與力らに居間にて酒爲給候なら人に下戸なし至極の下戸隨分のむ也不思議なる事也與力羽田鎌左衛門五十健成老人也けふ日々遣ふといふ刀をみせたり五尺余あり明應の年号あり春日大明神と彫あれは奉納物なるへし燒身也此男毎朝劔術不怠稽古場此人にあもち居る也

○廿五日 くもり 吉野山より巡見濟之御禮に出るよつて兼而のそみたるたにさく遣す

はつせより吉野をみめぐりて

おとらしといひし初瀬はみよしの、麓のはなのかけたにもなし

實城寺に三月十三日の夜やとりて

ふりつもの雪かとはかりみよしの、月に匂へる山さくら花

よし野のはなを

みよしの、はなをは斯と筆にとて辭にもなといひつくすへき

後醍醐帝のみさゝきををかみ奉りて

さくらはなむかししのは、此君のみはかはかりは九重にさけ

西行かすみしといふ庵をみて

とくく、とよの行末の苔清水くみてかくれし谷かけの庵

北畠准后親房卿の筆なりとかたり傳ふる文ともをみて

よしの山はなに契りてまこゝろの深きかをりは千世つとふらし
其外に正行か辭世のうたをみたる詩一首をしるしたり順作にもなにそか
けといひしに是は富士を畫ければ其賛を

攀雲四十里。浙陟畫山巔。忽仰芙蓉雪。慙慙卓九天。

と記し遣したり

○廿六日 雨 よし野の僧來りて昨日の禮也とて菓子くれたりわれは御
役所ならすははなの禮をしてよき筈也何そうたを遣したりとて禮を受へ
きやといひて返したり順作にも菓子をくれたり是は縮地の畫のかきたる
を一枚遣し大に損をせしと也

○廿七日 くもり きのふは民藏小屋へ兩御隱居様市三郎を招請申上る
兩御隱居様大に御歡ひにて被爲入候存外はやく御歸り也是は父上の過酒
のことあれは御背中いたむこと近頃ありそれの起らせられしによつて也
早速に予按摩を成してあけしに御快よしとて御斷也強而按摩せしにいろ

くと御斷也母上の御沙汰にはさらは父上のかはりにわかかたのいたみ
をもみくれよとの御事故によく御腹を伺ひしに過酒の時は左にけしから
ぬこりありよつて其こりより御かた御手をもみてあけしに御兩人様とも
今朝は如忘御こゝろよしとて御歡也大和の非人に學者ありて長吏共之治
めかたの義を品々難して長吏も手にあまり差出しにしたり其書面筆を振
ひ大に驚たり與力共直吟味之義申に付直糺いたす輕きものに學問の出來
るは十人に七人迄は害となるかことし

○廿八日 くもり 禮はなし

○廿九日 晴 今日兼而父上は奈良の近郷一二里はかりのうちふるの
瀧法隆寺などのうちへ被爲入度と之御意也又母上は何卒春日山のうち鶯
の墳ある若くさ山といふへのほり十丁はかりの山の嶺へ上りわらひなと
御つみ可被成と之御意也これによつて其二ツを合せてけふは父上母上と
もにかすか山鶯つかの邊へ被爲入候御供は用人民藏給人順右衛門女共市

三郎誠一郎清ら其外は徒士押等也御辨當所は興福寺之地中之御目付など被參候節之旅宿に相成候寺院也八ツ時頃にいたりはや鶯つかへ御のほりありしやとて庭の築山へ登りみるに江戸のどん／＼橋より市ヶ谷をみるより遠し十八丁はかりあるといふ也つねにかすか山のくものけしきはなの開落まで手にとるかことく庭のうちのことくみゆれとも委細のことは遠目かねの力もきかす其内によくみれば母上ののほらせられるゝなるへし日かさみゆる也又此ほとは茶店など其邊にあれば其筵はりもみゆる也父上の被爲召候御かさなるへしみとり成わかかき山の上にたゝ一ツ星のことくみゆこれはよし野より檜を以作れる芭蕉かさといふものを求來りて奉りしを今日はめさせられしなるへし其余は蟻のことくにて詳には分らす其内にけふは別段なれば一盃を傾よとておさとのこゝろつきにて一盃をくみ頻に唐帯へうた詩などしるし或は此ほと被頼居し額字などしるしたりしはしありて夕かたおさとは庭へ行てあひるに飯ヲやり我は坐敷

にて飯をくひたり三はい目の飯茶つけにせしかけしからす胸につまりたり女共を呼もいかゝと不呼其内おさと歸り來りたれはおさと／＼と呼けれともあひるのゑをやりたる手を洗ひ且おさとも認ものするとて不來其内にます／＼胸へつまりあたり黄色にみえみづはなたら／＼と流るゝにいたるよつて又おさと／＼と呼ければ來りたりよつて背中をさすりなとして漸に胸開き人事を辨する様になりたりかゝること今までなし其ころ一旦の様子は用人給人下女ら等まで數十人遣ひなからこれは見殺にせらるゝ事かとおもひし也其内に市三郎も歸りおさとゝかはりて背をなてよく介抱してくれ漸に人こゝちつきてしはしかうちに本復したり我今日までかゝることなければおさとも不構しはしなく居しも尤也これは腹中のこりか一向にわからぬ事也石川左近將監この疾ありしと同人より已前きゝしことありし也けふはしはしか内はこれはころひ乞食同前かとおもひし也かゝることはかねて申付置へきこと也

○四月朔日 晴 やりを遣ひ劔術等例之通也けふ清朝人の書を見ておもふに近來日本人の書柔に成たるは清朝人の書を學ぶ故かともおもふ也石川丈山頃より百年はかりの書は日本人の書俗なる躰も多かるか也しかるに徂徠の頃より文華開けて書も別段に成たるか也其後思恭親和などの風被行て倭臭に論起りて書躰ビン／＼と成たるを好みしか也しかるに今は又柔成風を好みこゝに論あるは行書などの類清朝人のことくには日本人はかけまし夫は日本の柔成かなを清朝人などのかならず書かぬる類にて風土によるなるへし先人この論百年來あり然ルを時代の論をいはずみたりに清朝人の風をこのみたらは必書風いやしく成へしよつて近き風は少も不學してやはり隨唐の書躰を凡にも學ひて筆遣などは近き人の肉筆を以おもひはかりたらはよかるへきか奈良の刀脇差より京攝の風をみるにみな江戸のはやりをうつす故にいつも江戸より二十年つゝもおくれるか也今桐つ

くしなとこのむを以みるへし書もいつにてもからの流行に六七十年宛もおくれてまねをする様に而は終に日本の書といふことはならずからの流行をくれはかりをする様に而殘念なるもの也元來日本人はから人の申すことを守り居て出みせの學問の意不離しに享保已來別而徂徠にて一變せしことく書もからの受賣ならず日本自得之流ならはいかゝあるへき我御承知之通少も書をしらぬ故に考をしるす新右衛門方は藤左衛門はしめ書をよくす論あるへし承たし

○二日 晴 きのふは用人共并與力共を紀州御用金懸り之役所に被召候而御料理被下あり案内等は御出入之町人に而玄關下屋敷へ敷出しをいたし右之所に町人共出迎いたし御國もとより被仰越之品有之候由に而用人共も刀持上りにせしと也御辭退申上候而刀を若黨に爲持置候處給士之もの紫服紗に而若黨より受取是非といふ故にもちあかりにせしと也御料理等けしからすよし用人は民藏のこり順作俊藏參れり俊藏料理向等一々記

し候も持歸りみせたり肴など數品出たり床のはななら風に松と牡丹に遅
さくらを活候こと見事也との事也元來此御料理被下兼も伺出しかは御三
家より汝らへ御料理被下候由は無勿躰事也御辭退申上候は恐入たる事と
て遣したり御座敷向くきかくしからかみの引手みな葵御紋に同し御幕
を所々に打あり甚敷は硯より茶臺等迄御紋ちらしにて家來恐縮せりと也
紀伊殿は南海第一之御國被進候も熊野高野につゝき大山あり山海の利
ことに多く屈曲して行は濱はかり長百里に及ふといふ也定も御取箇等夥
敷ことなるへきに其上にも近來御貸附といふこと初りて夫に寄輕きもの
まてに御心遣ひあり葵御紋之義元來御三家と 公儀とはかはり居といふ
なれ共今は同し様也されは 公儀の御紋も同前也しかるを出張所之くき
かくし茶臺迄へ御用ひあるとは無勿躰事也葵 御紋之事享保の頃より今
の如くなりし也これは紀州の御紋のまゝを 有徳^{院脱カ}様御用ひしありしより
一變せしと人のかたりきまことにや既に 御本丸西丸の御座敷向等之御

紋古きは今と大にこと也御のほりは今もいにしへのかたを御用ひ被遊る
ゝか也今の武鑑のはしめか元和の頃の板本に諸家旗印といふもの聖堂に
あり右等之御紋にてもいにしへと今の 御紋はわかる也

○三日 晴 未明に馬場に行乗馬夫を刀槍例のことしこの頃の雨天にて
馬を久しく不乗けしからず張居たりわか馬既に三年せめ馬といふことを
せねは借馬同前なるへきに向にあしくならぬ也これは馬左衛門か乗こ
みよき故也細川にやは駒より三年之ものは五年に乗込といふ也よつてわ
るくならぬ也今流行の馬役か二年三年に馬の生れ附に不拘見場よく乗込
し馬ならば此ほとは乗られぬことく崩へき也范質も速成不堅牢と戒られ
たり速に意外に結構になりしもの十にして六七は必中折するか也可恐事
也天理みなしかり不存寄俄に進しものはつとめて其ことを忘れて十年も
其余も慎居へきことかわれに昔其心なく今後悔する也阿部いせ守殿の特
旨の供廻りを段々に被減候も御役中是不被用と之義などは近來きかぬ美

談也これと今の穩なるをおもへは此御人は御敗御氣遣ひなくなかく御盛なるへきか

○四日 晴 一兩日俄に暑を催す八十一度也女共みな單衣也○良右衛門かたの兒去年二月出産せしなれ共よほと才あるかことく且よき男兒也このほと何事もよく辨別しおもしろし魚をみて鍋に入れむといふにて其餘しるへし貞助かたの男兒は正月生れなれ共なみくの兒の三人前はかりあり随分よき兒にて骨たくましくいかにも壯士えきさしみゆる也ならの給人みな夫婦さし向ひにてひるま入念こしらへしなるへし出來かた至るよろし○おさとけるく三十日余にて起る尤一日に而よろし昨日の朝より夕まで食事なし今朝より食事いたす余は例の如し○ならも悪る口をよくいふ所とみえし也ある已前の奉行を大びらめと号けしよし其意は見場は大きくくろけれともうらをかへし腹をみれば素人也といふわけ也とかや絶倒感し入たり

○五日 晴 泉水の鯉夥ふへて此ほと子をすることかまひすしかきつはたの内によりて黒とあかの鯉織かことし金魚も一昨年うかい茶碗へ四五ひきつゝいれて買たるか五六寸に及ひてこれも子をする也追々つゝしかきつはた盛にて池のけしきよく成る也かゝることを母上にも新右衛門等にもみせぬといふそうらみなる○昨夜より蚊帳を用ゆ立春より九十四日目也○俊藏けさ春日へ行て藤をみたるに白ふちと紫の打ましりたる松か枝を手網染のことくにせし所もありていとくよしと也春日社頭の藤を賞することは千年余にもなるへし名所のふち故によきはつ也

○六日 雨 御用日眞田信州よりたのみ大坪道禪翁のかたにて革くら出來たり出來かたよし七兩三分也

○七日 くもり おさと此ほとはいろくかな本をよむ也よつて我に平重盛と平泰時との事をいふ故にいつれも君子賢人とも可申歟泰時となからむは北條の九代おもひもよらすといひしにおさと又申せしは重盛は

平相國の 天子に奉對候不遜のことを奉諫既に親なりとも 天子には
かへかたきと迄申たり泰時は 三帝を遠流に奉處戦にも加りし人なれば
この一條を以も重もりと同じく論すへきにあらすかゝる大義暗き人なれ
は公曉をして實朝を殺さしめ主の天下を義時か奪ひしにも加りたるなる
へし可疑ものといふ故にいにしへの賢人を可疑まてを以難することいか
ゝ也と申せしに既に 万乗の君に弓ひくほとこの事ならば父の逆意を乍知
不諫位のこととは小事也大を以小をはかる必推量とはかり申成し給ふとも
不服いつれにしても不智不忠のうちはまぬかれざる人也といふ也予少々
答にこまりて扱々おさとかいろゝのこをいふにも困る也夫故に病身
也ある遠國奉行の妻に和泉日記とかいひし女に過たるものを書し人あり
汝も病なからむにはかゝるしれものなるへしと横倒に云ふせたり此人近
來道理の論至やかましみな病の本と成也

○八日 雨 けふ与風烈婦のことをいひて細川越中守忠興か妻女の大坂

にて自害されし時に其家來か介しやくせむとて同間へいらむとせしを夫
の留守なれば男子の同間は憚あり次之間より介借せよと有ければ長刀を
取のへて介借したりと江口の伯父の常に御物語なりき婦人といへ共大丈
夫はかゝるときはつかなる場にも禮をは守られけるとみえたり曾子か
易牘子路か冠を正しくせしにと少もおとらぬこと也朱文公の寥子晦とい
ふものに答られし書のうちなれば少も偽はあらしとおもふか蘇東坡か捕
られけるときに面色人色なく兩足軟たりと書たれば菜のことく成て腰の
抜たるなるへし近く矢邊駿河の評定所御呼出に成たりし時少も不動夫
々分明に家來共にも差圖して出其時は鍋嶋内匠頭いまた寄合肝煎なりけ
るか評定所に出る都合など詳に教へしと其時内匠の我にかたりて昨日は
囚人に教られて勤たりめつらしきことゝいひき駿河と東坡にてはいつ
れかまさりし人ならむ東坡か正言して爵祿を塵埃のことくにして上書な
とさるゝ躰後世の人と論するにも不及別段なるにかゝること又あり与風

こゝろの動きてかくなるか人の心といふものは解せぬもの也賢人とも可申東坡にもかゝることあり臆病ものにはあらぬ也人のことなか／＼論すへからさること也よつて武士を磨くものゝ全くあまりの間違なく死ぬといふことは目出度のかきりなるへきか何卒大事に向ひ心の動かぬ様に仕たきものなれともさて／＼無覺束也大事に向ひあまり心の動かぬ様に仕さしての美事なくとも立派の士也乍去牽れものゝ小唄といふ類は論するに足らぬ也因に云死ぬことを目出度といふこといにしへよりいふことなれ共右は惡敷ことを中くらゐといふ類の反語也右に付るは古書の證月蝕をはえといふに付夏蔭翁の考あり

○九日 晴 留役瀧澤某か元家來常土村源七か方より白木綿一反をくれたりこれは彼はひたすらに望み乞によつて同人を順作かさふらひにつれたり其歡一かたならさるによつてくれたる也彼ものらか一人にて行みむには十兩もかゝるへきを却る手當等予方よりものもらひけるを謝しけるとそ聞へし也

○十日 はれ このほとは又さむし四十度以下に成時こうあしき也市三郎も風邪也近頃はいぬることはめつらしき也

○十一日 はれさむし 六十度中數也これ相應の時候也九日には同心一統并惣年寄町代共へ酒をのませたり惣人數四十人余也其内に下戸なるものはつかに壹人也といふ也けしからぬ事也組頭同心と筆頭同心は盃遣したりみな大に歡し也みな大に酔たり例の謠ひをうたひ舞ふ也いかに酔ふとも鄭聲などとするもの一人もなし大酔の躰をみるに能の舞と謠ひあるは狂言の太郎冠者なれはみなみるへしこの風は關東へうつしたきもの也樂みて聲を發することなくて不叶もの也故に猿樂のかはりに新内ふし豊後をふしを立派なる人にかたるもある也けしからぬ事也聖人の一代の樂を作り給ひ及び故なければ琴瑟身をさらすともありて樂にてこゝろをやしなひ存外の防をすること奇妙なる考也江戸の人群りて酔しをみるにド、イツ潮來越後節の類これみな船頭水主のなくさみ也其余非人河原も

のゝまねならずは或は裸躰にて踊る類也ならの能のときことあらは以上_ニ卑劣なる風は可止か畢竟士たるものゝなくさみといふことなき故にかゝる弊風になる也可歎事也

○十二日 雨 このころ旅人同士の争論あり夜熟睡の所を一刀突夫を段々つかみ合相手はゴマの灰の大男脇差をもちたる方は五十九才の百姓也よつて三十八ヶ所はかり一寸貳寸の切疵をつけて漸殺したり掌のうちに二ヶ所疵ありつかみたとみえたり我いふ眞のなまくらものなるへしとて大に笑ひし也しかるに右_ニ脇差欠所に成同心買取研上てみせしに二字銘の兼定中心其外とも更に無疑見事に出来たり不思議千萬也あまりにあきて貞助とゝもに焼及其外をみて檢使の躰其外をよく聞いろく穿鑿してみるに其脇差にところく及_ニ内に蟹足みゆる也匂ひ出来のくの目みたれのうちに蟹足の前のことく出来たるはかねかたく火のつよきにはあらずやよつて及先の段々とひけて大さび身に成居たる故に自然の及ひ

きのことくなりて少もきれす出及庖丁の用をなさゝるかなり新刀のかねかたく火の過たるもの及先鋸のことく成居研十日前後位にゐもはや及の甚敷ひけたるあり今の上手にも間々あり古刀別_ニ關打などには決_ニなき事とおもひしにかゝる事あり古刀新刀の差別なくかねかたく火の過てかみを切みるにチャリくくと切るゝものならば必及さき不宜なるへしこの説上手の人の説を聞たし奥州のかね定かとおもへともひら打にて壹尺二寸はかり中心の様子なかく奥州のかね定とはみえぬ也

○十三日 曇 いぬる十一日の夜に三月廿七日附_ニ書狀相届く先以母上様少々濕瘡のこときもの御出来被遊候得共一躰は御快と_ニ御事恐悅_ニ至其外一同_ニ御無事目出度候新右衛門_ニ書狀別番共相届く幸三郎_ニ書狀も相届く柳亭種彦_ニ事鳳凰のすみか左もと被存候義に御座候○祐定_ニ刀貳尺貳寸のよし目かた有之候は至極の佩刀なるへし祐定のきれものよしは武將感狀記などにもみえたり○三月十一日_ニ的場は御うらやまし

き事也鐘三郎の當り五十本に二三本ぬけとはおとろき入候新右衛門の弓七分に中りも又七分歎息いかゝあるへき御同前の老こみ御奉公片手間には過ものなるへしよし野の竹林院には流祖自筆の傳書貳冊あり○幸三郎より差越かまやりは大十文字に流義のやりよりは五分かた大きし御廻しに不及候わか所持も寶藏院の所持も金房のやり一リンも不違目くき穴まで同じ流祖の深意あることゝみえたり○兼房は短刀御取極に可然候○先年熊谷の破談鏝いまた有之下直に候は、取入置可申候老こみといへ共捨へからざるは武術也捨れば少もやくにたゝす不怠されは下りおそしわれ例の櫛を棒をふりみるにはしめは二十本はかりなりしか此ほとは三百七十本程ふる也手に力つきたることは覺へねとも近頃市三郎と遣ひみるに市三郎のもとゆひ必切るゝ故に心附て尋みるにいたむと云間こゝろして遣ふ也され共品に寄家來共四五人も遣ふてきたひれし時はわすれてしないの當り強くなる也夫丈は手に覺つきし也棒に三百七十本大

刀に七百本ふれは一汗になる也

○十四日 晴 昨夜内藏之介江戸より參着同人江戸にて井上内藤大越其外所々に參りていつれも無別條母上様倍御機嫌克と之事をはしめて親類うちの躰或は孫等か健なるよし具に申聞候而安心いたす内藏之介道中にて雲介らかいふを聞に水かけはげむはて運ふ方か勝といふを聞たり何のことにやといへり江戸にて何そ水のかけるなといふことありや上かたにては更にきかぬこと也田舎へ來り流行におくれてかゝること更にわからす○十五日 晴 八十二度の暑也人々少々宛あたる也しかしおさとの半けろく市三郎のごろく寐位の事也○穢多鍛革のふち頭を造り來りたりよく出來たり穢多のする所をみるに革といふものは毛をさりし表のかた銀と唱ふる所あり鼈甲のとき所也わたといふ所あり白くすき通らぬ所也其銀といふ方を少もわたを不加よくすきとり夫を以鍛あけしは實にきれぬ也唐牛皮はわた少かるへけれとも是もわたを加へては精品の和牛皮

におとるなるへし江戸にて岩井かつくる皮鏝など至る柔成もの也○この頃儒者かもとより新樹といふ詩題をこしたり一二首つくりたれとも歌にはもとよりある題なれとも詩には新竹といふはあれと新樹といふはきかす茶山か詩之内につくりたるはあれ共題にはあらずこれ以日本人なればたしか成證とはいはれず手もとの韻礎などにはもとより新樹の字なしよつてもしや和臭かと儒者に聞に大坂にて大儒のもとにて出し題なり疑はあらし調へ見可申と之事也しかけふ來り新樹といふ熟字なしといふ也予十四五歳の時友野雄助殿のはなしに近く江芸閣に誰か詩を日本人のみせしに翠楊と作りしを再びまで縁楊と直したり不審之義に付佩文韻譜其外調たれとも翠楊といふ熟字なかりしとかやこの新樹も夫の類かと聞とも大和一國中に五車韻瑞所持の人さへなき様子に付一向に不分明也田舎は仕かたなき事也○法隆寺の僧より知足といふことをかけ物にする故にしるし吳よと之儒者かはなしによりて

法身無一物衣鉢任隨緣知足爲何事活心常確然

としるしたり僧は頭を圓にし妻子をたち魚肉をたちて其道にたることをしるは十二分也しかるに尙知足をいふは佛學をせぬか也○江戸の革具足といふものは多く革籠などを買てたち作る也革かれてかたくみゆれとも革は油の氣抜ては用にたぬ也考工記に革甲は二十年とかいふことありしと覺へし也革具足つからは御用心あるへしはいたてなど多く皮籠の古くなりたる也と聞し也

○十六日 くもり 此ほと可笑は日のなかきを歡ひて夕かた軒端へ出て書をよみ居たりおさとはや御仕舞になさらぬかといふ故に夜か短ければならぬと言は欲のふかきとて笑ふなり其足にておさと泉水をめぐり御隱所^{居脱カ}に行は爺々の仰にはやれ難有先ツ／＼けふもくらしたりと之御事也近頃爺々は何事も氣をつめたる事を不被成よみ本も口畫くらゐのこと也母上はよくよみ本を御覽ある故これは左ほとに御困りもなし爺々の御はな

しに昨夜鼠の欄間をかじりはいたし不申候哉まだ鼠といふものあればわ
か用もあるとて御笑也○此ほと鯛至る下直也江戸にて貳分貳朱位の大鯛
十三匁也され惣菜に鯛も遣はれすやはりよめな田せりの類なり
○十七日 雨 五時を供揃に東大寺龍松院を 東照宮并西照寺を 東
照宮 御廟屋と奉申上候御場所を參拜いたす昨夜より雨なれ共出宅より
歸宅迄雨なし奈良奉行の成當所參着の日を外出にかさ用ひしこと曾あな
し吉野巡見も歸り懸に相成一日ふりたる計也西照寺を 御廟所と申候も
のは寛延の頃惣墓之内を 御神号を石堀出し候に付右を趣奉行所を相届
夫を當時を御取扱には成し也 御治世已來 御神号を御事は小兒たり共
辨居可申義然ルを土中に沈み居候とを義不思議なる話也昔三州にてある
僧田畑を川欠に相成候事を厭ひて 御諱有之候石を竊に埋置追り掘出し
候由に訴出たるよしこれは事を遂たるよし也惣地中より五六百年前
のものならば格別二百年來 公義を拘り候ものを掘出し候由訴るものあ

らは懸り之役人こゝろしてみるべきこと也螢澤宗林寺其外のことく賣僧
多くあること也當時寺社方には豊藤といふ其ことに詳成人あれば夫に
は大によろしき也わか調役たりし時も此人に多調へもらひたり
○十八日 晴 此ほと又冷氣也中數二段下り也きのふは例を通十日夕よ
り潔齋に付十七日晝後より潔齋は解たれ共よるまでは精進に付酒を用
ふるにはつかに大根おろしに酢をかけし一種にて夕かたより酒を用ひ頼
まれしものを書たり其内三幅對の好みありしか其もの近頃身分よりは立
派成普請するといふこと聞ければ雪月花の内月を
茅の軒竹のはしらも足ることをしりてくもらぬ月をみるかな
としるし遣たり少々酒を用ゆるかた書の上よきといふこと不審也酒は少用
ひても精神の亂るものなればよからぬはつなれ共古人のいふことく膽
ふとくなるものなれば夫故に立派にかきたきなどいふ欲心去りて却るよ
きか也此事合点の行かぬことなり

○十九日 くもり このほと筆をあらひみるに水清き泉水にてあらふ第一よし筆洗ひの小なるは悪敷ものなるに池五六十坪もあれば大筆洗のかきりなるへしよきはつ也この池鯉夥生してこのほとは一尺はかり成より三四寸なるまでには數百頭あり奈良奉行轉役にて與力の預り中に水を干て魚をとるといふ也さもあるへしわか來りし時はめたかもなかりし也築山のうしろの方に出し所には蓮あり其外はかきつはた也このほと至るよろし庭中より春日山をみるに新樹青黄なるも碧なるも翠なるもありてにしきのことし秋ならねとも一しほのけしきある也

○廿日 晴 中院屋 御位牌所の參拜夫々興福尼院の參ることには二百石の御朱印を 大猷院様被下たれば右之 御靈屋あり四月廿日には奉行より御香典を奉る尼寺にて下々までへ赤飯を出す也住僧の尼は勸修寺宮の御猶子にて公家衆の娘也よき老尼也けふいろく 御所の咄等をする故与風娘二人 御殿にありといひしに 御所はよき官女みな下ヶ髪也御

奉公被成候御方の御髪は如何と聞故に出まかせに丸まけかと覺へしといひみしか又かたはつしかともおもひ下女らはしむみ貝の口を開たるかことき髪なれば其こと凡にいひかみの事は予詳にしらすといひしにならび居たりし役尼共われを向きて笑ひたりこゝの尼の附弟は芝山持豊の孫にて書をよくし歌をもよくする也

○廿一日 晴 けふ書經をよみて康誥にいたりて大に感歎し且みつからいましめけるは康誥といふものは武王の其弟康叔を衛の國へはしめて封し給ふとき段々との御教訓を記せるもの也其内に専らに御仕置筋をつしめといふを主として仰られたり後世の人の吟味物の仕かたを人につとふるよりも詳なる事也康叔といふ人武王にあまり劣さる御人なるへしとは汝の心ほとものものはあらず朕心も徳も惟汝はしれりとあるにておもふへき也夫にさへもかくも公事吟味物の六ヶ敷ことをくりかへく仰られて其内には般の世に常に用ひし政に隨ひて汝か私意を加ふへからすと仰

られ又ことく其罪にあたることく能出來たりとも我御仕置筋のしらへは行届たるとおもへは怠のこゝろ興りて夫を御仕置筋の間違も出來さる故に決而御仕置相當之取計の出來たるとはおもふへからすといふことなどみえたり聖人の御仕置筋を大切に思召ことかくの如ししかるに遠國などには公事吟味物御仕置筋などいふことは與力同心らにきかせて己はしる事少奉行も多人數數百年のうちには必あらずともいひかたき歟也上たる人こゝろすへきこと是一ツ周の世の御政事を殷の常を守れとあるにて奉行所などに少も新規のことをすへからさることこれ一ツ又少々御仕置筋を知りたるとも少も相當の取計出來たるとおもふへからす平日不相當間違はかりと薄氷深淵のこゝろたるへきことこれ一ツ也康誥は長きことなれ共其内三十六字之内に以上之ことを仰られたるは實に聖人なるへしとこゝにいたり水を洒かことくぞつとして恐入たり即刻に用人を呼寄て公事銘帳を出させて夫々調を申付且御仕置筋を一度の博奕にても

こゝろしてみるへきことく深くいましめたり○醫者の花井隆介よりうきよ繪にうつくしき娘のかけ物もち居るを拾得のかけ物を見るかた也縮地にて極彩色也池田播磨か奥かたよりくれたりと也夫へおさとに讃を乞ければおさとか

たをやめの花の姿も世のちりとはらふこゝろに月やすむらむとよみたり拾得か見居るかけ物に月あればかくやよみけむ也大に禪氣あり真如の月をよめるかことしかかけ物にかくとて手習にたにさくをかくをみれば雨中見花といふ題にて

雨風のめくみに咲てあめかせの又うつろはす花よ世中とあり予いふこの歌我うた也女の歌には過たりしかしわかこゝろ附しことの意にてよみたらぬには汝のうたとすへし左もなければ女不相應のうた故に取上てわか詠草のうちへ加へんといひしにされは候家内の下女はしたを遣ふ其外のことをもよくためしみるによきことにわるきは必あ

り下女之内に眞木の儉約をするもめしたきなれば眞木を夥遣ふもめしたき下女也この類のこと甚多しよつてかくはよみ候ひぬ予常にいふに万物一理也ときき又家を治むるは國を治むるの小なるもの也といふことも予かつねにいふにききされは私は下女の薪のことよりおもひ附候へ共おしひろめて御用ひあらむは殿さまの御事故いかにもなるへしと答たりしかる上は其うた汝かうたとせよとて大に笑ひし也○夕かた九日附之江戸狀來る不被爲替母上は御出來物にて水氣御とれ被成たるとの御事恐悅このたひの御狀は御書舩もよろし夫婦の悦此事に御座候末に御いましめの御事奉畏候る難有前に記せしこと、同じ武王の御説と符合するとは不思議なり御沙汰之次第厚く守り可申候○新右衛門より御別昏光ること左もあるへし○進上之短刀入御氣候と之事大慶に候○廿九日高田の下屋敷へ御出と之事右之中山のやしきは先年も小笠原の世話にておさとの参りき御日記をよみておさと、いひ出して江戸をおもふこと頻也○異流の御吟味

張横渠ノ西シテハ
銘ニ乾坤ノ
父トアリ又稱シテ
テトミレハ
宗トアリテハ
天ニツクテハ
日月ハ主
ナリカネテハ
合セカネテハ
父ト云ヒテハ
スシテハ
人ト云ヒテハ
云フテハ
釋ト云ヒテハ
フノイト云ヒテハ

物之事に付御物語あり文政九年頃堀大和守殿懸りに四方院河内と申候尼海靜と申一件あり其女はあやしきものなりけれと異法とは不存日蓮宗とのみおもひ居たり其取上物之内に立派成づし有之其内に本尊めきたるものに小兒の像の如生イケルに繼上下を着せあり不思議におもひしかある諸侯の小兒の死せしを産母のかなしみて造り法華經をきかせくれよとの事に納しとの事故夫かとおもひ置たり其後みつぎ一件之吟味書に菊兒童の姿に本尊をつくり置しとの事あるによりておもひ合すれば海靜は所生たしかならざる京都のものにト筮なとするより更に色情のことなきさま等みつぎか類とおもひしか其後山水と名を變御構之地に立入中務大輔殿懸りに吟味之節右之人形同様之もの又出て殊に數品ありければ疑を附ていろく吟味せしかとも不分遠嶋に成しか程なく島拔をして行衛しれすと成たり夫等は疑敷はかりなりき其節諸書物をしらへみし也キリシ丹のこ
と白石か西洋紀聞の上其外ロウマ人欸狀記にみえ紀聞之方には法の大要

をあけてあり當時蘭學被行其内には必其書なしとはいふへからざる歟也
西洋國々みな其宗門也被遣候字之内西天人といふはかの宗のサンタルマ
ヤといふものをも可申歟サンタルマヤといふものは女にて磔となりしキ
リシタンの本尊也今竹はしの御くら宗門奉行預り之内にいろくの像あ
ると聞也右はヨハンといふものゝ所持にてロウマ人歎状之内に出し圖な
るへし増訂采覽異言の内イタリヤ國の内にキリシタンの事あるへし天母
と漢譯シテ北池偶談といふものを引てありしと覺たり調役中のこと故に
忘れたり御たゝしあるへし西天人を母といふこと天母にも似たりさて又
日月有天の作り字を父といふこと可疑日月は陰陽也陰陽有天にては父母
のことならずや乾坤に日月の象あるかことし有は在を誤りしなるへし右
をよむときは日月天に在西天の人といふにて近くいへは佛法のことなれ
共佛法ならば隠すへきわけなし可疑事也白石の説にては天帝とは天地を
も作れるものありて夫を天帝といふかとありしと覺へし也天文の比わた

りしといへは甚怪敷宗門也天文の頃銃炮を薩州に渡せしもキリシ丹を弘
めし黒ふねなりとか聞し也銃炮のこと薩州の人南浦といふものゝ文集に
詳也信長の天主教の本尊を置かして天主臺を建られし也このこと信長記
にありしかと覺へし也聖堂に慶長の寫本信長記あり御覽あるへし寺社方
御條目之内に慶長十八年かに京都にありしキリシ丹寺を大久保忠隣の破
却のことありしかと覺たりはるさめ日記は其ことをかきし書かと覺へし
一冊ものなりうつしは宅になしロウマ人歎状はたれやらのをかりしか宅に
其頃のもの尙ありしかと覺たり半昏二十枚はかりのもの也いかゝなりし
や甚不分明也はるさめ抄誰より借てみし書なりしか忘れたり鷹見十郎左
衛門なとかもしるへからざる也コノ人にロウマ人のヨハンかことをも聞し
也からの書には若般望とか書てヨハンとよむかと覺へし也ヨハンとは姓に
て名はいろくあり日本へ來りしキリシタンはヨハンハツテイスインと
かいひしと覺し也西洋學の開くるも又この弊ある也漢末の黄巾明末の白

蓮社トカ云邪法などありし也當時は恐悅の御世なれはことはなければとも
符水を施し愚民を惑すものはゆるすへからざるもの也○日々儉約等の次
第詳に御記し安心いたし申候まつゝ用心に必不滅と申候得は御同前に
身をつめ隱徳の外多事なかるへしわか佐渡奉行被仰付たるとき河村清兵
衛來り綿服にて劔術の具あるをみて可惜ネツケ土圭などあらは佐州には
不行して又よきことのあるへきといひ林大内記にわかことを足下はあま
り上下つき立派也こゝろせよといふ故にこの籠服の上をいかにいたし可
申といひしにされはとよ籠服か則立派過る也易に足ヲカサル車ヲ捨テカ
チヨリスといふことあるにあらすやといひし也みな老莊の意のことくな
れ共明哲の身をたもつにこゝろあるへきこと也老子に和光同塵といふこ
とあり奢侈に過しものもとより君子のとるにたらぬこと也され共和光と
てあまりギラゝト儉素みえす又よの人と塵を同じくして居るといふ所
前の大内記の上下立派也とて異見せし所なるへしこの味ひ名人の位にて

われらには必流れ行て人の笑はれくさとなること多かるへしあしくいふ
時は奸智よき人には温厚とも可申歟其極は仲尼の甚敷をせずと孟子のい
ひしにてとゞまる也林大内記のいふ所は並々の先生にはいはれぬ口上也
この人の純儒ならぬも卓越せし豪傑たるもこれにてしるへしわか前のこ
と出來すして今以如此なる故にこのことをも記すなり衣類其外の驕りは
今日にも直さるれともこゝろの驕かちかたきこと也○今朝馬にのり刀槍
などをなしておもふはよくこゝろをせねは藝は勿論行跡のよきなどとい
ふことみな驕滿にて身を亡すの種となるへし可恐々と自誠たり昔予信
州へ參りし時御嶽山へ年々登る山伏天狗に投られ這松のあるところへ投
落されて數日を經人に助られしことあり夫をきくに山伏最上の行者にて
清潔われほとのこととはあらしとたのみたる故にたのみたる所けかれと成
て山神のたゞりありしと其頃いひき何事ももはやこれと十分とおもふは
不出來の根さしとなるゝへし

○廿二日 くもり夜雨 けふは父上七十の御賀の御酒奉る御隠居所に予
おさと市三郎着替して參る幸に大鯛大ひらめあり夫等に數種のを
造りて奉る夜に入下女共へも御酒被下たり父上御悦ひにて頻に御舞あり
き今頃過酒之上必御瘡中のいたむ也先達而民藏方の御招請申上候節御い
たみ強く起りし時われもみまいらせしに跡にて三日ほともみたるいたみ
を御覺ありけるか其後絶而過酒被遊候而も御瘡の御いたみなしと也家來
共は中小性迄へ表之三之間に而御酒被下あり吸物一ツ肴二種也是等口も
鯛一尾を遣したり用人給人中小性より御いはひの御酒を奉るけふ酒を用
ひて例の通書をかきたるに更に酒なきよりは出來かたよろしこれは考み
るに清書こゝろを更にはなれわかものになりてたのしみにする故かと考附
たり少しく深山に寶あり寶にこゝろなきものこれを得たりといふ意かもし
るへからさる也けふのかけものは先達而父上の七十の御賀にとはし書して
とく歸り春日の山の月はなを武藏の友と千よかたりませ

と唐昏半裁へしるし奉りしを御表具ありし也○酔後の書に一益あり書に
のそむ故に眠氣なし書に對する故にこゝろ亂れす酒の惡物にかゝる益あ
りとは上戸の昔はしらすして大に損をせし也大坂より唐昏を調置てかく
也ならにては小かひは惡昏にて六分大坂は上昏に而三分也よつて六七枚
はよからむとおもひ書けるかおさといふ

樽酒は徳たとぬかす大たわけ

といふ川柳に近しのこりの昏を御覽あれといはれて驚みれば半本買し唐
昏殘十枚になりし也今夜もいまた日のあるうちより書かゝり四過まで反
古のうらなとへ大字をかきてたのしみたり

○廿三日 晴 明日池之内村へ青山伴右衛門其外之もの共着之由届來る
ならば道筋にならすよつて來らすはしめは定めてなら通行のことゝおも
ひて其したくする積なりしか先觸來らぬ故に尋みしに右之通也

○廿四日 晴 なら人の吟味書二百年濟來りしことゝ不分明之義不文段

は直せとも格に拘る義は其まゝ也けふも小鬢をすり疵受平癒いたし屈伸不自由之義無之旨を吟味書有之目鼻は動くなれ共小鬢などの動きて屈伸するといふことけふはしめてしりぬ其余右に御察しあるへし

○廿五日 晴 誕生日也御兩所様の御酒奉る○池之内村は八里余ありてならより一向に音信なし○けふと風いろくおもふに近頃人をうらむといふことは大に減したるかことくみな己か身より起るとおもふかことく乍去金銀のほしき名聞の甚敷は少も減せさるかことし五十は成徳といへは二三年之内に是へ一廉の修行出来ねはならず乍去金銀の欲は少しく減するもするへからされとも名聞の欲は十年にては中々無覺束とて歎息せしにおさといふ豪傑にても名聞ありやといふ故に賢人にもあるへしなしといふは多偽か身の穿鑿の行届かぬ人なるへし孔門の弟子にてもいかにあるへしや近く日本にては大久保忠隣か并伊家の冤罪に御預に成ある時掃部頭直孝の朝臣と對話の時に其冤罪を深くをしみていろく被申

ければそこもとは實に冤罪とおもはるゝやと問れしに然りと答られければそこもほとの人か冤罪とおもひ給ふほとならば決而申譯等之義堅く御断におよふ也いつまでも罪人にち果たし今 東照宮のかくれさせ給ひし後にいたり其こと明にならむには少の御瑕もあらせられぬ 御方に瑕の出来るわけ故に堅く断と申せしによつて掃部頭殿も頻に落涙せられしと也この人なと名聞少もなく仁の盡義のつくるとも可申歎也乍去畢竟 東照宮の御君徳遠く堯舜湯武と巍々たる高きを争ふ給ふ御事にて今にいたりわれらこときも御徳をおもへは涙を落すといふ 御方にましませは御側に被召遣ける御人々は御恩のあまりかゝる大忠臣も出来しなるへし忠隣のことくならずは眞實の名聞なき人とは申かたき事なるへきかなといひて忠臣の譚に例なから涙を流したりなら町に博奕のあまりに被行ける故に三十人余入牢申付たり

○廿六日 くもり 髪をいふ家來不快に付おさとかはりてゆひたり久々

故に不似合也といふ也いかなれば髮結は人々に似合やらむといふ故に与風おもふは髮結は其人の以前の風に似せていふ故なるへし遠國を奉行又しかり先其御役所に行其土地の風俗をみて少しも私意を不加其風俗によりて手を下し仕來りを守り居るうちに其善惡のわかる也其よき風を長し其あしき弊をあらたむるにあらされは土地によく似合たる御政事は出來ぬ也しかるを其土地へ來りこれも江戸風あれも江戸風と仕直したらは前の下手の結かみなるへしとて笑ひし也ならの奉行所など珍事あれ共害にならぬは少も構はぬ也元來中坊駿河守先祖は南都の衆徒にて筒井などの類なれば取計向に其仕來のおかしき事もあれ共畢竟土地の生れ故に土地に應したる御政事をするとの思召にて國初に奉行になされたるへし其御趣意に背きては參らぬ也夫故におかしき事も必死の覺悟にてこらへ居たるうち少々みなれたり鹿も犬のことく魚類は新鮮にあらぬものとおもふことくになりたりこゝにて髮結の結ふことく自然によきかたへ引附たき

もの也きのふはあまり博奕の甚しさに三十七人はかりの入牢申付たり明日は落着なるへしきのふは旅人の名所の案内してくらすもの七十人余あり夫らかたとへは途中に宮方の築地わきへ田舎ものゝ小便するをみつめておどし錢をとり強ひ案内者になりて錢を貪る種々の惡法あるによりて其頭取を呼出し一通り糾上白洲に廻し彼らか書付にては案内者の風俗はよけれとも大坂にてならの案内者といふものは不宜由を板行にいたし候由等申立あるによりて夫までにか支配所を惡敷申さするといふはいか成ことにやわか内々糾上趣なくは大坂の板本よりは大にあらし以後は無理はせぬかといひしに深く恐れ入たりよつて頭取はゆるし田舎ものより無理成錢をとりたるもの三人は入牢申付たりこれにてわか勤役中は博奕止あしき案内はせぬなるへしならに名高き博奕打盜賊の申口より出て追々に三人はかり遠島になりし故に此ほとは惡黨共大坂其外に逃行しも多ある也

○廿七日 御用日 雨ふるなら振の侍詩文章筆算共に出来學問文章の才は十八歳にはよほとよししかし何分所々の氣受よからす其上に困窮に迫りたる心得違え風聞あり尤酒呑にて慰にかくせしもしるへからすといふ位のこと也され共捨置れすいとま遣すは可惜ものに付いろくしてみれ共平日の書物人のいはれくさの一端と成れり受人はたしか成ものに付夫の申聞たるに母の聞て大に怒り汝の父は儒を行として大和の國にては人にもしられたるもの也儒の間に弓を好み日々に三千の巻わらを射一たひは身を立る積なりしか汝か七才の時に病死したり我も再縁か國へ行かところ迷しか其ころより汝か儒者にもなるへしかの才みゆる故に細き女の手業もて生育したりしかるに汝其心ありては我生て更に詮なし汝を殺して死するまで也とて夫の脇差を取出して突殺さむとせし故に脇に居たる請人等あはてゝ振留段々にわひて以來主人より沙汰受ることあらむには即坐到切腹せよといふ書付をとりてこの度はゆるせしともおさとたと其

ことを聞てあはれ元は儒者の妻なりもしらるゝ也孟母のことしなといひ用人等も氣の折てこのたひのことは物の失しなといふことにもあらず一時の坐興のこうじたるなれはとて母のかたへ遣し數日押込てゆるす積にしたりこれにてもおもふは子はいぢめ殺せ馬は乗り殺せと 行道院様の常に仰られし御尤なること也このたひのことも此母なからむには必いとまを遣すことになるへしこれらに見合ても子は嚴にすへきこと也予彰常没して夫にこりてもしや市三郎にあまきことあらむには 行道院様の御遺教に奉背とおもひければますくこゝろして嚴にする也市三郎元來愚にして且弱し近來丈夫にはなりしといへ共武術などおもひの外に息わるし腹の動氣強くけしからす筋はる故にこれも又わか涙のたねになることあるかやと劔術遣ひ遣しくるしむ時に彰常のことを密におもひ出すことしはくあれ共其度々に死生は命也子の死ぬることを少もいとひては天より授給ひしより遙にあしくするとおもひて少しもゆるさす其ことお

もふことに一段と其時は心を用ひて嚴敷すれ共所謂むくろじを磨くにて一向に事ならず憤のみなれ共事の成とならざるは天授也中道にして棄へからすとやはり嚴敷責みれとも中々少も出来へきとはおもはぬ也夫等に付るも前の家來の母を不便におもふ也少女壹人と後家と侍の祖母とにて糸より細きけふりを立居しに祖母は失て今は侍の妹と二人にてかせとてならさらしになる麻をとり或は墨の彩色などしてくらし居るなれ共夫の時の書物刀劔の類は少しも不失して侍の成生の後可讓とて貯居也この頃もわかもしや入用にはあらずやとて手箆笥をもち來しか青貝の立派成古代のものにてわれらか坐右に置へきにはあらぬ結構なるものなれは返したり三兩はかりのかはりにしはし人に預けあるといふ也其余右にてしるへし○けふ東大寺之末派聖寺といふものゝ事に付書面を出すこれは高野山の聖寺と違ひ所々に散在して除地など持居也世上には烟亡と唱へ非人のことくおもふもの也寛政七卯年八月二日寺社奉行松平右京大夫の差

奈良奉行所
に始は聖は
年所八朔奉
行上下に奉
麻正持に奉
金百正也奉
尤俗鉢也奉
去いつれも
寺号にても
兵衛八兵衛
にあらず

出候書付之寫東大寺を出す小出信濃守殿御領分丹波國船井郡上河内村之内隱坊又十郎が當院を當寺と申立候旨俗鉢に本寺有之段御不審に被爲思召御尋之趣承知仕左に申上候右隱坊之義は元來聖と相唱候當寺大勸進職始祖行基菩薩發願に聖武天皇蒙勅裁諸國に三昧を建聖を取立被置候以來其末流相分相續仕候既に於當國は南都御奉行所聖爲惣代每歲年頭八朔御禮相勤申候聖号相立御座候依之拙院には聖と呼來候五畿内并丹波國聖共等元祖之思德を存從前々拙院を本山と相崇候每歲國々出山仕元祖前々拜禮仕候に付拙院も元祖年忌之節は捨香拜禮等爲致厚憐愍教戒いたし遣候義に御座候尤往古は惣出家沙門之身分に御座候處當時には規則取失ひ多分俗鉢に相成候然れ共三昧には悉寺号御座候元祖發願末派由緒之者に相違無御座候云々下略

○廿八日 くもり又晴 冷氣也みなわた入也夕かたさほ河の螢を多く家來のもち來れり○人殺之吟味書一昨日より一覽少々入組たり其内道理何

と懇意をわけなとにて遠慮ありては却る望を失ふとわかいひしとわかこの汝への物語を左衛門はなしにせよと御意ありしと儒者のかたりし也この御一言にて御家來大に恐れ御取締立へしならの常言に大成ものに博奕せぬは大佛身からにて博奕せぬは春日大明神其外は大きくても身からにてもみな好めるは博奕也といふにいたる故にあまり事と恐入てこのたひ五十人はかり重敲々のもの出來たり寛政のころより後は博奕の風聞にて呼出せしことなしと也けしからぬ國也享和には同心共よりゆるして法隆寺にて博奕をさせ死罪になりしこともありし也しかし此度にて大に市中もの恐れたるよしなればわか御役中は博奕少々減すへしこれ少々減するまでにて御政事はたつ也前の大佛かすかのなはしにて土地のことおもふへし勤當願などに悴義博奕打歩行候段異見いたし候得共不取用と申手段にて奉行所にて聞濟勤當申付しを近頃申付て直させたり御門主位の了簡の役人あらはかく御免のことくにはならぬなるへし膝の文公

か三年の喪を爲へしといひしを宗田之魯にても不行といひて不審かりし類のことありてはこまる故につのりてはせす煮たる鍋へ水を一ひさし打し位にて捨置つもり也

○二日 雨 御役所内之劔術少しく衰へむとする躰なりければ頃日かく唐番へしるして與力に遣したり

歡看寧樂士風昌日々求閑學劔槍不懈十年能若是五畿雄武在斯郷といひしか夫に勵まされしか日々出精也尤市三郎をもかゝさす毎日遣す也

○三日 雨 昨日より冷氣也けふはかしはもち也ならにては例之通この手かしはといふもの葉につむ也土地にては湯をかけぬ青葉へつむ也よつて土地の醫者のくるなとは摘立のはのことし

○四日 雨 御用日吟味物五口あり本公事一ツ金公事四ツ也先達を召捕候博奕五拾人之もの共いつれも五拾文以下之懸錢故惣敲に成遠國のゆる

やか成かくの如し乍去市中に大に恐れたるよし也これ關東と上方のこ
となる所謂也○一昨日夕かた頻に例を通ねふり附ふさく也よつて少しく
酒を用ゆへしとおもひてはつかにのみ其勢ひにて手習なとして四ツ頃に
寐たり朝拂曉乗馬例を如くなりしかやりのすききなどは不出來晝ころに
成めつらしく吐たりしはしやすみて按摩なしたりしに今朝は平日のこ
とし未明より起書見等常のことし昨日は朝用心にあづきの煮たるを食せ
しか夫にあたりめつらしく吐たり用心過て損をせし也

○五日 雨 端午を御禮受ること例のことし雨故に庭へも出ることなら
すうたにてもよまむとおもへり

一盞村醪鬱忽開揮毫醉墨似雄恢即今初覺逢端午笑共婦兒盡碧疊

こゝにてはのほりみな無紋にて眞白也はしへ羽織の火うちのこときもの
を附て夫へ子もち筋を附る也夫はいろ／＼のよききれを附る也杭など彫
ありて立派なることよし菖蒲は五月朔日にふきて四日にはおろし夫を

繩にして兒らか菖蒲打する也いにしへはよほと夥ことのよし也因に云三
州にも昔このことありしか也空覺なれ共大意は覺居る故にしるす也五月
菖蒲うちの事を 東照宮は至而御幼稚にていまた人の肩くるまに乘らせ
らるゝ頃に 御覽ありけるか小人數の方へ行てみむと 仰られしを負る
かたはよしに遊させと申上ければいやく／＼小人數のかた必死の勢あり可
勝と 仰られて其方は御廻りありしに果して勝しと也孫子十三篇之内九
地篇等にいひし專の極意は士卒を必死の地にあらしめて自由に其身と働
かすことにありこれ軍學の妙所なるへし其妙所を人のかた車にのり御
歩行被遊うちより御承知被遊しは實に 御神ならずや世の碁うちに十歳
以下に二段三段のものあるにておもへは 御生なからにて九段の名人
の御位夫より絶類の軍旅の御功者とならせられしなるへし予常にいふ御
一生涯御難戦のうちおもひの外にあふなきことを含めるは大坂御陣なる
へしとはこれを反しておもへは也